

童の如く規律なき戯を爲さず稍物心づきては學問に勉勵し熱心に神に事ふるの道を研究し是をば日々の業とぞなしけるされば成長せし後は如何に學問し如何に智識を得てか神に事ふるの方法なるべきを思ひ終に或大學校に入りあつばれなる人物となつて神に務を盡さむと決心せりかくて大學に在りて螢の夕雪の晨研磨努力の功空しからず數年の後同輩のうち優れて卒業したりけり

さるほどに聖人は家に歸りて後如何なる道よりして神に務むる教の門に入るべきかと考へしがよき機會なく唯神より默示たまふとあるの日をぞ待ち居けるに當時此國に大饑饉あり巷を歩めば餓卒横はり街を行けば餓屍倒れあり悲しく食を乞ひ菜を求むるの聲四方に聞え哀に痛ましき風情見るに忍びざるの様となりぬ聖人は此時こそ我が神に務むるの道に入る時なれと思ひつきてやがてそが財産を盡く取り出だしそれをば爲し得るかぎりの力を盡し方法を運らして餓えたるに給與し凍え

たるに施與し聖人の庇護により玉の緒の絶えむとせる生命を繋げるもの數へ盡されぬほどなりけりされば聖人は我有てる財は悉く此時に恵みの料に盡て一物だになき身となりけるが此に又當時回教人アフリカに起り四方に兵を出して縦に國を奪ひ君を殺し勢力をさく／＼猛なりしが此國も其禍亂を免れず壯きもの俘囚となされ奴隸とされて賣買され或は若き娘は拘留て其國に拉れゆかれ亂暴狼藉擧ぐるに餘あり聖人の家居近く一人の老婆住みたるがそが一人の男子囚となりて拉れゆかれけるに頼みにたのみし一人の子にすれば老婆は狂氣の如く悲み聖人の許に走り來て我子を取り戻さむことを請ひて言ひけるは今此に僅の金あらば購ふとを得べければいかにもして助けたまへとぞ嘆きける聖人いと哀れに感じ急ぎ老婆の願をかへんとは思へども身に一錢の貯なくさりとて錢ならては何の効なし如何にせむと思案を爲しやがて決心したる上老婆よ汝が子は今何處に在る我急ぎ行きて汝の子に代り

アフリカに行くべしと申されければ、老婆はいたく驚き、何條さる事なるべき必ず心を勞したまふな、我身もすてに心を定めたり其わりがたき仰のみにて我子も苦み薄かるべしとて、唯管謝びて歸りける、聖人も爲方なく思ひ止みぬ。

さて聖人は財産なく兩親なくまたさる親戚も無きまゝ、我身を置くに心を勞せず頼みに應じて、大學校に聖書の講義を擔任ち教師の列に加はりしが、もとより才學兼備の聖人なれば、人々其學問と德行に驚き、聖書に在る世の光なりとは此人の事なるべしなど評しあひしをば、其地の司教聞きてやがて聖人を招き其補助とぞなしぬる、當時の司教は今の如く教會を治るのみにあらず種々なる人民支配の政治をも兼て執り行ひ、知事の如き役目ありけり、聖人は其地に暫く留りたれど、位高く役尊きは我目的にあらざれば、殊に心がけて人民の疾苦を助け、教の等閑ならぬを聴かせ愛を垂れ徳を施しけるゆゑ、人民舉て之を敬ひ、熱信なる道の人となるもの

多かり時に、エスパニヤの皇太子は佛蘭西の王家の息女と婚姻の式ある筈なれど未だ定まれないふにあらねば、此司教を遣はして約束を堅くせしめられむとせるに、司教は聖人も同じく行きなむには共に行くべしと申して、聖人を勸ければ、辭みかねて伴ひけり、行く途すがら聖人は使命につきて思ふ節はなけれど、至る所に貧しく困難せる人民の状態を視ていと心を痛めたり、殊に佛國南部の地は土地人民の不熱信なること無學なること多きに驚き嘆きぬ、此邊の人民はプロテスタン教の元祖ともいふべき異教の説に欺かれ、御主の定められし秘蹟は皆是理もなき事柄なりといひ、禮式等の事を行ふは無益なり心に信ずる所あらば、救は得べしと思ひ、信ずると行ふとを全く異なるものとなし、不品行不熱心は次第に流れていと憐むべき状態なり、聖人はこれを見ていたく此心を刺し、少しく憤怒の思も出て來り、今王家姻縁の使命を辭して速に此等人民を導かんとは考へしが、國王の命令且は司教と約せしと故に止を得ず、佛國の王

族に至りつゝ使命を果し國に歸りしが間もなく此度は息女を迎ふる使
命を受け兵士と數人の臣と共に佛國に行きたるほどに月に雲あり花に
風あるの古言に漏れず痛はしや佛王族の息女は尾花に置ける白露の風
に消ゆるが如く病の爲にあへなく世を捨てられければ人々齊しく愁傷
いはん方なし聖人は使命果すによしなくて空しく歸國せしが此に益々
此世の頼みかねたるを感じ位も身分もかへりて煩たるを思ひ司教と語
りあひて終に其職を捨てて羅馬の地にと往きたりける彼の司教と聖人
は羅馬法皇に面謁し異教邪説を撲滅するの許を乞ひ受け二人ともに尋
常の宣教師の如くなり異教人と戦はむものと決意し佛國南部の地方に
ぞ往きけるしかるに彼の司教は國に在りて知事の如き役目勤めし習慣
失せやらす御主の教へたまひしに背きて其衣より其所有品まで兎角は
富めるものゝ風あり或時は馬に騎り或時は車に乗りなどして其結構い
がめしかりければ傳道の効自からうすくはかしくしき結果なし聖人は

此事を前より心に感じ居ける故にいとも質素なる衣を着け馬或は馬車
に乗ることなく常に徒歩にて説き巡り食物其他の生活はもとより貧し
き状態にて唯管熱心に傳教せり
されば稍學問あるものは聖人の説教の深き意味を悟りて眞の教に改心
するもの多けれど無學放埒なるものは少しも其説を聞かぬのみならず
剩さへ悪行よく募り邪言を吐き非道を働かさながら狂人の如くな
り聖人聖堂に在て御彌撒の祭式を行ひ祈りせる時數多の未信者亂入し
聖器を破り神具を汚し手當り次第に騒ぎ歩き女は聖父の祭服を奪ひ被
り男は亂醉して大なる聲を發し亂暴狼藉をさわめまことに地獄の様も
かくやと思はるゝばかりなり
聖人は斯る暴亂に遇ふと雖少しも抵抗ぶとなく却てかゝる人民をば猶
更に道の正しさに導かむと思ひ其か爲に一の簡易なる書を著し其中に
人民の誤れる事どもを擧げ記して叮嚀綿密に説き破りければ雖人も其

書を読みて非事なりと抗辨ふものなく、畢竟皆其道理の至極なるに感服し、誠に眞理なりと心には従ふものから、悪念は容易に去らずなほ、この書冊の上なり、此書冊に奇蹟あらざれば信ずるに足らずと罵り、加之此書冊を火中に投げ入るゝも焼くるとなくば、それを初めて眞正の教道なりとぞ脅しける、聖人は此言を聞き驚きて思ひけるは、此書に録せる事ども皆道に合へる眞の理なれば、狼狽に神を試むべからず、されど其まゝに止むときは、彼等の攻撃は一層増すべしと、やがて心を決し、我住家に歸り十字架の前に平伏して、人民の爲に唯管祈り願ふところありけるに、尊き神は熱心なる聖人の志を受け、いれたまひ、其書を火に投げ入れ、必ず焼けざらむとぞ默示されければ、聖人は深く感謝をなし、日を定めて火中に書を投ずと知らせける、人民は之を聞き、我も我も其場に集り來り、雲霞の如く群りぬ、聖人は徐かに數萬人の目前に出て、汝等の請に任せて、今此書を火中に投ずべし、眞理は猛火も燒き難きを悟るべしとて、三度火を更へて書を

投げ入れたれど、少しも燃ゆることなく、猛火消ゆるも依然にて存しければ、人民は且驚き且呆れ、良久は言もなかりし是に依りて、多くの人々心を改め、道に隨ひける。

聖人と共に此時まで共に務めし彼の司教は、法皇の命を蒙りて、エスパーニヤに歸りしかば、聖人はいと本意なく、今まで二人の力にてすら容易くは道を傳へがたかりしを、唯一人となりては、殊に難義なるべしと思ひしが、心を勵まし、志を奮ひ、益々改悔の道を傳へける、聖人幼時より深く聖マリアを信じ、常に聖女の救護を仰ぎけるゆゑ、此に聖女に頼りて、異教者を導かむには、改心殊に効あらんと思ひ、思考の後終に奉教人が祈禱を誦ふる器となるべき念珠を定めたり、舊約時代より猶太人が毎日定まれる祈禱七回を誦ふるに、誤なからむ爲に持ちし念珠様の物なり、教會の初より信者が念珠様のものを用ゐて、百度ほど大主教を誦へしなるが、此のロザリヨの盛に用ゐられしは、今より三百年前の十字軍の時なり、そは多くの信

者は遠きイエルサレムに軍せし事なれば、書を持ち居るを得ず、其回数は今より明には分らざれど、彼の大主教を誦ふるに、此ロザリヨをもて繰り數へたり、其形も定まれるにあらず、誦へかたもまた調ひたるものならざりしを、聖人の定められしより、今日の用ゐかたになりしなり、まことに當時無學の人民のためには、よき方法にて、聖マリアに救護の傳達を乞ふ便となるのみならず、宗教の玄義をも之によりて會得せしむるなり、彼の大主教聖母教を誦へつゝ、十五の玄義をば、其間に感念し、御主の降生逝去及復活等の事蹟書によらずして、知るを得ざるなり、されば異教の人々も、それによりて容易に眞理を知り、改心するもの日に増しければ、聖人大に喜び恩謝の爲に、夜を徹して、ロザリヨを誦ふると數なりしが、漸く信者多くなり、事繁くなりて、一人にては事足らず、一層教勢を擴め、異教の痕を絶たむには、會を建て、多くの弟子を教へ、是等をして到る處に説教せしめむこそ、良法なるべけれど、其規則を設けやがて、羅馬に行きて、法皇の許可を願

ひける。
 時の法皇インノセンス三世は、聖人の願を聞き、之を許さず、今多くの會あれば、此上に會を設くるはよろしからず、折角の志ながら許しがたしと言ひけるに、聖人望を失ひ、法皇に別れ歸らむとしける。しかるに其夜法皇は夢を見たり、そは法皇が平常御彌撒を捧げらるゝ聖堂何の故ともなく、柱曲り軒傾き、今にも倒れむとするをば、彼のドミニコ、其側に立ちて支え居ると見て、覺めたり、法皇大に驚き、速に神の默示を願ふに、ドミニコは、會の爲に大なる力を盡し、且將來の力あること明に知らなければ、いそぎ聖人を召し寄せ、改めて會を建設をば許しける。聖人は此に我望を達し、喜び勇み國に歸りて、會を設け、多くの弟子を集め、教の垂れ道に導き、専ら傳道布教に力を盡し、其弟子を諸國に派遣したりしが、我朝の秀吉の時代にも、此會の教師來朝して、各地に信者を作り、聖堂を建て、ロザリヨをば熱心に誦へしと、歴史に記して明なり。

聖人は斯の如く苦心して教を擴めたる其効果は實に大なるものにて奇蹟の如きも數あり或時一人の婦人そが最愛の一子を失ひ呼べど叫べど答なき哀れなる死骸に取りつき抱きつき愁傷の餘に其死骸を携へて聖堂に入り來り聖人の前に轉び伏して其蘇生を乞願ひける聖人は其願を許しやがて麒麟を少時なし手をもて死骸を撫てたるに今まで少しも生なかりし子は忽ちに蘇り其母を見て笑しげに近く執着き愛らしき手をもて母に抱かれむことを願ひありし悲みは消えて喜悅の聲堂に充ちたり婦人は驚き喜び唯管聖人に感謝の意をぞ表しけるも道理なり

聖人は平常肉身を苦むると常ならず破れたる衣を着甘からぬを食を喫ひ夏の日の燠く如き炎暑にも冬の夜の切るが如き寒にも厭はず倦まず傳教に身骨を碎きけるゆゑ多年の疲勞漸く出て來て前途はそれと知られければ或日御彌撒の終りし後我居室に弟子等と呼び寄せ申しけるは汝等常に心に銘じて貧乏と謙遜を守るべし必ず過て富みたるに誘はれ

傲慢に導かると莫れ是我が終に臨みて汝等に遺す言葉なりとて談し終りて倒れければ弟子等扶け起して寢臺の上にあげんとせしに聖人はこれを止め御主は吾々人間を救はむ爲に十字架にかゝりたまへりましてや吾々賤しきものをや吾は此板の上にて死すべしといひて程なく永眠に就きたりけり年五十一歳なり弟子等聖人の屍骸を洗はんとせざるに其腰の周に鐵鎖縛りあり起臥歩行にも離すことなかりしと覺えて其鐵鎖處々肉にくひ入り居たり人々其肉身を苦めて靈魂を養ひし聖人の深き志に感動せぬはなかりしとぞまことに稀なる聖人にてありける

聖ヒロメナ致命者

八月十日

既に此世を去りし聖人を尊びまたは聖女を敬ふをば未信者はこれをもて偶像の教なりとて攻むることあれどもこれ天主教を知らず神の道を知らざるもの、言語なり人と人と相交はりても聖く賢きものをば哲人

共に之を尊敬するは尋常の理ならずやしかるを況して世を去りて無き人となりし者の聖き賢き人に對して之を敬ひて後の人の模範となしこれを崇めて今の世の龜鑑となすは世と人に益あること知るべし世と人に益あることは神の旨に適ふなり今其證となるべき一の傳記を録すべし。

教會起りてより後三百年間は奉教人の迫害の時代に於て其困難辛苦は筆紙の及ぶところにあらず殊に羅馬の城市の如きは中にも慘酷の限を極めたり凡そ信者たるものは少しも集りて祈禱説教等の事をなすこと難く盡はもとより夜といへども探偵をさく／＼嚴しくして少しく道物信者と見れば直に刑罰に行ふなりされど奉教人は熱心誠意水火をも恐るものならねば諸共に相計りて都城を少しく隔てし地に一の洞窖を穿り其中に幾何となく室を設け路を作り廣間を中央に置き長さ五六町に度りしものありけりとなむその處をば信者の集會場と定め充分に用意を

なし夜に於て此に集り聖體告解の秘蹟を受くるとなせりかくて夜を明し曉近くなれば一人二人づゝいと忍びやかに立歸り少しも探偵の目に觸れざるやうなしけり又教の爲に命を神に捧げしものは此洞窖に葬り埋めける。しかるに此洞窖終に異教なる敵の發見す所となり大に迫害の事起り信者は老幼の差別なく斬られ殺され其數幾千といふを知らず殘虐無道及ばぬところなく剩へ其人々の死屍を一によせてを此洞穴に埋め再び信者の集會なからしめんとて盡くさしもの大なる廣き穴を埋め了りぬ。されば日を経月を重ね年經過ぬれば生々しかりし土も何時か草出て生じて唯其邊に洞ありしとのみ言ひ傳へられて是ぞと思はるべき表もなく春の花は幾度か開き秋の月も幾度か照し樹草茫茫として荒れ果てつ幾百年の歲月は夢の如くに過ぎ去りぬ往昔の事問ふべきものは彼方此方に散り布ける石あり石は無言して答ふるよしなく空輝せる月に質

さむに、月もまた無言にして語らふやうなし。されば今より百年前奉教人
 また古昔の人々の事蹟を研究する學者、葦相計りて洞穴ありしといふ地を
 ば鑿り撥さけるに、種々の珍奇らしき物多く出でたり。殊に珍らしと覺え
 たるは一箇の墓なり。總て陶器をもて製りたる棺あり。其蓋に文字、臘るげ
 に記して「ヒロメナ」汝に平和と讀まれたり。棺の蓋に刻みて「一箇矢一本
 樹の枝一あり、其彫刻古雅にしていと尊じ、人々打集りてこれを見、學者等
 古の書などに考へ查べて「ヒロメナ」とは女の名なる事、平和とは「基利督
 信者」といふ意義なる事を定め、又刻みたる「鏑」は其致命せし時、鏑を首に懸
 けられて水に沈められし記なるべく、矢は往昔信者を殺すときを的とな
 して、壯き人々の弓矢の修行に供へしとあれば、其義によりしなるべく、
 樹の枝は勝利の戦に凱旋して用ふる記號なれば、能く道の爲に屈せず、挽
 まず致命したるの詔念なるべきが故に、此棺は教の爲に致命せる女の屍
 を葬むれるものなりとぞ定められ、畧分明になりけるを人々いまだ疑ひ

居けるに、やがて棺の蓋を發きたれば、中に骸骨一つあり。學者等の調査に
 て十五歳可の女子なると知られたり。足の方に一のいと古るめきたる小
 さき塚あり。其中に黒く乾けるものあり。之を分析して人の血液なると判
 然せり。こは當時教の爲に命を致すときは、他の信者集りて其傷より流る
 る血をば布片に浸し、そを絞りて小さき瓶に入れ、致命者の屍に添えて葬
 りけるなり。
 かくて此珍らしき墓は人間の智即ち學術の力によりて古昔の致命者な
 ること分明なりしかば、此事大に評判となり、様々の傳説立ちけれど、如何
 なる事にて致命せし人なるか、如何に事を爲せし人なるか、如何の身の上
 なりしか、それらは絶えて知るよしなく、書にも傳説にも似寄りたる事蹟
 なし。奉教人は是を正しく聖教の爲に命を捧げしものならば、其確なる證
 として明なる表徴を現はしたまへとて、熱心に神に祈りける。
 また彼の瓶の乾けるものは、少しつと水晶の杯に盛りて之を猶よく調べ

ひとせるに其光ダイヤモンヤの如く輝きければ學者等其尊きを恐れて
 調査をば止めけるさて彼の墓は毎日參詣人雲の如く幾千の人々往來織
 るが如く其聖人の榮を顯はさんとを願ひけるゆえ人より人に傳へ國よ
 り國に傳へ信者たるもの盡く此事につきて奇蹟をまつことさながら早
 天に雨を思ふが如ししかるに夏去り冬來りて早くも四十年の星霜を經
 て神は信者の熱心なる祈禱に嘉納たまひけむいともいやちこなる奇蹟
 をば示されけるそは此墓の主なるヒロメナが各百里程隔たり居る信者
 の人々三人に顯れたるなり三人は皆名ある信者にて一人は學者一人は
 靈父他の一人は童貞なり聖ヒロメナは同じ時同じ事蹟をば此各異り
 たる地の三人に顯し後三人が見聞せしものを比見るに符節を合する如
 く露も達はす誠に稀有の事どもなり今三人のうち童貞の熱信なるより
 此奇蹟彼に現はれたる願末を語るべし。
 此童貞は元來熱信なるものなれば常に神に祈禱を爲し或時聖女の事蹟

につき如何にもして神の告示を得て其事蹟を知りたきもの其榮を現は
 したきものと思ひ神に唯管祈念しけるに何時となく我身を呼ぶ聲の聞
 えければ頭を擧げて見るに何ものもなし再び三たび聲あるに夢なるべ
 しと思へどももとより白晝我身はたしかに今祈りつゝあるなれば夢に
 はあらず漸くに意注き且驚き且畏み平伏てぞ猶祈禱を爲し居ける其時
 いと神々しき聲にて宣ふやう吾身は八月十日に基督教の爲に命を致せ
 し女なり吾親はギリシヤ國の王にして兩親共に未信者なり家は王族に
 して身は一國の王位に在り富貴安榮兩つながら之を得て世に足らぬも
 のなきものから年經るまで子なかりければ是のみ寂しく憂はしきとは
 思ひ國の諸神に祈念を爲し只管一子を授けむとを願ひけるされど其効
 驗更になく共に心を苦め居たる柄折程經て羅馬より一人の醫師來れり
 此人は正しき神の信者にして其醫術はいとも上手なりとの評判高かり
 けるまゝ吾兩親は早速に此人を招きよせ如何せば子を得むかと問ふ彼

の醫師答へて自ら無き子をば得んとせらるゝには學問の力をもてするも醫藥の力をもてするとも到底効果あるべからず唯眞神の信者となり熱心誠意もて祈らば必ず其効果あるべしと申しければ兩親は直ちに信者となり是より熱心に神に祈りたりければ果して一年を経て吾身を生またり兩親の喜悅いかばかりなりけむ吾名をヒロメナと稱けたりこはキリシヤ語にて光の子といふ義にして神の恩を記念する親の意と知られたり我兩親は初より熱信なる奉教者なりしにあらず吾身を得たき心より神に導かれしなれば洗禮を受けたるのみにて其信仰いと弱かりしされど其間に出て來しわが身は祈りて神より授けたまひしによりけるにや幼時より神に仕ふる心厚く御主より外に望む念なければ其愛を顧さむために神に一身を献ぜむとの祈誓を立て熱心に教を聴くより外に樂とするものなく兩親は一子のとて愛育從からずわが身の爲すがまゝになし置きたりわれ十四歳の詩父は母と吾をば携へて羅馬の國に至

りけるそはキリシヤ國は此時羅馬の配下となり居けるゆゑに國王なる我父は何か願ひの筋ありて皇帝の前に出てにける時の皇帝はデオクレジャンと稱していと悪行の評高く世にあるとあらゆる獸を集め來とも此王にはいかで優るべきと思はるゝ不品行邪淫の皇帝なり我父は敬禮を厚くなして政治の事國の事など種々願ふ節ありけるを皇帝は鼻にて應ひ前ほどより父の後に平伏し居たる我身に眼を注げ折々儼むが如く我方に眸を凝らしたるを兩親は少しも知らず我は早く神の默示を得てやがて身に降りかゝる係累の解くに難き事情生ずべきをば悟りたるに果せるかな皇帝は我父に打向ひ突然に言をかけ何事にも汝の願を許すべければ汝が娘をもて吾が妾に與へよとぞ申しける吾は傍に在りて打驚きいかに不徳の皇帝ぞ父は定めてこを辭ひたまはんと思ひしものから心躍り胸悸きて如何に成りゆくぞと案じ居けるに哀いかな我父は洗禮を受けしは名のみにして深く教理を辨ぜられずさては我心

をも問ふとなく、唯々皇帝の威に懼れられ異議なく差出すべしと答へられけるこそ是非なけれ、皇帝はいといたく賞て喜び衣類調度何くれとなき準備の爲に三日の猶豫を興へられ我等親子は皇帝の宮を退きて歸館しける。

館に歸るや汚や吾は涙を流し胸ふさがりて兩親の前に伏し今さら兩親の御受けしたまひし事をば辭むは不幸に似たれども辭み申さてかなはざる苦しき事にて候なり、兩親も知りたまふ如く吾身は神の信者にて御主キリストの御名の下に立つものなり、神はかゝる非倫る所行を爲すを許したまはず、假令皇帝の命なればとて道に缺けたる此の事は従ひがたし、況してや兩親も知らるゝ如く神に祈りたまひて我身生れしと申されしに候はずや必ずく神の天法を犯して皇帝の妾なむどになり候はむことはかなふまじく候へば、まことに兩親の命に戻るやうなれども許したまへかしと唯管に嘆きけれども、靈魂明ならざりし我兩親ははかなき

現世の榮花に迷ひ且は一たび皇帝に申せし言を無になしがたく猶も吾をば説きすかし、一途に妾となるは身の幸榮なりとて勸めつゝ更に我言ふことをば許さざりけるゆゑ、今はや爲方なしと心を決し唯々神に祈り居たりかくて我が道ならぬ奉仕の日は近づきつ約したりける三日の限となりければ、皇帝よりはいと華美なる乗物して迎ひなりと人遣はしければ、兩親はいそぎ我をすゝめて行かしむ、我ははや心に決せるところあるものから其罪の兩親に及ばぬ爲にわざと其命に従ひやがて宮に行きて皇帝の前に出て心を定めて妾とはなり難しと辭み且は皇帝の信者を嫌がゆゑに我が信者なるを知らば却て思ひを止むべしと若き女の心に思案し吾は熱信なる奉教人なれば妾の如き行は聽くだに厭ふ事にして愧づべき事にて候と忌憚もなく言ひ放ちければ、皇帝は烈火の如く怒り、悪くき女の言なり速に囚ふべしとてやがて我身を八重繩に縛りあげ獄舎の中に囚はれけり、覺悟の上の事ながらいと嘆かはしき事にして苦

みいはむ方なかりしかくて四十日が程は毎日僅ばかり與へらるゝ食物にて、鐵鎖に縛られたる身命を繋ぎ其間は熱信の心を勵まし倍々奮て力を落さず弱き心の出てぬやう唯一神に祈り恵みを願ひけるしかるに聖母マリアは御主を抱きたまひて顯れたまひ汝は三日の後は天國に在らむとの默示あり我は今ぞ世に於ける我肉身の終局なりと思ひて翌日に至れば果して獄舎より曳き出だされ汝はキリスト教徒にしてキリストを崇むること皇帝の命より重きにより其罪いと重しと宣告を受け死刑に處すとぞ定められたりかくて刑場に拉れゆかれ兩三人鞭をもて打ちする政頭に鎗をかけ羅馬の川にぞ沈めけるにいかになしけむ其細切れて鎗は沈み我は水面に浮び出てぬ數千の群衆之を觀て心に威伏の念深く是は無罪の人なれば殺すべきものにあらずと神の現はしたまふなりとぞ言ひあへりけれど皇帝少しく心に悟らず此度は命じて四方より矢を放たしめければ我全身は鏃の如く矢をもて身を埋めたりかくならば

やがて死すべしとて再び獄舎に囚へたり吾は生たる心地なく夢の如くなりしが忽ち醒むるが如く覺えて我身を願せば今まで在りし全身の疵は痕かたなく癒え身心平常に異らず官人等は之を見てこれぞ魔術の所爲ならむとて再び魔法を破る方なりと稱し鐵をば悉く火に焼き眞紅となして射つけたりけるに不思議や神は恵みたまひけむ少しも我身に中らず却て其矢は後に返りて射たるものにぞ中りける群衆の人々聲を上げて此無罪の人を殺すは國の耻辱なりと叫び心に深く悔を爲し邪を去るとて正しき神の道に歸するもの多かりしかば皇帝の官人どもかくて長時を費さむには變事の出てむことを恐れ急ぎ刀をもて我頸をば斬らせたりかくて我肉身は亡びぬ我此浮世に在りし程の始末はこれなり今人々の我を知らむとさるゝに依り神の許を請ひうけて斯くはふん身に告ぐるなり』

これヒロメナが眞に現はれて告げたる身の上の願末にしてまことに

彼の皇帝の死が三百十二年とある歴史に頼りて測るときは、此事は降世後三百年頃の事なりしなり。此聖女ヒロメナは凡そ一千五百年の間は、昔の下に埋もれ草の陰に隠れ其碑空しく雨に淋り月に晒されあはれ秋の蟲の集く棲所となり春の蟻の堤繕ふ土と共に朽ち果なむとしたりけるを神は此十九世紀の年となりて奇しき事もて世に知らせたまひける。彼の三人のものは各此事を人に語ると共に三人齊しく同じ物語なりけるを知りそを學者の考へ調べたる事に照し符を合せたる如くなり彼の錯の事矢によりて致命の事且は聖人の女子なりしこと等少しも違ふところなかりしかば人々は是に奇蹟を感得し聖女の墓に詣ずるもの數限りなく各聖骨を崇め敬ひ神の恵みに感謝を表したりかくて此聖女はいや高き聖人なるを深くも證據したまふ神の御心なりけむ聖骨の前に於て奇蹟大に現はれけり十年二十年の間病みて不治なりと断念し病疾も聖骨に觸れて全快しましたは跋のもの雙脚舊の如くなりしなどいと

も多かりしされば教を敵となし迷を執れるものはこの事をもて妄誕なり虚偽なりと譏れるものもありしがそが中にいとも烈しく敵せし人々に此聖女は顯はれて其人は忽に改心したりけるまことにこは古き往昔の談にはあらずして文明なり開化なりと唱ふる此十九世紀の初に於ていと著しき事件なりされば聖人の聖骨を敬ひ往にし昔の人々を崇むるは神の靈旨に協ふとにて偶像を信じ邪教を奉ずるとは大なる異ありこれ神の明に證したまひし所なるに非ずや讀む人よく此心を昧て聖人の善行徳爲を模範となしこれを敬ひこれを崇め熱信誠意もて神の道を踏み御主の教に戻るなからむことを務むべし。

尊者ミカエル、ミ致命者

八月十二日

尊者は一千八百四年安南國に生る安南は北の方支那と境を交へ西の方暹羅に隣れり不幸にして兩親に早く逝られしかど兩親共熱心なる奉教

人なりしかば幼なれ共それ心にしめて忘れず伯母なる人の孤なるを憐
 みて引とりて育てしかど片時も奉教の事を思はざるなく人となり至り
 て幸なりしかば己が両親の面陰だに得知らで一日だに孝養をつくさ
 りしを嘆き春の朝秋の夕物につけ事につけ教行の涙落て袂を濡す毎に
 神前に跪きて父母の爲めに膝を捧げこそせめてもの心やりとはなしけ
 る夏去り冬來りて尊者漸く歳重なり心を學事に止めつゝ些にても金を
 得れば決して他の若人の如く酒を買ひ或ははかなき一夜の快樂をとる
 が如き不品行をばなすことなく有益なる書籍に之を投じて不亂に眼を
 すを此上もなき樂としけりかくて尊者は父母の財産を伯母より譲り受
 けしかば廿歳の折同じ奉教人の内に於て熱心なる聞え高くかつ温良貞
 淑なる一女子を娶りて妻とはなしぬ
 其後尊者は貧者には金錢をめぐみ病者には醫業を施し慈善の行多かり
 しかば早く村民の人望を得て教を奉ずる者も又奉ぜざるものも村中一

人の尊者を惡評ものなく名聲村中に冠絶して幾何もなく選まれて村長
 の譽を得たり此國の村長と云へるは我國の村長の如きにあらず恰も行
 政廳裁判所などを合したるが如き有様にて甚だ重く困難なる役目なり
 されば是迄此職に居て多くは正道を踏む者なく皆賄賂を得て邪を正と
 なし正を邪とするなど汚行の評のみなりしかば尊者一度此職を得てよ
 り其惡弊を一洗して正義廉直を以て心とし奉教者未信者の別なく公明正
 大事を處し賄賂は退けて取らず貧者の納税などの力なき者には自の金
 錢を出して是を購ふなど前の村長とは雲泥の違ひなりける殊に此村は
 半は信者にして半は未信者なりければ處し難き艱難なる事件も少らか
 ねど能く堪へ忍びて明断を下ししかば是迄未信者なりし人々も其教
 理の尊きを悟り外教を捨て改教する者も數多出て來りける
 然るに其頃此國に於ても聖教に對して非常なる迫害起りて教を固守る
 者は其爲に命を捨て教を大切なるを顯せしもの數千人の多さに及べ

り此恐るべき迎害漸く此村にも及ばし來りて一日郡吏の捕り方數人來つて忽ち尊者及其舅と此村の靈父三人をなさせ用捨も荒繩に絆々と縛めて郡吏の廳へと拘引せしかば村民の驚き一方ならず斯る親切なる善人を失ふは村中の不吉なり如何にもして是を救ふ手段を盡さばやとて大に一堂に會して相談しけるが結果は賄賂を郡吏に贈らんと云ふにありて四方より金銀を募りけるが此事いつか尊者の耳に入りしかば人をもて村民に云はせけるは余は今救の爲にかゝる苦みを受くるなれば却つて悦ばしく思ふなり然るに諸君余を憐みて金銀を集めそをもて余が身を購はんとせらるゝ由まことに御厚意謝するに餘りありされども前にも云へる通り此度の禍は余の悦ぶ所なれば此如き御配慮はまことに益なきとにつき其金員を以て貧困者を御救助あらば余に於ていかばかりの悦びなるべきと。

さて尊者は獄に在て同囚の人を見るに其多は皆惡き者のみなりしか

ばいたくこを嘆きて古の善人の話などを教へて一重に善道に導かばやと勤めたり郡吏は尊者の人望他に異りてよみすべきを知り居ければ此者をさへ教を捨てさすれば他の心のまゝなるべしと思案しければ威權を以て教を捨てよと命じたり尊者は是に答へて余け此世に嗚々の聲をあげし以來教を固守するの一人なり如何に貴官の命なればとて決して是を捨つべきにあらずと斷乎として謂放てり郡吏は之を聞て大に怒り憎き男の言葉かな其儀ならば痛き目見せん誰かある來て此奴が背を打裂けと罵る聲の下唯と答へて一人の獄卒把り太なる獄鞭をわけて碎けよ裂けよと打ちしかば何かは以て堪ふべき皮破れ肉崩れて鮮血衣を浸して見るもいふせき有様を郡吏は心地よげに打見やり汝教を捨つんばかゝるうさめを見るべきぞはやく邪を去て正につけさらばなをもか

らさめ見せん心を静めて思案せよとて其日は獄に下げられけるが其後日々にかくの如く絶へ入れば藥を與へ元にかへれば始の如くしされ共

尊者はちつとも屈せず、尙初の如く答へたり。郡吏は此如くの苦を興へしかど尊者の心變ぜざれば獄卒に命じて手を取り足を引きて無碍にも十字架を尊者の足下に踏ましめ、汝既に足下に十字架を踏むは是にても救を捨てずと言ふや尊者答へけるは余十字架を鞋もてふむと雖心は決して是をふまず、なんぞ救を捨ると言はんや斯く手を變へ品をかふると雖尊者の心變ぜざりしかば郡吏もほとく困じけるが一日温言を以て勸めけるは汝若し此教を捨てんか我必らず王に奏して高位高録を授くべし若又情とはくして教を捨てずと云はば、白刀立るに汝が首に落ん、汝此兩者の内一方を撰ぶべきなり。尊者答へけるは余は白刃の首に落ん方を撰むべし、現世の高位高官は浮べる雲の如し、位人臣の極に達すと雖唯是高梁一炊の夢のみなり。余は天に逝て降位を望まんと欲す、天に往て無限の高位を望むものなり。郡吏又言ふ我汝を見るに血氣なる壯年なり、汝今此世を逝らば誰か又汝の妻子を養ふものぞ尊者答ふらく余天に逝るとも

余が妻子は決して養を得ざる理なし、余の如き愚物此世に在りと雖も充分に妻子を養ふの力なし、余一度死せば限りなき力を有し給ふ神は恐れ多くも妻子を養ひ恵み給へばなり。郡吏は此如く温言の毫も効なきを以て或日又々尊者をして十字架を踏せんとせり。尊者大に叫びて曰く、貴官若し國王の像を履んとを他人に強ひらるれば心よく是を履み給はんかと郡吏大に耻烈火の如く怒つて、十字架を手に取り尊者の面に投付たり。

此時尊者の妻は天主堂に走りて香臺の前に跪き、良人の苦の爲に教を捨つるが如き行の毫もあらざる様に熱心に聲をあけ慟哭し祈りける。かくて妻は祈の後自ら獄に往て良人に見へ、妻のと子供のと決して心にかかけ給ふべからず却りて困苦に勝へずして教を捨てらるゝが如きとあらば如何ばかり慍く恨しかるべきゆめ、心弱きことなし給ひぞとて良人に力を添へしかば尊者は妻の心如何あるべきと思ひけるが、今目前に妻

が雄々しき状を見て心おちいて悦ばしく、妻の飯りし後熱心なる叩謝を
 神に捧げたり尊者の住家より此獄屋に至る迄は路程も遙なりけれ共其
 家族はかはるく訪ひ来て其心を慰めたりその中に別て憐なりしは尊
 者の娘の十歳ばかりなるが獄の前に跪て父の爲に神に請り父上が神様
 の道を捨て玉はず固く守り給ふ様に御力を盡し給へと涙流して祈てぞ
 ありける是可憐なる有様を見ては鬼の如き獄卒等も獄鞭を涙に濡して
 かゝる善人を獄に繋ぎ置くは慥くべきと思ひぬ
 此に又尊者と共に拘引せられし男は齡既に古稀を過ぎて唯さへ力なき
 老人なるに此に來りしより此方尊者と同じく責打たれしかば次第に力
 衰へて勇氣も緩みて見えしかば尊者の心配一方ならず或日男に打向ひ
 たとへ君苦に勝ち給はて教を捨て給ひて命ながらへ給ふとも既に老年
 になられたれば餘命幾何も之あるまじされば此に教の爲に致命して永
 き快樂を受玉はん方遙に増してたのしかるべし願はくは余が言を聞入

給ひて必らず悪き心を持ち給ふべからずと涙を流して申ければ男も此
 言を聴て大に力を復し勇氣始に十倍せり尊者は此様を見て大に悦び數
 多度天に謝し其後は成べく男の苦を軽くせんとして數なる拷問の鞭を男
 には僅少し我身に多く受けたりけるかくの如く皆教のために死せんと
 を願ひしかば郡吏も終に其苦みを與ふるも益なきとを悟り一千八百三
 拾八年八月十二日宣告を下して尊者及び其男靈父の三人を死刑に處す
 るとはなりぬ宣告文に曰く

右の者俄國教を捨て擅に邪教を奉じ國人を惑はす段不届至極に付斬
 罪に處するもなり
 かくて三人は告解聖牒を領しつゝ法の場に進みけるが其有様恰も祝宴
 の席に至るが如く滿面に喜悅の色溢れて數時の後斷頭場裡の露と消え
 んとは見えざりける
 さる程に村民を今日しも尊者ミ氏斬罪の刑に處せらるゝと聞えしかば

老若男女の別なく告別にとて我も我もと集ひ来て數千人の多きに達せしかば路傍はさながら黒山の如くミ氏の爲に祝す、ミ氏の爲に慨ひなんと思ひの辭をのべてしばしは鳴りもやまざりける尊者は是等の人々に向ひて余は今此世を逝て天國に至るなれば此上もなき悦びなり百年の後再び諸君と相見えん諸君願はくは自愛せよかくて法場に至りけるが用意既に整ひて時刻もはや迫りぬ尊者の靈數分の後は天に逝て又返らじとぞ見えにけるかゝる所に群集を左右に開きて走り來る者あり誰なるらんととみれば尊者の嫡子今年僅に入歳なるが唯一人走せ來つるなり何をか云ふと衆人耳をすませば兒は父上が今神の爲に此所に生命を捨て給ふとを悦ぶ兒も又成長の後かくぞあるべき願はくは天に在して待給へとて父の前に跪づきつゝ懇めたり集ひたる人々唯アと言て涙を流さざる者なし

尊者は此勇しき我兒の有様を見て心の内いたく悦びさて郡吏に打向ひ、余は既に斷頭理場にあり然れ共願はくは余を最後となし給はらんとを望むなり如何となれば余が勇は見らるゝ如く古稀にあまれりさるからに心のみはたしかに見ゆれど或は他の人が首切らるゝを見れば心おくれのなきを保せず故に最初に斬首あらんを願ふなり郡吏は此言葉を聞はてしげにもと思ひけん尊者の請のまゝに許しけり

刻は漸くせまれり太刀取のやとかけたる聲の下尊者が勇の首は前に落ちたりつゝいて靈父の首も地に落ちたり尊者の首足亦所を異にせんとする瞬間太刀取は尊者に向ひて叫きて曰く汝余に今賄賂として些少の金員を贈らば汝が首の痛を去るべし若然らずんばからき目見るべし如何にぞや此時尊者は眼を閉ぢつゝありしが是を聞きて頭を振り余はかゝることをなさず如何にとも汝のなすにまかすのみ此に至りて太刀取りは奮然として白刃を閃かせり嗚呼尊者の首は五太刀六太刀にして切はなされぬ嗚呼尊者は既に天國に趣けり

忽ち見る半空に一羽の征鳥あり尊者の首地に落る時サトと申し來て宜告文を郡吏の掌より奪ひ去中空遙に昇りぬる誠は是宜告文を天に迄訴ふるならんとおぼえて恐れぬ者ぞなかりける。

尊者時に歳卅四後世永く其名を留めぬ。
尊者の性質既に器是を盡す然れども尙洩れたるもの一二を左に録す。
尊者最溫柔寛仁よく奴僕下婢を撫育し曾て一度も憤怒罵詈するが如きとをなさず一心唯平和をむねとし家族中一人も未信者を混ぜず朝は一室に會して祈禱を行ひ夜は一室に集りて教の道を談したるが曾て其妻朝の祈禱を故ありて怠りしかば靜に之を責て以後を誠めけり又最感ずべきは告解の秘蹟を領する時必ず前より二日間家人他人の別なく之を遠け一室に坐して靜に礼明て之を領するを常とせるとなり或人尊者に問ひて曰く君何故に此如く町重に之を取扱ひ玉ふや答へて曰く告解は之神前にて白状なすとなれば重にも尙重を加ふべきなり告解を受ずして死する時は自らの怠にして誠に恐るべきとならずやされば此秘蹟あるとは實に有難きとどもなりと。

聖バルトロメオ使徒

八月廿四日

聖人は猶太國のカリレヤに於て生れ漁者の子なりバルトロメオとはトロメオの子息といふ意義にてバルとは息子トロメオとは其親の名なりニアヤ國の風習として人を呼ぶに誰の子息といへると多し聖人眞の名はナタナヘルと云ふヨハネ傳一章四十五節以下に詳し使徒フカリボは救世主の事を會得して或時ナタナヘルの處に來り己が知れる救世主の事を談し汝も共に我と同じく主に従へと誘ひて御主の許に至れり御主はナタナヘルを一目見たまひて其正直に忠實なるを知り此人は眞のイスラエルの人なり其心少しも詭譎なしと仰せられければナタナヘルは大に驚き救世主が一目見たるのみにて我心をよく知れるを畏みもと

より正直熱心なるととてかねてより、救世主の降生を望み居たるとなれば、此に御主を其人なりと悟り喜びて御主に従ひ有てる物は、盡く捨て去りて熱心もて教を守り、よく御主の下したまひし道に違ふことなく御主上天の後に於て暫時猶太國に留り、其後東國の諸地を巡遊、殊に印度に教を傳へたり。印度は從來猶太人とは商法によりて相往來し、交通自ら親しかりしゆゑに、舊約聖書も早くより印度に渡り、それが爲に救世主の降生すべき預言をさへ知るもの多く、且は學問の道も開け居たりければ、聖人の其國に至りて教を説くに當り、救世主は既に此の世に降生せし事、救世の事蹟等を聞き皆喜びて教を求め、殊に聖人は神に頼りて奇蹟を顯はしければ、倍々教の勢力を得、信者次第に増し加はり、一邑盡く奉教人となりしもあり、かく盛んになるに従ひ、聖父司教も有るやうになりて、充分に基礎を据ゑ、はや聖人在らずとも教會ますく盛んならむことを認め、聖人は印度を去りて猶太との間に在るアルメニヤに到り、教を擴むることとな

れり。

(因に記す印度の宗教の事につき、プラマ教なる教あり、其教宗の聖經と稱するもの、其禮式其教理等大に基督教に類似ものあり、これは古昔より早く猶太人と交通を爲して舊約の事を聞知、又此聖人より基督御主の教道を開きて自ら出て來しものなり、今これを詳に述べ説くは、此傳に關係なければさし措くべし、詳しきはプラマ教論と名くる書によりて看照べし)

アルメニヤ國は往昔繁榮を極めたる土地なりしが、今は唯名のみ残りて、榮華に飽きし人民は戦争の血を流して、ベルシヤ國の領地とせられ、國勢全く地に落ちて、當時の面影さへも見ることもかなはず、いと哀なる國となれり。

聖人はアルメニヤに入りて教を傳へけるが、此地に一大寺院あり、そが寺に有名なる偶像を安置し、吉凶禍福はいふもさらなり、未來永劫の事を

預言し、疾病災厄を癒し、顯驗顯著にして崇敬いとも比なしとて、人民の信仰大方ならず、參詣の群衆常に充滿たり。しかるに聖人の此地に來りし其日より、偶像は黙して言はず、禍福を問ふも答へず、疾病を祈れども應驗なく、未來の事はもとより言はず、不思議の事も行はざるやうなりければ、寺の僧侶大に怪み訝り、人民も呆れたる心地し、如何なる故ぞと罵りあふ。もとより聖人はいと貧しく扮装して此地に來りしことなれば、其人としも知る由なく、何の關係ありとも認むる由なし、されば此事四方の評判となり、國王にも聞えければ、非常に憂慮をなし、人民皆驚き擾だち、彼の偶像は我々人民の鎮なるに斯くては、此後の運命覺束なしとて、群衆打拉れて寺に詣て、偶像の前に拜伏し、あはれ尊き我等が偶像我々人民と國とを捨てたまはず、是までの如く救護を與へたまへかしと頭を叩きて嘆き願ひけるに、彼の偶像聲を發して言ひけるは、基督の宗徒一人此地に來りし故に、我は既力なしと、其聲もまたいと哀氣なり、人々大に驚き顔見合せて良久

言葉なかりし、基督の名は初めて聞きし事なれば、人々疑ひ惑ひ、さるにても基督とは如何なるものぞ、また其弟子とは何人ぞや、我等が崇むる偶像さへ恐れたまふを思へば、國王の如き勢力あるものにてこそあるべけれ、さるにても此地に來り有るならば、かならず留り居るならむと、人々手を分ちて搜し索めけれど、知られず、皆不思議なりとぞ言ひ居たり。さるほどに聖人は粗服をまとひ、粗食を爲し、賤しきもの、風情して或貧しき家に宿をもとめ、もとより知人としてはなければ、如何なる方法によりてか教を説きはじめむと心を碎き、日夜神の照臨を仰ぎ、熱信もて祈禱をなし、其數百回に及べりといふ、しかるに五六日を経て、彼の寺に不思議あり、偶像の應驗一時に止りて、基督の宗徒に恐れたる事をいひ、人民は其宗徒を探索むるよし、人々の語りあふを耳にしければ、聖人はいと喜び、是神の助なりとて、急ぎ其寺に至り、公に語りて、基督の弟子は我身なり、天地廣しと雖、眞の神は即ち基督のみ、他に如何なる神の名ありとも、そは皆偽

の名にして悪魔の所爲なれば基督の前には其權力を施す能はずされば我等の如き賤しきものすら基督の名によりて此に遣されたれば彼の偶像は何事も爲すことかなはず忽ち其應驗を止めたり是偶像の崇むるに足らざる證據なりと説きければ僧侶と人民は之を聞き我々が信じたるものに對し悪言を放つやとてすてに聖人を害せんとしたりしを聖人少しも屈せず撓まず神に祈りつゝ熱心面に溢れ益々明に説き語りしかば人民は心を開き疑を晴し大に感ずるものもあり僧侶は言屈して服しける此事國王に聞えて急ぎ聖人を召し寄せ詳に其談を聞き且驚き且畏みたり國王に一人の娘あり前かたより悪魔に憑かれいと恐ろしく淺ましき状態にて國王はいたく憂ひ僧侶人民共に彼の偶像に快復を祈りしが其驗なかりし國王は今此事を聖人に語りて救助を乞ひければ聖人は其娘に逢ひ良久祈念の上十字架をもて其頭に印をなしけるに悪魔は忽ち退き去り娘はもとの如く快復したり國王はいといたく喜び其國の習

として多くの金銀と數百の駱駝を瓊瑤にせむとしたるを聖人は固く辭み我は今世の財貨を望まず身に一物の要むべきなし唯望むところは人類の靈を救ふ事のみなりとて靈魂の貴むべき事靈魂の永久不滅なる事御主基督が救世の事業遺漏もなく語り猶偶像の拜すべきものにあらざる事其行爲は皆悪魔より出てたるものにて悉く人民を感ず爲なる事を説きそれよりその證據を示さむ爲に國王を伴ひ多くの人民を寺に集めやがて彼の偶像の前に至り聖人は聲高く汝眞實の事を吐くべしと命じけるに偶像は忽ち聲を發し我は唯一箇の作造れたる像のみ元來神にあらざる神は天地に唯一にして今我前に立てる聖人の信ずる神こそ眞の神なれ今日まで我爲せし不思議は皆悪魔の巧計にして眞の奇蹟にあらずと申しければ國王は大に怒り直に偶像を外に出し斧を以てさんぐに碎き毀ち火に投じて焼き捨てさせたり

此時國王は更めて聖人を王宮に招き今より神の奉教人たらむことを求

め洗禮を受け、人民も多く熱心なる信者となりぬ。さて前に偶像を置きたる彼の寺は、勿論其他の寺をば皆聖堂となし、眞の神を禮拜する場となしけり。聖人は圖らざる機會によりて、信者多く作り教を傳ふることを得たれば、倍々熱心に力を盡し、學校を建て、有爲たる男子を養ひ、教へ、そを靈父となし、司教となして、教會を治むることを教へ、弟子次第に多くなるに従ひ、教會いよく盛になりけり。しかるに、彼の偶像をもて、人民を惑はし衆多のものを誑したる僧侶たちは、偶像を毀たれしと共に、其日の生計にはたと困み如何がはせむと案じ、煩ふにつけても、聖人の教會追々盛に弟子等多く出て来て、教の道榮えたるを見、小人究するときは、亂すの古言に漏れず、數百の困難せる僧侶打寄りて、密に語らひ、聖人を亡ものにせむとぞ企てけるが、公に事を擧ぐるときは、國王人民皆熱心なる信者なれば、自己に利益なく事また成り難きを思ひ、密に機會をば視ひたり。此に國王に一人の兄弟あり、放蕩にして心もまた曲れるものにて、教を聞くことある

も信ずることと思もよらず、常に聖人の如き正しく譎なきもの、王家に出で入るを惡みければ、彼惡僧等能き味方なりと考へ、やがて彼國王の兄弟の許に至り、共謀者の頭となし、奸計を凝したる上、聖人を招き、學問ある僧と議論せしめ、彼を言ひ伏せて、其教をも亡さむと決し、人を遣りて、聖人を招き寄せたり。聖人は、彼等の奸計を測ると、雖更に恐れず、其處に至て議論せり。此議論は、一千有餘年、常に絶えざりし問題にて、今茲に詳しく記すの要なけれど、彼の僧たちは、基督教にては、國の神を拜せず、道徳に反對する眞の神にあらざると、非難しけるを、聖人は答へて、それ所謂國の神とは何者ぞ、僧侶が人民を惑はし、諂らふ爲に作りなしたる人をぞ崇めたるものにして、偶像なり、靈ある眞の神には、あらず。我教の神、即ち眞の神は、國によりて異なるものにあらず。世界天地の唯一の神にして、一體なりとて、深く眞理を説き、明し、詳かに議論しければ、案に違ひし僧侶等は、一も二もなく敗北し、敵すべき路なかりしかば、今ははや是迄なりと一齊に躍り起ち、

聖人を打撃惱まし、刺へ、彼等打集り、各手の爪をもて、生きながらの身軀を
 爬き破り、皮をむしり、肉を抉りとり、此殘忍なる殺戮に半ば死せる聖人に
 對ひ、汝は眞の神を信ずといふ、かゝる時に神に願ひて、生き固り見よ、是に
 ても神は汝を助くるか、とて終に首を刎たりける、慘酷ともまたいたまし
 き限なり、聖人此時年凡五十歳。
 彼の惡僧等は聖人を輕蔑しめ、嘲り、なぶり斬となしけるが、彼の國王の兄
 弟及最も烈しく聖人をさいなみたる僧侶は、竟に狂氣して暴れ走り、裸と
 なりて、犬の如く、葡萄匂ひ吠え歩き、三日の後、惡魔の爲に殺されたり、人民は
 是によりて非常なる感激の心を起し、不信者は信者となり、信者は倍々熱
 心を加へ、國王は竟に其位を太子に譲り、主教となりて、貧しきものと同じ
 く粗衣粗食を爲し、諸方を巡りありきて、教を傳へたりといふ、まことに後
 代の龜鑑千古の美事とこそいはまし。

聖ルドウィコ國王

八月廿四日

有名なる聖人ルドウィコは、紀元一千二百十五年佛國の王家に生れ、嫡子
 たるをもて幼年より皇太子と定められたり、此聖人幼少の時、さして人に
 異なる行爲ありしならねど、一世の名君となりし事は、全く其母後の薫
 陶教育尋常ならざりしに依れるなり。
 父なる王は早く世を逝り、母后其政を統御けるが、此母后は、ニスバニアの
公主にして、夙より熱信賢明の令聞高く、さては佛王と婚儀を擧ぐるに至
 りしなり、聖人幼少の時、母后常に申されけるは、吾が最も愛する者は汝な
 り、されど若し汝後來神に對して罪犯すとあらば、汝は却て是吾が最も惡
 むべき者となり、只今死して其屍を晒さるゝを看るこそ幸福なれとの言
 葉を、聖人は小兒心に深く銘じて忘れず、大臣のうち常に幼君なる聖人に
 對ひ、諂佞を爲しけるものありしを、母后はそを看て、嚴しく聖人を戒め、甘
 言は毒あり、諂ふは汝を愛するに非ず、是汝を輕蔑するなり、必ず心か

聖ルドウィコ國王 八月廿五日

四百三十三

けて諂ふものを近くべからずとの言葉聖人の心底に入ること深く常に巧言令色のもを嫌ひ嚴正して直言するものを愛し親みけるゆゑ彼の野心ある貴族等が皇太子を道具として自己が權を舉動ふなどのとかにはずそれが爲に謀反して兵を起し、パリスの城下に攻め寄せし事ありしが、女丈夫なる母后は太子の模範とならむとて身自ら出陣し戦て之を破りける事さへありけり。かくの如く母后は聖人の教養に力を盡し名ある學者にて熱信なる人を招き皇太子の傅となし、いよ／＼聖人を教へ育てけり。

聖人長じて廿歳となりし時、或貴族の女と婚を行ひ王位に上り國政を執り人民を支配し、ルドウイコ第九世とぞ申しける。王となりてより大に改革を爲し事業を起し、當時在朝の人々奢侈に耽りて費用は少からず租税重かりしが、聖人は悉く之を改革し衣服の如きも制限を定め總て質素儉約を行なはせ、且つ申されけるは、人如何に美服を着け華麗の扮装すと

も心思ならば何の益かあらむ是、瓦礫を裏むに錦をもてするに同じとて大に貴族等の華奢を戒めけり。されば今迄粒々辛苦せる人民の膏血をしぼりて自己の口腹に充て、私利を營み公益を害し居たる貴族等の中には、國王の斯る處置に心良からず、終に英國を我手に入れて之と謀り王に背きて兵を起したり。聖人は直に軍馬を整へ自ら先鋒に進みて戦ひければ、兵士いかで奮はざらむ、忽に謀反人を破り平け、是より内亂靜まりて國民安じけり。

聖人は法律を凡て寛大にせるが、唯神を誹る者をば嚴刑に行ひぬ。是は惡逆の心なくば神を誹るなどの事は爲し能はぬものゆゑに、殊に重く罪せり。其法鐵の棒を烈火に熱し、そを舌に熱印するなり。聖人は神に對せる無禮の罪を尙是にても輕しと申された。當時佛國に惡風あり、裁判官は唯賄賂に依て法を枉げ、曲直正邪を顛倒し所謂罪の捌も金次第といへる。狀なりければ、聖人は之を矯正さんと心を苦め、竟に一法を案じ、裁判官は餘分

の金錢を所有を禁じ凡そ裁判官は金錢の爲に事を審くべからず必ず總て義の爲に審くべしとして其審判を爲せし事は一々詳しく記録にとどめ時々王の命令によりて其實條を答へさせけり加之聖王自ら領下の地方を巡行し公の政事の得失を調べ殊に貧しく賤しき者の審判は如何なる罪に因て如何なる審判を受けしかを査定し若し苟にも不正不當の事なりと見るときは直にそを正しくしたりされば國內到る處の貧しき人民は殊に悦び王の審判は神の審判に同じと皆其巡行を喜びまちなぬ聖王は大木の蔭に踞けて審判を爲しけるが其大木今日に至りて猶存し居れりとなむ聖王は自己の身を處する事極めて質素嚴正にして王者の生活に似もやらずさながら貧しき人の如くなりし金錢足りて餘りあるときは貧人を助け不幸を憐み其周到事驚くべきほどなれば或貴族はそはあまりに王として輕々しと諫めけるに王は吾は佛國の王たるよりも寧ろ佛人の父なりと申されける。

聖王事の重くして大切なるものあるときは必ず禁食して神に祈禱し其照臨を仰ぎぬ國政いかに多端の時と雖彌撒の聖祭は毎日怠りなく必ず之を拜し且つ彌撒の聖祭は極めて人間の大事にて世界中之に超過たる重き事なし此事に怠るものは大罪なりと申されきまた聖王の兵士に對する愛の深きは實に父の如くなり病める時は之を看護し苦むときは之を恵み其家族子弟を視ると猶我が兄弟姉妹の如く慈愛を垂れ學校を建て特に其子弟を教へ育てたり聖王の國の爲人民の爲盡し務めて事績は濱の眞砂の數限りなく皆善事にあらずといふことなし歴史家がルドウィコ聖王の治世は佛國の黄金時代なりといひたるも宜理なりといふべし此時コンスタンチノポリの皇帝は聖王の徳望を開き之を敬愛するの記念として瓊瑤を爲さんとて種々に思ひを凝しやがて一物を案じ出しこれこそ佛王の喜ぶものならめと最も聖き御主の其御苦難の其折に冠給し茨の冠を多くの臣を遣はし贈りければ此事佛王に聞えパリスに

近づきし時聖王は貴族と兵士を引き具し佛王の格式もて行列を整へて
 出て迎へたりやがて聖品到着しければ聖王馬を下りて今まで戴きたる
 金の冠を脱し穿きたる履をも脱ぎて聖品の前に拜伏し涙を流して尊敬
 の意を表し、良久ありて自ら聖品を受け、跣足のまゝパリスの王宮にぞ還
 られける。後に之を安置する爲に一の聖堂を建てしが今猶存せり。
 程經て聖王病に冒され殊に危篤と聞えしかば、人民は親の疾病を患ふる
 が如く愛へ痛み朝夕聖堂に集りて王の平癒を神に祈りけり。此時トルコ
 人はユデア國に於てイエルザレムの聖地を瀆し奉教人を殺戮せる事あ
 りければ、聖王は大に之を憂へ一日も早く病を治し其國を救ひ奉教人の
 爲に困難を除かむと盟ひ切に全快を待ちしが神は忠實なる人民の乞を
 容れ聖王の志を嘉し、間もなく聖王の病拭ふが如く癒えければ、聖王は
 早速國政を母后に任せ、多くの海軍を整へ兵を率ゐてトルコに向ひ先づ
 トルコ人の多く住みたるエヂプト國のダミエタといふ都に着し直に上

陸し兵を進めて大に戦ひ勝に乗て追ひ撃たむとしけれども、長途の旅行
 に兵士疲れたるを以て爲方なく其地に陣を張り居たり。トルコ人は一旦
 敗れて退きしが隙を見て再び戦はむと思ひ居けり。佛の軍はダミエタに
 在營すること數ヶ月に度り軍務を怠り敵を侮りければ、聖王はそを憂ひ
 兵士を戒め用意して進まんと思ひしが、兵士等勝ちほこりて命令に従は
 ず、聖王の仁慈あるを却りてよき事に思ひ軍律大に緩みけり。其後數度の
 戦に勝ちしと雖、兵士多く討死し加之旅地の事として疫病に襲はれ數千人
 を亡へり。聖王は是人々不品行の罰にて後々もまた勝戦は難しと悟りぬ。
 或夜兵士等王命に背き怠りて酒など飲み興じ居ける時、敵兵數萬不意に
 襲撃し來り、兵士多く死し大敗軍となり。聖王も竟に生擒となり、酷き扱せ
 られしが、少しも心を落さず耐へ忍びたるトルコ人もこは常人にあらず
 聖人なりと悟りて後には大に重く遇し敬ひ尊み、竟に償金を取て放ち還
 しぬ。聖王は、かく命を助かりやがて殘兵を糾合て軍船に乗り、ユデア國

に渡航し其地に留ること四年間其間信者を助けて敵と戦ひ數々之を破りしがはかしくしき功績もなき折柄佛國より急騎來り母后逝去りたまひしと報じたり聖王は大に驚き歸國の用意を爲したりける。

まことに聖王の母后は賢婦にして國政大小となく相議り聖王の爲には慈愛の深き母なるのみならず國の柱となり居しなれば今逝りし時は國政大に憂ふべきものあれば聖王は急ぎに急ぎて歸國せり人民は喜び迎へて其前に拜伏しさながら神を拜するが如くなり聖王國に在らざる事六年の長き歲月なれど母后の善く政事を執り行はれしによりて少しも前に變る事なく人民益悦服し佛國の勢威旭日の昇るが如く日に増し盛大になり各國に事ある時は常に其調和仲裁を爲すの位置に進みけるこそまことに聖王の力なれ。

さるほどにトルコ人の信者を迫害すること前よりも一層烈しかりしかば聖王は再び軍旅を整へ出陣せむと思ふ所に此度は歐洲の諸國王皆奉教

者なるによりて同盟し有名なる十三世紀の十字軍となり聖王は諸軍統轄の大將となりて出軍せり。

しかるにアフリカにチエニスといへる國あり其國王はマホメット教熱心のものなるが人を佛軍に遣はし此度の戦にはキリスト信者となりて先鋒を爲すべしと申しければ聖王の方にては元來奉教人のみなれば權謀詐術なく正義にして巧計あることなきゆゑに此購詐を深く疑はず進みて彼チエニスに上陸するに豈圖らむやチエニス國王は不意に來りて戦を挑みける佛軍の方にては思ひがけぬ事なれども勇を奮て應戦し神の冥助を蒙りて戦争は勝利に歸したれども熱帯地方の國なるゆゑ動もすれば疫病流行し人々災に罹るもの多く聖王も此危に漏れず竟に軍中に崩御されたり齡五十六歳なりし。

佛の兵士等哀を發し聖王の屍體を護りて佛に歸り人民盡く惜み歎きていと嚴に葬送の式を舉げパリスの近地聖デニといふ地に葬りたり惟ふ

に佛國が十三世紀より漸く歐洲の諸強國と肩を比し大に盛を極むるに至りしは、聖王ルドウィコ九世の功績なりといふべし。

聖ブルケリヤ皇后

九月十日

世に兩親に早く別れて充分なる教育を受け得ざるが爲め、なき父母の面に泥をぬる者少ならず、父母早く此世を去るとも、教育だに充分ならば、かゝることのあるべきは、今此所に説き出す譯は、最も是に適せるものなれば、人々心を止めて讀むべし。

時は降生後三百九十九年、羅馬の帝國に於てブルケリヤ皇后誕生せられぬ父の皇帝は熱心なる信者に在して、そが皇族も多くは信者にてぞありける。其故如何にとたづぬるに、此皇帝の曾祖父にてありける其頃の皇帝、數敵國と戰爭あつて連戰連勝の勢もて敵國を征服し、羅馬帝國の礎を固め玉ひしと、此皇帝の武畧に長け玉ひしは言ふ迄もなきとながら、是は一重

に此皇帝の聖教を奉じ玉ひて、神の御力あづかりて力あるが故なれば、我子我孫世々是を案に銘し、必らず神に對し奉りて不敬の行あるべからず。とのり示し給ひしによるとかや。

閑話休題、ブルケリヤの父君は聖女の外に三人の兒を持ちたまへり、中は男兒にて季の二人は女兒なりき、かくて春秋は流水に似て、聖女茲に十五歳太子は八歳になられ、季の女兒君は尙幼きはしき、然るに父皇帝は風邪の心地とて打臥し玉ひしが、四百十三年と云ふ秋の頃、此愛らしき幼子數人を跡にとめて、梧桐の一葉のちりくと秋風にさらはれ、あの世の人となりしかば、稚子達のかなしみは云ふもさらなり、高きも賤きもおしなべて、唯暗の夜に燈火とられたらんがごとく、皇子達の稚くて政を誰や握る。此國は如何になりゆくと危む人々も多かりけるが、聖女は素より英邁、伶俐の性なれば、父皇帝の崩じさせ給ひて、國人のかく評しあへども、少しもわるびれし様なく、僅に三五の若齡にて、此廣大なる羅馬帝國の政を一

手に握り自がよしと思ひしとを輕く施さず諸臣の賢明を撰みて是とはかり又自が悪しと思ひたるとも輕く施さず辯難討論の後始めて是を施し、かば善政國中に遍く薪とる賤が男造も仰ぎ喜ばぬはなかりける。

前にも云ひつる如く、太子は尙幼なくて物心も未だおはさず唯あちこちと遊戯せんとそのみ樂とせられしかば、聖女は是をいたく戒めて、卿は此大帝國の皇帝となり給ふ御身なり、されば下々の者の如く幼なしとて空しく遊び暮し給ふべきにあらず、父君此世にましまさば兎に角今ははや崩じさせ玉ひて此國に主とては卿のみなり、一日もはや成人して、此國の皇統をつぎ給はてはかなはず、ざるを日々かくておはしなば此國は如何があるべき、ゆめ此後は怠り給ふべからずとくれぐれもさとし教へて、其頃有名なりける博士某をあけて、太子の師父となし給ひ、重要な政のとなど自が諸大臣と計る折は常に自の傍にはべらして此習慣を與へん

と勤め、又彼師父に向ひて、決して太子を譽むべからず、常に太子に對して嚴格に師たるの體度を失はず、悪行は少も假借するとなく、常人と同じく之を責め、以後を必らず誠むべきなり、些にても嚴格を失ひ、些にても阿る等の様あらば、急度越度たるべきなりと、嚴しく言渡されける。かゝる有様なれば、羅馬帝國は、父皇帝在世の頃よりも一層たちまさりて強盛に越え、誰一人として之を非難するものなく、昔のラオドローナの再世ならんと申合ひぬ。此頃羅馬國の風俗最奢侈にかたむき、貴族の衣服其美なると言語に絶えたり。ブルケリヤ常に此事に及ぶ毎に、眉を擧めて曰く、近頃貴族社會、美服をもて外を飾る、甚其理を得ざるとなり、貴族たるものは高位を得、高官を得て、其身に美服をまとはさるも、既に其美彩は人目を眩するに足れり、何ぞ無用の服を着るをなさんやと、かゝる故に、其身の節儉なると想像の及ぶ所にあらず、身は羅馬帝國の女宰相にして、其一歳間の費す所僅に民間中以下の費す所に超えず、餘財あれば、之を貧民に與へ、國民は我

兄弟なり其兄弟にして一人たりとも朝夕に困む者あるは我甚心苦しき所なりと施行する毎に傍人に語られき。

話前にかへりさても皇太子は姉の撰みにつけられたる博士なる師父の教へを受けたるが兎角學事を怠りがちにて師父の誠姉の誠其當坐のみはげみ勤むるもいつとなく忘れゆきて再び學を怠たりしかば聖女はいたく之に心を苦しめさまざまに思案しつ遂に貴族中の子息にて最才の秀てたるを六人七人撰みつ是等と共に學を競はしめたりかよりしかば太子も漸く學問を勤めて是等の一人々に劣らじとぞはげみける聖女又教の尊むべきとを太子に示し常にさとしけるは此教外にては水の如く冷かに見ゆれど其實は湯の如く温く且甘し其教力の廣大なると人力のはかり知るべきにあらず或は天地の至大に至り或は塵埃の極微に至る此教を基礎とし準繩とし規矩としてもて國中に政を布かば必らず善政天下に通く人民鼓腹して太平を歌はん然れども若一度之に反せば國を失

ふは論をまたず自らも又晏如たるを得べからず必ずや肝腦地に塗れんゆめ此とを忘るべからずと又太子の爲に課を設けて學事の外毎日早起して四方を走り適宜の運動をなさしめ嚴冬素雪の寒さ夜も九夏三伏の暑き日も決して是を怠らしめず是其健康を保ちて一度他邦と戦を交ふるとも遠征して氣候の變に遇ひ健康を損ずるの患ひなからしめんがためなり又時々粗食を食ふを習はしめことさらに飢て艱苦に堪ふるの習慣を作り常に緩急に堪ふるの心がけを教へぬ是等のと唯太子にのみ施すにあらず自卒先して是を行ひしかば太子も又悦びて姉がなすまゝに行ひけるかくブルケリヤは男子も及ばざる雄々しき周到なる行もて、そが最愛なる弟の太子を教育せしかば羅馬國の貴族等は云ふもさらなり諸外國の皇族貴族の人々我こそ此女丈夫を妻にめとらん我こそ此女英雄と苦樂を共にせばやと争ひ立ちて婚姻を申込むもの引も切らずされ共聖女は是を皆退け人をして是等の一人々に言はせけるは不肖なる妻

を賢明なる諸君の妻となし給はらんとすの御所望身にとりて如何ばかり
 悦ばしからんさりながら此に諸君の御望を破るの止を得ざるところ候
 へ、そは往年父君存生の御コンスタンチノポリの大聖堂に於て童貞の誓
 を堅くたててを破るの恐れなきが爲其大聖堂の祭壇に精密なる彫刻も
 て其もとすへを刻りつけ於きぬはからざりき父君崩御のとき起り女子に
 はふさはしからぬ國の政柄を握りて初の志なる片山里に閉かなる家し
 つらいて朝夕を神に捧んとはかりつるとも書餅となり出るにも入るに
 も前軀後従の威嚴に冊づかれ外眼には何ともわかつて唯常の女子とのみ
 見へ候へ共心は常に行者にも劣らずとこそ思ひ候へされば此本末を斟
 酌あつて此後はかゝると云ひをこし給はぬをねぎまつるにこそと言ひ
 遣りける。

四期折々の眺め幾度か變りて光陰の疾さと四ツの馬も及ばず早くも四
 百廿五年の春をば迎へぬ太子も今は廿歳にならせ給ひて國のまつりこ

とを取り給はんもはやからじと覺えければブルクリヤ聖女は日を選び
 皇帝授禪の式を執行ひ太子は茲に羅馬帝國の皆帝とならせ給ふ目出た
 かりけるとどもなりされば一日も是が皇后たらん人なくてはかなはず
 とありて聖女はかねて心がまへに撰み置つる貴族中の一令嬢を皇帝に
 説きて其可非をたづねけるに皇帝も異議なくおはせしかば是又黃道吉
 日を選びて皇后とはなされけり。

聖女は太子をも位に即け奉り皇后をも定められしかば今は此に居ると
 も要なき身なり最初の志はたさんは此時なりとて此を皇帝及び諸大臣
 百官に計りけるに皆其不可なるとを申て思ひ止まられんとを諫め申せ
 しかど聖女はなかくに受け入れられずたつてとありしかば皇帝も今
 は力なくさらば何處方へ御こしあらるゝやとまめだち玉へば聖女頭を
 左右に振られていやとよさる重きとにははべらず唯いつかたにても聞
 がしからぬ寂かならん場所に移り住まんとこそ思ふなれ君宜しきに計

り給へ佳美ならんは忌べし廣らかならんはあながちに悪きにあらずと、
 皇帝に示し給ひしかば皇帝も是を受入れられやがて宮城の南の方十四
 五里ばかりに儉約なる家居しつらへ此所を聖女の在す所となされぬ聖
 女はこをいたく悦ばれつ二人の妹引具して數年養ひたる陣没せし夫の
 爲めに艱苦しつる婦婦數人と共に移轉せられつ朝夕を神に仕へ皇帝よ
 り贈りこさるゝ月々の賄ひの料も浪費せずして貧困者に施し尙もよる
 べなき婦婦を養はるゝに力をつくし日々の行ひ行者も及ばぬばかりな
 り。
 それは借置此に亦羅馬國に於て大なる禍こそ起りつれそを如何にと尋
 るに其頃何處よりか輸來りけん一の惡むべき異端教あり其主とする所
 は聖教を誘ふにあり其骨髄とする所は聖教をきつゝくるにありそが道
 士はあらゆる甘言もて夥多の信者を惑はし遂に或大臣を信者となし之
 を使ひて帝皇を欺かしめたり皆帝は此大臣を正しき者と思はれしかば

いつしか此異端教を扶助せしむるの制を下せり此に於て民間の心ある
 ものは嘆息しつゝ帝國の前途を患ひ慨むべしと絶叫しむるに至れり。
 聖女は世に離れて住み玉へば是等の變ありとも知り給はて例の如く婦
 婦等と一堂に會し祈を捧げつゝありけるが突如一封の書狀法皇の許よ
 り到來せり傍書して「至急」とあり聖女は何ごととならんといそがはしく封
 じ目切りて讀み下し給へばこは如何に親愛なる皆帝が聞くも忌はしき
 異端教を尊びあまつさへ是が扶助の制を下したり卿是を諫めよと走り
 がきに書き下しつるなり聖女は是を見て大に驚きとるものもとりあへ
 ず急ぎ宮城にかけつけられ言葉をつくして皇帝を諫め申せしかば皇帝
 も尊み敬ふ姉君の懇なる諫に依り初て夢の覺めたる如く大に前非を悔
 い給ひかく欺き申したる不忠なる彼大臣をば殿しく責て遠島にぞ處し
 たりける其他此異教を捨てざるものをば皆國外に放逐し扶助の制をば
 火中せしめぬかゝりしかば聖女の悦大方ならず後のと戒め申して明日

歸宅せばやと其用意せられけるにはからずも皇帝は其夜より病の床に臥し給ひしかば是非なくしはし止まり給ひて看病に手を盡されしが命數遂につたなくて病み苦しませ給ふと幾何もおはさて北邙一片の煙となり給ひぬかこりければ皇族の大評議となり種々の論起りけるが結果は終に聖女を位につけ申ししかずとありて連書して是を推せしかば聖女も是をもだし難くおぼして僅に受納せられたり此に於て皇族貴族諸大臣百官たち再び連書して大婚を執行せんとの理を説き法に照らして勸め申ぬ聖女亦是を受納あつて貴族中聰明のきこへ高きマルシヤノと云へる人を迎へて盛大なる大婚式を挙げたりける其後帝國の隆盛に趣きしと比類なく外は諸外國に武威を示し内は諸民を愛撫せしかば五日に一度風吹き十日に一度雨降ると云ふなる聖の御世も是には増じと見えたりけるかくてのち聖女病を得て四百六十七年と云ふに眠るが如く薨じ玉ふ民皆かなしみなげき慈母を亡ひつる心地しける齡六十九歳と

きこへし。

或人問ふブルクリヤの聰明英才よく六尺の男子をして愧死せしむるに足る然れ共幼にして童貞たるを神に誓ひ中年にして夫を娶る是神罰にふれざるか答へて言ふふれずブルクリヤ聖女諸人の請もだしがたく止むとをえず受納なすと雖娶る所は一老人然も驢夫にして或人の子あり其婚するに及んで約して曰くたとへ婚して夫婦となるも唯是國法に従ふ儀式のみ決して童貞を破らず決して妻を共にせじとしかして夫婦たるの後外は夫妻の如しといへども内は恰も兄弟の如くなりしなり亦問ふブルクリヤは教育者(家庭の)の好摸範たるのみならず政事家たるものと摸範なるべきか答へていふ然り聖女は歐洲有名の政事家たるのみならず又大法律家にて有名なる人なり彼國の法律は總て此女俊傑の纖手よりして成立せしなり賢母として賢法政者として誠に得がたき英傑ならずや。

尊者アンドレー、金 致命者 九月十六日

朝鮮の事情は今ここに略々しく語るに及ばざれど致命者の傳を説くに先だちてその國の教の歴史を述べ置くべし抑も朝鮮人は昔より孔孟の教を尊ぶこと支那に異らず所謂儒をもて教の根本と爲しけるが基督教は天下に及ばぬ所なく此國にもまた早くより傳はりけり即ち始めて此國に教の入りしは豊臣秀吉が朝鮮征伐の頃日本人より傳へられけるなり日本に於ては此時既に聖フランシスコ師父の爲に教はいと盛になり居て太閤が朝鮮征伐の戦の如き我兵多く基督教者にして戦ひの勝利もまた多く故由ありしなり此時日本よりは靈父一人傳教師一人彼朝鮮に渡り教を擴めむとなしたれど戦亂の中なれば説教を聞くものはあれど、信者となるは無かりし靈父傳教師は種々の方法をもて其道を説き日本人の爲に囚虜となりしものをば懇ろに働はり道を説き教を聞かせし者數千人の數多き者なりしも信者となりしは大約二千人程にてありしと

ればにやそがまゝにて進みゆきたらむには朝鮮國人も行く大に御主の御恵に霑ひしなるべきを不幸にして太閤の素志成らず朝鮮平定の事中途にして大閤没しければ戦争も和睦となり囚虜となりし朝鮮人等の大約は日本に止り又己が邑里に歸りし者等もありて信者となりし者等の内多少己が家に歸りし後彼の朝鮮の人々此信者等が神を敬ひ御主に祈禱するを見て日本の味方する者なり國賊なりとて之を殺し或は之を獄に投じて其信仰を破らせ總て教に在る者を亡しければ一二十年を経る程に一人の信者も無くなりぬかくて御主の教は朝鮮に中絶せり然に此に再び教の興るべき機會出て來しは支那と往來の事より也朝鮮國王は毎年支那に貢獻を爲すため使者を遣はし支那より曆を受けて歸るとなるが今を距る凡百年前朝鮮の使臣支那の首都北京に於て天主教の信者と親しくなり依て教師にも見えけり當時天主教の教師は皇帝及び貴族の人々に歐州の學問を教ゆる爲宮中に入らせしかば朝鮮の使者も

公用によりて數度の會合をなし教師より教の書籍を得て之をよく讀むに一字一句として益ならぬはなく殊に神は天地に唯一なる人間の創始の事靈魂の事十誠の事に就て深く心に感動し終に信仰の心を發し猶も教師に問ひ質し心に得ると多く朝鮮に歸りて後朋友を呼び親戚を招て其書を視しける朝鮮は支那と同く王澤普からずして隱者と稱し道士と號して山伏の如く世を捨て政治に關せず仕途につかず山に隠れて學問と道德を修め志空しく高く識徒に深き人々あり此等の入此書を繕き讀て大に驚き今日迄孔子の儒教によりてのみ道德を明らめ得べしと思ひしは大なる誤なりしと悟り皆々御主の教に心を傾けたりされど當時教の中絶し頃なれば教を信せんとするも洗禮を授くるものなきゆゑ人々皆彼書に頼りて朝夕の祈禱を爲し居たるが之を傳へ聞きて歸依するもの漸く多く殊に上流の貴族など多く洗禮を受けて眞の信者に加はらんとを望み竟に共に計りて密に一人を使として支那に遣はし其他彼地に

於て洗禮を受け歸りて人々に受洗せしめむと決しやがて其中の重なるもの一人を北京に遣はし多時の間教師に就きて勉學し洗禮を受けしかば其者歸國なして望みある貴族學者等數百人に洗禮を授け各就いて熱信に神に祈禱し品行を慎みまことに御主の教は此國に榮えなむと未頼母しく數年の後は國人悉く信者となるべしと思はれけるが此に一の障害出て來にけり朝鮮に一の弊害あり國王幼少にして名のみ其位に在ると雖實に政を攝し行ふものは貴族なりされば政權相争ひ相闘ぐ國內黨派分裂し時々内亂起るを常とせり此時も教に入りし者の内に權威門閥共に良き貴族ありけるが他の貴族之を嫉み教に入りし事を好機となし愛國の心無きものなり祖先に逆ふものなり國の賊なりなど罵り責めて止まず奉數人は其頑迷の心を開かむとて種々に理を説き道を教神の教のいと崇むべきものなるを語るもさらに之を信せず喧々囂々して終には國中の騒動となり信者を虐げ苦むこと大方ならずまこと御主の詞

に「我は刃を持ち來れりと」意味は信者は不信者の爲に刃に殺さるといふ
 心と言ひたまひし如く、此時數百の信者非命に死せしを無殘なる、
 王族の中に金氏といふものあり、降生後一千八百二十一年に男兒一人を
 擧げ名をばアンドレヤと稱しける、金氏は夙く教に入りいと熱信の人な
 りければ彼内亂によりても殊に苦難に逢ひ、漸くに避けて都遠き山に隱
 れ、朝夕の炊きの烟細々といとさびしく住ふものから其子アンドレヤを
 ば如何にもして無恙育て、成長の上は靈父となし、國の爲人の爲はた神に
 務むる職分を盡さしめむとの深き望を抱き、そを樂みに生活ける、されば
 アンドレヤは幼より靈父となるべき事及び國に對して盡すべき務の事
 をば深く父より教へられ、自己の心に浸みこみ、春秋の歲月駒の足の如く
 早くも成年になりしゆゑ、望み居たる靈父とならむと思へども、普通の學
 術のみにては其職を行ふこと難く、必ず數年の星霜の間、神學哲學の諸學
 術を修めてはかなはず、されど朝鮮に於ては斯る學問を教ふる所なく、支

那に行きて學ばんより他に爲方なかりけり、しかるに當時の狀態にては
 朝鮮國內を出づるとは容易事にあらず、嚴に禁ぜられたりしゆゑに、信者
 アンドレヤは如何はせむと父と共に心を碎き、終に姿を變じ、扮し、古
 より仕へたる郎黨數人を伴ひ、密に船に乗りて本國を離れ、支那にこそは
 渡りける、是福者が十四歳の折なりし、支那はさすが舊國なれば數百年前
 より教傳はり、そが學舎もありて、充分に修業の便宜あり、是に於て福者は
 その學舎につきて意を銳して、熱信に強勉、修學怠りなく、頻に望を高くし
 つ、堅忍不拔の心もて靈父とならむと勵み居たり、
 尊者が支那に留學中、佛國の靈父の數人密に朝鮮に渡航し、數を傳べんと
 なしけるを忽に露見して、囚はれ、殘酷に殺されたり、是が爲に大に信者の
 窘逐起り、苟にも信者と見るときは、理非曲直を問はず、貴賤貧富を顧ず、之
 を責めてぞ殺しける、憐むべし、尊者が親戚一門のもの、諸共に福者が歸國
 を待ちわびたる父親金氏も、此時刃に懸りけり、さる災害の故郷に起りし

とは知るに由なく一途に修學怠りなき尊者は程經て風の消息により此事を聞き、悶絶せむばかりに歎き悲みしが、急度心を取り直し、只管神の冥助を祈り、一層力を奮ひつゝ、尙熱信に勉強し、十年の星霜功を積み、首尾よく露父となりけり。

さるほどに尊者は靈父となりし上は、一日も早く本國朝鮮に歸り、多年の宿志を行はむと歸國を急ぐものから國に歸ること難きは國を出づる時よりも難くして、船路にては更に歸り得らるべからず、されば尊者は千辛萬苦を凌ぐ覺悟もて陸路より朝鮮の北に出てひと決心し、やがて行李を整へつゝ飄然として出て立ちぬ。

頃しも冬の時節にて、さらぬだに寒き北支那の地方なれば、寒風は頬を切りて刀の如く、白雪は脛を没して眼迷ふばかり、肌は氷の如く冷く粟だち、手足は石の如く堅く寒く、寒く行く人稀に路細く、山險しく水多し、健ならぬ尊者の身は、幾度か飢に苦み凍に靉み、或時は宿るべき家なくて終宵睡らず

月と共に歩みたるなど、誠に苦辛を重ねつゝ漸くにして本國の境にこそは至りけれ、此に朝鮮の兵士關門を据ゑて往來の人を嚴しく調べ、觀察おさく、怠りなければ迂濶に進み入りかねし、折柄牛商人多く來るに出會ひ、そが衣服を借り受けて自己も商人の如く扮ち、群衆に紛れて漸く國に入るを得たりしかば、是よりは我志を爲すべき時機こそあるべけれど、いと辱く思ふより地に平伏して涙を流し、神に謝し、國の爲に此身を犠牲になし、血を流しても務をば盡さむと誓ひける。

されば尊者は自國に入りしといふのみにて、國境より京城まで路程いと遠く、嚴寒の頃の常として虎狼餌を求めて路に横はり、盜賊客を脅して財を掠むるなど、危険の境界に遇ふこと幾度なるを知らず、行き行きて都にも程遠からずなりしに、途次兵士の咎むる所となり、支那人なりと疑ひ辨解するを耳にもかけず、散々に打擲せし上、獄舎に入れ三日の間、飲ませず食はせず、尊者は熱信の祈禱に頼りて、僅に露命を繋ぎ凍えらるをも免か

れたり三日の後兵士は尊者を獄舎より引き出し京城に伴れ行き捕盜廳に訴へて是は支那人の惡漢なるべしと申しければやがて尊者は廳前に引き出されぬかこりければ尊者は廳司の問に答へて支那人に生る事我家の事より國を出て今日まで一身の履歷をば秘す所なく言葉よどまず清くも語りたりしかば廳司は其何事も忍み憚らず實を語り天眞なる事情を聴き終りて却て不審に思ふものから尊者のいとも氣高くて凡人ならぬに感じけむ言葉を更め今より汝を宥し道はすべければ向後基督教を捨つべしと申しければ尊者は頭を左右に揺り我親初め親類朋友皆此尊き教によりて命を致せるもの多し我身も畢世の志願にてかゝる崇むべき神の御教に入りしなりいかてか之を捨つるとあらむとそれより教の敬ひ信ずべきを説き出ていと有り難き道なるを話しあらゆる學術を引き來り證據を擧げて懇々と叮嚀に説きければ元よりかゝる俊英たる學者なる朝鮮の事とて役人等痛く驚嘆し覺えず耳を傾けたりと

れども教を捨てざる者なればとて之を許さずさればとて斯る學者を殺すはいと惜しむと相互に議論したる末終に禁獄するとなり他の囚人とは別ちたる座敷牢にて閉ぢこまれぬかくて尊者は囚虜の身となりて牢屋に起臥するものから心ある貴族はたは分限あるもの訪れ來り何くれとなく問ひ質し勉學しければゆくゆく尊者は此人々の教師となり懇に説教し道を語り聞かせ加之書籍を著して教の道理を詳述し又手束を記して支那にある教師の許に遣し朝鮮國を飽まで捨てざる様願ひ假令野蠻にして靈父信者を殺すとも永遠に國民の徳となり榮となるべき教なれば必ず挽かず道を傳へ擴めむことを述べ且は他日教會自由を得しならば我母の庇護を乞ふなど細々申し送りたり尊者の母は此時猶存き居りて親戚の許に養はれあり又殊に山間に棲み世を避け居る信者に書束を送り教の大切なる事熱心に教を傳へ道の擴大に盡すべき事などよく説き苦難を忍びて恐れざる様言

ひ送り、我身近きうちに教の爲に死すべく、そは大なる幸福なりと記せり。かくして益信切に愈丁寧に身を勳擧ふほどに、役人等は更に容赦なく打擲すること多かりし。或時亞米利加人より一の地圖を政府に贈られけるを、一人も英語を知らざるゆゑ、讀みがたくて、やがて尊者に命じて其語を譯し朝鮮文字に記しめける。尊者はそをいと正しく譯し補ひけるを、報賞とてはあることなく却て様々の事をもて兵士に打たれなどしけり。さても尊者は終に宥さるべからずして一千八百四十六年の九月十六日に至り、多くの兵士は牢獄に入り來りて尊者を縛し、京城より一里許距りたる刑場に拉れ行きぬ。數千の群衆はそを見むとて集り來りぬ。其時尊者は高く朗かなる聲をもて群衆に向ひ、基督の教の尊きと萬世に度りて變ずるとなく眞に人間の唯一の道なり。教なり基督教に頼らざれば此國は自由なることを得ず幸福なることを得ず榮えゆくとも得ずとて辯舌爽に人々の心に透るべき力ある説教を爲しける。程もあらせず兵士の一人

は尊者に近づき、矢を以て其耳に貫き、之を柱に縛りつけ、十二人の兵士は軍の如く列を爲して尊者に迫り、刀を閃かして其頭を撃ち、八回ほど斬りて尊者の首は落ちたりける。實に尊者の齡二十五歳。當時朝鮮の律として總ての罪人は其身分に拘らず死體を三日の間市に晒し、其後に埋葬するとなるが尊者の屍は急に穴を掘りて之を埋め、信者等其尸跡を奪はんとを恐れ三日が程は番兵をば置きぬ。此尊者の死によりて數百の信者大に激せし爲に、大概非命に殺され奉教人殆ど絶えしが、近き頃此望みある小なき國は漸くに變化し、宗教も自由に入れられ、天主教を擴むる爲に佛國教師は二十人程在留して其務を盡し、司教は京城にありて奉教人の數今日二萬二千人餘あり、されど猶此國の政治風俗總て改め進むに至らざれば、平安の望はいと薄く内亂の虞あり、やがて此尊者の如き愛深き者出て來り、革進の道を開く便宜となるべきことを願はしけれ。

聖エスタキヨ致命者

九月廿日

世間の状態を観るに信者にして政治に其職を奉ずるもの及び政治に其職を務むるものにして信者とならむとするもの多からざるはいと理なき事に覺ゆれどもこは畢竟世の教に對するの心さま一般に進まざるの致すところなり彼の官吏にして信者とならむとするところありても自己が職務の害とならむことを慮して之を思ひ止り又は信者にして官吏となりたるもの其上官を憚りて次第に道に遠かりて教を捨つるに至る是大なる非事なり今此等の人々の好摸範となるべき一の説話あり

今は昔羅馬帝國のいと盛に時めきし頃は多くの國々靡き從はずといふことなく勢あさく猛なりしがこれ唯其軍人の雄者多かりしによれるなり

そが大將の中にブラシードといへる人ありけり剛膽不敵の勇者にして材幹倫なく戦へば必ず勝ち攻むれば必ず取るといへる如く幾度か遠征

の勝戦をなし羅馬に歸陣の折凱旋門に入りて馬車に乗り人民の歡迎を受け其勢力敵するものなしかゝる猛き人なれども其兵士を遇ふこといと慈深く親の如く勞はりければ隨ふ兵士はさながら子の如く勇み喜び働さけり戦に於て捕虜に對するにもいと親切に仁慈て少しも過酷なる處置をなさずされば此人に降れば更に苦患なしと敵までも敬ひ慕ふが故にさらぬだに強きブラシードの兵の向ふところ勝たずといふことなし人となり謙遜にして信者の心あり戦勝ちて歸國の時は必ず寺に行きて軍神を祭り物を供へて無事安全を謝するを常とせりまことに正しく強柔兼ね備はりし人なりけれど眞の神をばなほ知らざりけり

さるほどにブラシード度々の戦功によりて諸國平ぎ世の中靜謐になりしかば軍人の用なしとて妻子を伴ひ都隔たりたる片山里に莊を設け塵煩はじき市の事を避けいと静やかに世を送り居けりされば昨日にはかりて爲す事なく千軍萬馬の中を駆げめぐりたる身がいと静に山の色を

ながめ水の流るゝ聲を聞くなれば、徒然やるかたなし、やがて獵してこそ
 いと樂しき事業ならめと思ひ、日々林に入り、溪に逍遙ひて禽獸を獵も
 のなしつゝ、樂み生活けり。
 或時常の如く弓矢を携へて山に至り、終日獲くらしけれど、させる獵物も
 なし、歸るべきかなと思ふほどに、近き處より一頭の鹿走り出て、好きも
 のやつと追ひかけつゝ射とめむとしたれども、鹿の足疾くして、弓矢を注
 ぐに暇なく、彼方に追ひ此方に走り、林に入り岩に攀ぢ、膝にいふ鹿を追ふ
 の獲夫山を見ず、ブラシードは心を獵物に奪はれ思はず、知らず懸崖絶壁
 の邊に來り、日もはや西に傾きて黄昏近くなり、けりされど剛氣のブラ
 シード我掌に落つべき獵物捕らては歸らじと猶も追ひ行かむとして、不
 圖見れば、彼の鹿崖の上に立ちて、此方を觀動かず去らず、ブラシードは弓
 に矢を注ぎて彼の鹿目がけて、弦を放たむとせるが、其時鹿の角より燦爛
 たる一道の光射るが如く、ブラシードの眼に映しければ、驚きて之を視る

に不思議や角の間に十字架明かに据ゑられたり、さては彼の光なりけむ、
 さるにても訝しき限なりと、合點さらにつかさりけり。
 ブラシードはかねてより十字架を聴きしも見もしたれど、そはキリスト
 信者の敬ふものにして、常人に用なきものと思ひ、且は御主を誇るとをば
 聴き居たれども、未だ教の道理神の事などは少しも知らざりしゆゑに、十
 字架は唯キリスト信者の作れるものなるべしなど思ひ居たりけるを、今
 我射んとする鹿の十字架を戴きて更に動かす此方を熟視たるに、一度は
 驚き一度は訝り、茫然として弓矢を握り佇立むに、此時天いと碧み渡り、浩
 々として際なく山靜にして、禽鳥の聲すら聞えず、まことに塵の浮世を外
 なる神の御國の心地しければ、萬念盡く去りて、信仰の一念勃然として出
 て來ぬ心より、今此状態は全く神の所爲なると思ひ、いと慎みて、彼の鹿
 近く進み行く聲をかけて、吾身如何なる罪かある惡きは、改め悔ゆべし、善
 さは勵み進むべしとぞ申しける。其時彼の十字架より人の言ふ如く、いと

嚴かに、吾は是萬軍の主イエスキリストなり世界の有衆を救ひ罪を贖
 はむ爲に十字架に掛て死せり汝今まで吾を知らずまた十字架を知らず
 吾今汝に吾道を教ふべしと宣たまふ其聲山谷に呼應して清く高く明か
 くにと神々しく、ブラシードは驚き畏み再び十字架に向ひさらば如何にし
 て良きやと問ふ彼の十字架靜に宣りして汝が住居より程近き所に一人
 の教師あり汝其が許に行きて道を聴けと答へしと思ふ間に彼の十字架
 は光と共に忽然として影なく鹿は願ひさま彼方を指して走り去りけり
 ブラシードは心のうち教と道に充され胸も快くはや暮れなむとせる山
 路を下り我家に歸り有りし事共漏れなく妻に語りしに妻驚きてそはま
 たいたく不思議ともまた畏し我身も昨夜少しも遠はぬ夢を視たり今朝
 は紛れて語り申さず候ひしと言ふに諸共打驚きさるにても此事は我等
 二人に同じ狀を神の示したまひしなれば浮きたる事にてはよもあらし
 日頃キリスト教は賣僧の詐計と思ひしが是によりて其眞の教なると思

ひ當れり兎にも角にも彼の教師の許に行きて聴かばやとやがて妻共に
 子供二人を引連れ羅馬の市街に至り示現にありつる教師を尋ねけるに
 案の如く家ありて一人の白髪の翁出て迎へぬ此教師は長く傳教に従ひ
 數々迫害に遇ひて屈せず撓まず熱信の人なり今ブラシード夫妻等の訪
 ふを信切に接遇ひ其來意を聞きいと喜びそれより熱心に教の道理を説
 きキリスト御主の事蹟を語り細かに肉體靈魂の區別など話しける兩人
 は大に感動し示現の忽諸ならぬを悟り此に心胸を開きて眞の神を認め
 たりされど其まゝ此教師の家に止まりて猶も教の理を聴き質し洗禮を
 受けて信者となりよりて名をも改めてエスタキヨと稱し妻はテオピス
 タとぞ呼びける程なく我家に歸り或日彼の十字架の現出れし山に行き
 拜伏して神の恩を謝し吾身今日に至るまで世の人に賞てられ食ひたき
 に飽き飲みたきに厭きて肉身の幸禮榮華を受けたれど少しも靈魂の幸
 心の福祉を知らざりしが今こそ眞の神の照臨を得て心の福祉是より受

くると誠に感謝する所なりとて切に祈禱を凝しけるに、虚空忽ち聲ありて、汝若し眞に吾を愛するならば、そが愛を表現す爲には如何なる困難苦辛をも辭むとなきかと、エスタキヨ直に應へて、如何なる苦難も喜て受くべし、肉身の爲に名譽の爲に多くの苦辛を経たる吾身なれば、靈魂の爲に是一層の難義を受くるに何ぜう辭むことあるべき、誓て凌ぎゆくべしとぞ申しければ、彼の聲まつたく静まり、天地寂々として心耳いと清みたり、聖人エスタキヨはやを立ちて家路に向ひ歸りて、妻に子に此事を語り聞かせ、如何なる困難辛苦の事明日より出て來んも測がたし、慎て神の示現を悟り、少しも弱さ心を出さず、教の爲に苦を凌ぎ難を受けんと語りひけるこそ殊勝なれ。

さるほどに一日を経て、聖人夫婦の財産の根ともいふべき家畜忽ち病にかかり、數十の群一度に倒れ死しぬ程なく、使役したる奴隸もまた悉く病みて死し、聖人の生活に充つべきものは全く絶えぬ、一週間を経る間にま

つたくの貧しき人とはなれり、されば尋常のものならばかゝる境に陥りて、さすがに神を恨み、教をも捨つるが多かるを、聖人は千軍萬馬の間にも少しも挫けざる、鐵石の心腸を以て、神の教に入りしと、故神に誓ひたる辭を變ぜず、現世の財に思を措かず、元來財に欲しき所あれば、皇帝に願ふとも我が友に計るとも得らるゝは容易き事なれども、聖人は少しも人に頼らず、自若として此に凌ぎゆき、さて僅少の残れる金もて、エジプトに行き、貧しくも田圃の少を求め、家族農をもて平安き生活せば、やと思ひ決め、妻子を伴ひ、行李も粗く輕らかにエジプトにこそ出て立ちけり。

かゝる困厄も聖人に蒙らす苦みの終局にはあらず、一層無殘なる憂苦を神は與へたまへり、エジプトに渡らむ爲に乗りたる便船の船夫等は、いと惡しき漢どもにて、無慈悲殘酷を物の數とせず、邪淫惡虐の白徒なりける。聖人の昨日まで千軍に將として、兵士を率ひたる雄者とは知るよしなく、其いと粗き衣服を着、貧しげなる扮装に比べて、そが妻のいと美しく、艶な

る容貌を認め、かゝる美人をそのまゝ貧乏ものにすは惜しきなど、言
 したる未だを奪ひて、我もゆにせむとの悪念を起しけれど、聖人が容貌魁
 偉にして雄力逞しげなるに、恐れ種々の悪計を凝らし終にエロプトに着
 ざる中、或港に入りし時、詐りて聖人と二人の子を小船に乗せて陸に上せ、
 船は直に出帆せり。テオピスタは悪徒の詐謀なるを知りて、聲を限りに呼
 びたれど、浪の音、櫓の響に打消され、爲方なくも泣き伏しける。
 かくあるべしとは夢にも知らぬ、聖人は船夫の甘言に誑かされ、妻も諸共
 上陸すべしと思ひ居たるに、事違ひ願れば、我より外に小船の來べき様な
 きゆゑ、小船を漕ぐ水夫に向ひて之を詰れば、いと曖昧なる挨拶なり、さて
 は彼等の悪計にもやと心づき、再び小船を本船に返せと命じける間に、彼
 の本船は順風に帆を孕ませ、海原指して航りゆく、聖人さてこそと心に怒
 り、舟夫を挫がんと思ふ一刹、那彼の舟人は早く海に飛びこみ逃れ去りぬ。
 聖人親子の痛恨如何ばかりぞ、最愛の妻に分れ、最慈の母を奪はれ、遺る方

もなき無念の涙に暮れたれども、木葉にひとしき小船にて、彼の大船に追
 ひ及ぶべくもあらず、青海原をば見渡して、茫々たる浪の上に足摺りして
 ぞ叶ひける。かくて在るべきにあらざれば、神の命と心に慰め、やがて舟を
 ば岸に着け、陸に上りて指すかたもなく、二人を伴ひ歩み行きぬ。行ほどに
 對面に一の川あり、橋なく、いと深く、二人の子をば一度に渡しがたし、爲
 方なくまづ兄を背負ひて、彼方の岸に置き、再び川に入りて、涉り返り、中流
 に及ぶ頃と見れば、一匹の獅子、何處よりか出て來り、今や父の來るを待ち
 居たる弟をば一衝にして、ぞ飛び去りける。おはやと驚き、飛び行かむにも
 流の中なり、心は迫けども、身は動かさず、纒に岸に上りて、疾風の如く追ひ駆
 けしが及ばず、兄の事も心にかゝれば、返りて見れば、是もまた一匹の狼、走
 り出て、いと容易く衝へ去りぬ。茲に至りて、さすが剛膽なる丈夫の千軍
 を靡け、萬馬を驅るの猛者なりける、聖人も妻を奪はれ、子を奪はれ、絶え入
 るばかり、哀みつ、天に仰ぎ、地に俯して、良久は茫然たるばかりなり。

多時ありて聖人は心を取りなほし芝生の上に拜伏しあふ神吾等が罪を洗ひたまはん爲に斯くは吾身を試みたまふ吾は必ず屈せじ撓まじ何事も聖き神の天祐に縋り天命に任すべしさなりくと心を決し猶も往手に歩み行きぬ様々の辛苦の末唯ある人家を認めたり熟思ふに何處を的と定めなき我身なればかゝる家に使はれて一には我口を糊し又神に對する務を果し一には妻子の安否を得る便宜をも得むものとやがて彼家に訪れ漸くにして奴僕となり給料とてもいと低く朝は早く畑に出て夕は遅く歸りつゝ唯神を念じ妻子を思ひて日を過しける妻子の事は忘る時なく悲しく哀に思ひて英雄も眼に涙を堪へて飲食も進まず死ねべき心地しけるを神の天命を顧み考へて自ら慰め心を強くなし居たり此家は農もて業となし家の主人は日を経るに従ひ聖人の常人ならぬに心つき終には家族同様に待遇ていと親切を盡しけり。

ここに又話説兩分て聖人の妻テオピスタは船に捕はれ夫や子の身を案

じ幾度か死ぬべき心地したれど心を神に念じ居しが彼の船人等は聖人を詐はり欺きしを得たり顔に寄り集ひやがてテオピスタを捕へ狼藉に及ばむとせしに近くもの忽ち身軀萎えしびれて即死せり他の船人大に恐れ戦きこは魔術師なり打ち捨てよとて或港にて船より下ろし其處に置きて去れりテオピスタ不思議に凌辱を脱れ只管神に謝しつゝ夫や子供、の安否を知らむ爲に此港の或町に壯麗なる貴族の家ありけるに請ひて婢として雇はれしが元來素性正しく雄者の妻ともある身なれば萬事常人に超え勝り家の内室の氣に適ひ大に用ゐられ親切に扱はるゝにつけても朝な夕な夫と子供の無事を神に祈り居けり。

さて又彼の二人の小童等は獅子と狼に害せられむとしたりしものから川の兩側に多くの羊牧者ありそれと見るより彼の獅子と狼を撃ち殺し子供等を助け被りし傷もさせるとなくて全快しけるが何處如何なる人の子とも知るよしなく其家に養ひたるに凡人ならぬ風采の具はり居た

りければ終に我子とぞなしける光陰に關守なく早くも茲に十六年の星霜をば過ごしたり此時羅馬に於ては其領地の廣大なるによりて再び戦争起り力ある大將なくては協はざりければ皇帝は將軍ブラシードを思ひ出し急ぎ召されけるに往にし昔にエジプトに渡りぬと聞あたりさらば草を分けても彼を尋ねられ來れと臣下に命じ手を分ちて諸道に人を遣はしけりさるほどに使者の中二人のものは陸路を辿りて不圖も聖人エスタキヨが傭れ居る農家にこそは宿りもとめけれ此二人は聖人が將軍たりし頃に使役し者等なれば打見るとひとしくそれと知りけれども彼二人は更に心つかざりけりそは聖人は十六年が間も農家に働き雨に沐し風に櫛り顔は日に黒み手足は鋤鋤に荒びて容貌態度全く昔に變りたればなりエスタキヨ聖人は二人の兵士が我を識らざる様子を見て我名を告げず其儘にせむとしたるものからさすが故郷羅馬の狀態政治の事など間かまはしく親切に二人を遇し何の用ありて何處には行くと問

ふに彼等言を捕へさればなり此度羅馬に戦争起り大將たるべきものなきにあらねど皇帝は彼の武名高きブラシード將軍を用ひたまはんとされけるを彼の將軍往にし年よりエジプト國に流浪人となられしとの事に我等を迎へん爲にかくは使者として來れるなり遠き旅路の効ありて將軍無事にておはさんこと望ましきとになむと語りければ聖人は大に驚き且は本國の様子を聞きて情に堪へず覺えず兵士等の名を呼びて我は即ちブラシードなり汝等忘れたりけるかと言ふに兵士等驚きつ又訝りつ熱視れば聖人が往にし時の戦に項に受けし傷の痕あり喜ぶこと大方ならず急ぎ行李の中より皇帝の賜ひし衣服一領を聖人に被らせやがて主人に此始末詳く語り勇み進て聖人を奉じつゝ羅馬にこそは歸りければ聖人は國の皇帝の寵愛に感じて再び軍に出づるを諾ひ皇帝に謁見せしかば皇帝はいたく喜び早速住居を與へ奴僕をつけ程なく出陣の用意をぞなしにける

十六年の長き月日鋤鉄のみを手にしたれども剛膽勇力昔に變らず老氣
秋に横はると言ひけむ昔の將軍の風采も思ひ出てられ勢力あさく敵
なくして竟に戦は勝利を得人民歡呼の中に再び凱旋門をぞ通りつゝ
馬に歸り來りぬ。

此に戦争の折は諸方より多くの兵士を徵募けるゆる羅馬の市街近くの
家々は兵士をもて充たされける募兵の中に兄弟と覺しき二人の壯者あり
しを聖人は出陣の折に一見し其容貌風采の氣高く戦の時にも勇氣いと
烈しかりし功勞ありしに注目し思ひ當れる所あれば其身の上を質さん
としたれども好き機なくて歸陣なしけるが彼の二人は斯くとも知らず
歸陣に従ひ或貴族の家にと宿りぬ戦は勝ちぬ身は恙なく歸陣しぬ羅馬
の街は程近しそれにつけても我々が父母如何にしたまひつらむ思へば
我等兄弟は兩親ともに羅馬の街を出てたちて憂き艱難に母に分れ父に
分れ牧羊者の子となりてかくは成長したりしなり父母無事にておはし

まさば見ゆるともあるべきがなと二人は折々語らひつゝ猶ほぼろげに
覺え居る船の難義さては川の傍にて獅子狼に襲はれし事など話しける
が此貴族の家に働き居る女房は即ち彼のテオピスタなりければ初より
二人の容貌さては風采の壯き時の我夫によく肖たるに目を注げ今また
二人が物語りをば聴き取りていよく我子に紛れなしとは思へども斯
る賤しき身にてありながら母なりと名のり出てむは子等に對しても氣
の毒なり且はたしかにそれと定め難し彼等二人の仕へ居る大將に見え
しならば其が身の上も詳しく知れむと兎や角心を惱しけるが賤しき婢
の身にては容易く大將などに逢ふべくもあらざりけるを神の助を蒙り
て不思議に彼の大將に面あたり逢ふ便を得たりける彼の大將は思ひさ
や十六年の往昔より忘るゝ時なき我夫の「エスタキヨ」なりしかば我夫に
ておはせしか我妻にて在りけるかと雙方ひとしく驚き喜び此に彼等二
人の身の上も明になり親子四人が艱難の中にも無事に再會したると眞

に神の愛徳深く冥助の厚きゆゑなりと、ひとしく感謝し喜びけり。
 されば聖人エスタキヨが多年の艱苦も神の冥助にて、朝の露の如く乾き、
 喜悅の一家集りける此身の上にて、聖人が現世に於ける務は終りけるか、
 神に對する功績は是にて完成ものなるか否々、聖人は尋常ならぬ英雄な
 れば、神は尙も勝れたる務をば爲さしめむとて、残したまひぬ其務とは何
 事ぞ、教の爲に致命するいと畏き神の所爲なり。
 聖人は戦争勝利を得て多くの兵ども引き率れ、羅馬府に歸りける後、皇帝
 は改めて聖人の凱旋を祝ひ歡び迎ふる式を行ひ、さて彼の寺に行きて勝
 軍の神に禮拜せむとなしたりけり、しかるに聖人は往昔ブラシードにて
 ありし折こそ之を唯一の軍神とはなしたれ、今は眞神に身を捧げしもの
 なれば、此木像に向ひて物など献ずるとなきは、勿論禮拜をばなさざりし
 かば、皇帝訝り驚きて其次第を問ひける、聖人は少しも憚らず、さればなり、
 此神は眞の神にあらず、唯是偶像なり、我等此度の勝利は眞に御主キリス

トの冥助にして、偶像にては候はずと言葉清らかに申しければ、今まで喜
 悅と賞讃をもて聖人に對したる皇帝は色を變へて大に怒り、汝はしか心
 得居るとも、此神は我國の勝利の軍神なるぞ、我が命令に従ひて速に物を
 供へよと言はれければ、聖人重ねて、王命は水火も避けず死するをも辭せ
 ず候へども、偶像を禮拜して物を供ふるとのみは、假令王命なればとて、從
 ひ難く候と、斷然として動かず、其時妻子も共に來りて我等も信者なりと
 公けに申しければ、皇帝今は全く惡みの心を起し、旋なりとて直に聖人親
 子を捕へ獄舎にこそは入れたりけれ。
 四人は明日は刑に逢はむ、此度こそはまことに靈魂の勝利凱施なりとて、
 靜に神に祈禱せり、明る日兵士來りて四人をコリゼオに伴ひ行きけり、此
 コリゼオは羅馬有名の大團の場所にして、多くの猛獸を放ち置き、信者を
 殺す法場なり、そを羅馬人は喜びて見るこそ無慘なれ、聖人親子はやがて
 刑場に曳き入れられ、四頭の獅子奮然として出て來りぬ、人々あはや一街

ならむと思ひさや獅子は近く寄りて親しげに狎れ陸み手を嘗め足を甜りて少しも害を加へず人々驚き魔法なるべしなどいふされば獅子を追ひ遣りつ此度は場の中央に銅を以て作りたる牛の形の火爐に盛に火を焚き四人諸共に此中にぞ投げ入れたれ千軍萬馬に雄武を振ひし英傑も神の御前にはいと温和にして爲らるゝまゝ焼かれける凡そ三時間可を經て全く致命したりしかば爐より屍を取り出すに更に焼け爛れたる痕もなく創つかざりけり人々之を見之を聞て誠に悪人にあらず罪なき善人なりけるを殺せるはいと残酷なりされば神は冥助を下せり眞の神は是なりとて是によりて心を改め道に入り救の信者となりしものいと多くなりけるこそ聖人致命の功績と言はましか聖人致命の時は實に降世後一百二十年九月廿日なり。

聖マテオ使徒

九月二十一日

マテオとは聖書の初にある福音書を録せし人にて皆人のよく知る所なるが此マテオは本名にあらず俗に所謂字なり聖人の自らしか言ひたるは謙遜の爲なりマテオ本名をレウサといふルカ傳には常にレウサと書けりユダヤ國のカリレヤに生れ若き時より税吏となりて其生活をたてり此勤は元猶太には無かりしを羅馬の領地となりてより此役人を置くこととなりしが税吏はもと人民を責て租税を催ふし取りたてそのみならず賄賂を收むなど正しからざる行爲の多きもの故人民は之を惡みたり且つユダヤ人は外國にむかひて税を拂ふとを深く嫌ひたりけりさればマテオの職務は此人に嫌はれまた正しからぬ事多き役なれどもさせる心苦しき事もなくカファアルナウムの市に居りて務めを爲しぬ此市は海に沿ひたる所にして海上の商賣者より税を取るなりマテオ或時税關に坐し居ける折柄御主端なく通りたまひマテオを招き我に従へと言ひたまひければマテオ心に照臨を得救世主なることを悟り

其まゝ總ての事打ち捨て、御主に従ひよりて熱心なる信仰を起し、ありし以前の罪を悉く脱き去り心を改め思を清くし我身を立てゆくのみならず同僚なりし人々にも教の意を語り多くのものを我家に招き養應つゝ御主に紹介せける。又税吏にてありし間人を罪に入れしなどの事につきての器具財貨等は御主に聞えあげて悉く之を賣り貧しきものに金を與へ前に犯せし事をば償ひける。

此聖人は學問頗るあり智識もまた長じ居たりしが、御主の事を深く心に銘し、それを紀念となし置かむことを考へ、やがて早晚御主の語りたまひし事我身の上など一書となして記し置かんと決心ありけり。御主逝去の後十五日程もユデアに留まり、それより諸國を巡り教を傳へり。聖人は殊に舊約書に詳しきゆゑ舊約の預言を引きて證となし、基督御主の他に救世主なし是を眞の神の世に降したまひし御主なりと説きけり。他の使徒多く萬國に行きて教を廣め道を傳へければ聖人も諸國巡

歴を思ひ、そが前に平常の素志を成しとげむとて己が御主より聞きまた知り得たる所の事をば書に綴りたるが、是ぞ聖書の初に置かざるマテオ福音書なり。聖人の福音書はもと猶太人の爲にとて書き記したるものゆゑ、まゝ猶太人の知り居る事實は大概に省き、また記すもいと簡略に註釋をなさず或はユデアの習慣をそのまゝに録すなど總てヘブレヤの國語にて記し諸國に通じて益せむとの主意ならざりし、されば今日之を讀むにいと解し難く讀みかねる節多し、此書の目的は偏に深くキリストは眞の救世主なることを證するに在りて古昔の預言者の言を多く引き用ゐたり。

さて聖人は書を記し終りてユデアの故國を去り、まづアフリカのエジプト國に赴きぬ。此國當時いと隆盛の折にて奢侈華奢の風盛に、人民皆世の浮きたる榮華に迷ひ居しゆゑ、教を聴きて善につくものいと少し。聖人は心を勞して傳導に力を盡し、多少の信者出て來るに至りぬ。聖人はそれよ

りアフリカの内地に進み、エチオピアの國に入りたり。聖書に記せる如く此國に少しの信者あり、御主上天の後、エチオピア皇后の従者一人、エブヤに於て聖フイリポより洗禮を受けしとあり。されば此國の人民は聖人の説教に耳を傾け、信者となるもの相つぎけるが、何處に行くも此眞の教に逆ふもの多きは常にして、此にも逆徒あり、こは悪魔の爲なりしが、二人の名ある魔術師ありて、教に逆ひ、キリストは神に非ず、その弟子等の爲すこと何の尊敬ふ事あるべき、我等も容易く爲し得るなり、疑ふものは見よとて、群衆の前にて種々の不思議なる事を爲し示し、人民を誑かしける。それがために心弱く、智暗きもの其欺く所となり、教を信ぜむと思ひし心を翻し、または道を聞くを止め、中には信者も迷はされて、其信仰を失ふものあり。聖人は之を見て、大に心を傷め、神の力に頼りて、此魔術を挫き退けむと、熱信をもて神に祈り、御主に念じ、通夜なして、キリストの眞實なることを顯はさむとを願ひ、終に照臨を受ければ、或日教萬人の前に、彼魔術師の様

々の不思議を爲し居る所に至り、多くの人の面前に立ち、人々聽けと大に呼び、さて二人の魔術師に對ひ、大音に吾今御主キリストの聖力に依りて、汝等の權を奪ふと申しけるに、果して二人は何事をも爲し得ずなり、はうゝ逃れ去りける。是によりて、人民再び心を明になして、教を信じ、王も其家等まで、皆信者の數に入りける。就中國王の一人、嬖は柔和温良なる賢女にして、よく教の事を悟り、道の旨を心得、日夜祈禱し、默想し、怠りなく、神に事へ、殊に御主が人間を救はむ爲にと、人の形骸を受けて、其若難を嘗められ、十字架に懸りたまひし事を深く感動し、其恩を報いむ爲に、財貨を捨て、我身分を捨て、我一身をも神に供へ、獻ぜんを聖人に語りければ、聖人はいたく善き事なりと褒め、感じける。かゝりしかば、王女は心を決し、自ら其宮を出で、いと質素に同じ心の人々、諸共少し離れたる地に住ひ居けり。しかるに、花に風多く、月に雲たちこめやすき世の例に漏れず、此王女の父なる國王は、病の爲に世を去りたり、後を嗣ぐもの王女の外に子なきものか

ら王女は神に身を献じたる身にしあれば王となることを辭み其從弟なる人に王位を譲りたり。

此從弟なる國王は王女に對し恩を謝し義を銘してこそ真正の心なるべきに、さはなく却て不倫邪念を發し王女に對し婚姻せんことを願へり王女はもとより王位を去て、神に従ひしほどの事なれば、いかて應ずるとあるべく固く之を辭みたりしかば從弟の國王はやがて聖人を招き王女に説きて其意に従はせむことを頼みければ、聖人は事の意外に呆れつゝ詳かに道理を説きかせ、其道にあらざる事を諭し退けたり。

肉身の邪慾に驅られ迷津の深みに陥りたる國王は、之を聞て大に怒り、さながら狂人の如くなり、これ全く聖人が王女を勧めたるなり、峻かしたるなりとて、直に捕手に命じて聖人を囚へさせける。此時聖人は祭を献じ祈禱をなし居ける處に、兵ども來り集り槍隊を作りて終に聖人を衝き殺しぬ。聖人年六十歳なり。

聖人エチヲピヤに在りて、教の爲に心を盡し力を勞すること二十三年の星霜を経、聖堂を建て、教の基礎を固くし、また信者に聖水を用ゆるとを教へたり。こは極めて大切なる事にして、外に出づる時、誘惑に逢ふときなどいと冥助と利益ある事なり。又教會を助くるの規を作りぬ。そは農家に於ては其初めて實れるものを初穂として教會に納むる事にて、商工を問はず、總て信者は其初物をば先づ教會に納むるの法なり。されば此法後には自然に行はれ、爲に教會もいよゝ盛大を加ふるに至れり。讀む人、聖人マテオの神に對する意を知らむと思は、其福音書を繕き見るべし。

聖イエロニモ博士 九月卅日

聖人イエロニモは降世後第四世紀に當り、グルマシヤに生れたり。グルマシヤ今は埃地利の領地なり。聖人の兩親は信者にして、家格元より正しく、聖人の教育にも心を用ひける。聖人は天性學問を好み、國に於て有名なる

學者を選びて之に就き日夜怠りなく修學し進歩は驚くべき程に上達し、殊にギリシヤ語ラテン語に精通するに至りぬ此二つの語は學者尋常の事にては學び得ざる課目なり。

聖人の學業進むに隨ひ早故郷里にては學ぶべきものも無りければ其頃榮えし羅馬の都に至りけり此時の羅馬は實に文學武術商工技藝の淵源にて學者の如きは秋の夜の星の如く集りぬ當時書箱の類世に稀なりけるを羅馬にのみは少からぬ珍書を集めたれば苟にも學者たらまと思ふものは必ず此地に學ばではかなはざりしなり聖人は此に遊學の身となりて潛心學術に従ひける。

然るに當時の例として教會の規定いと嚴く洗禮を授くるといと手重し、小兒の時より受洗さするとなく唯其人成長て能く教理を解き自己の心より望を起すに至りて後に洗禮を受けしむるなりされば小兒の中病危き時或は特に事情ある折ならては大抵皆成年なるまで洗禮を受ず聖人

も此時猶未だ洗禮を受ずして恰似今日の志願人の如くなりけりされば其心に守る所自ら弱く動もすれば肉身の欲に迷はむとする誘惑に逢ひけり此時の羅馬は繁華なるに伴れて風習も亦奢侈に傾き居たれば學生等自然と不品行のもの多し聖人も朱に交れば赤くなるの例に漏れず不善の朋友に誘はれ品行大に悪くなり亂暴なる遊興に耽る事數重なりけりされど元より無知無學のものに如く其不善なるを知らざるにあらねば悪しき事とは知りつゝ唯我肉身の欲をば抑へかね其悪しき事を爲し了りし後は悟ゆる事度々なりされば良心と肉欲と後身の中に争ふがゆゑに元より此上なき樂とはならず如何にもして肉身の欲を制せんと思ひ或時名高き教の致命者の墓所に至り其前に俯伏して頻に祈禱し何卒して此不品行を改め徳を修め道を守り天晴道徳智識の聖人とならむことをば默念したるが神は聖人の誠意を容れたまひけむ此に至て聖人の心は鐵石の如く強剛なり品行是より正しく勉強怠なくして洗禮を受く

るに至りぬ、此時年三十歳、さて其改心は尋常の改心に非ず、罪を犯すことなきは勿論、罪となるべき誘惑をも受けざらむとて、是までの惡しき朋友と一切交らず、一室に静居りて祈禱と學問研究に餘念なく、實に勉むれば、勉むるほど益、勉學の念盛なるに至り、後來大學者となるの基礎を据たりけり。

斯くて後佛國獨國に至り、數多の學者に就き其説を聴き、益修行を爲し、又ユヂヤ國に至り、學者に會合し、後に静かなる山林に籠りて、數年の間、月を友となし、花を侶となし、つゝ祈禱、勉學して、神の照臨を仰ぎしところ、人々聖人の事を聞き傳へて、教を受けんとて來り、従ふものありしが、其規則のいと嚴しき爲に、得堪ずして去るもの多く、或は病にかかりて死するものありて、間もなく一人残らずさりぬ、聖人は落膽の餘誘惑に罹りたり、そは斯る山林に唯一人空しく修行すと、何の益かある家に歸らば、何不足なき身にしあり、殊には是ほどの學業を爲せる身が山林に朽ち果てんは

此上なく無念なり、世に出て、衆くの人々に敬はれ、名を擧ぐるこそ本意なれとの心類に起れり、折柄冬の寒さとなり、野も山も黄ばみ、つゝ食ふべき果實さへ食ひつくし、野草の根に命を繋ぎ、衣服は破れいと見すばらしく寂しうなり、剩へ病に罹りて、枕に臥し、良久は食ふともかなはざる、困究に陥り、益世間を慕しくなり、けり、はや山を出てむと決心せし時に、御主は聖人に現れたまひ、爾は道德智識一方ならず進みたれど、其學べる事唯哲學のみにて、俗學なり、勿論世間の爲のみならず、それにて事は足りなむ、されど靈魂を救ひ生さむとは、更に益なし、されば些少の困難に由りて誘惑に負くるなり、爾心を潜め、思を留めて、聖書を學べよ、さらば靈魂は救はれむ、俗學は無益なりとぞ宣ひける、聖人は深く驚き、つゝ大に喜びや、がて家に歸りて、其所持せる書籍を悉く賣り、そが代として、聖書を求めて、熱心に勉強せり、先づ舊約聖書より始めむとしけるが、さて此舊約はヘブル語を以て記録れ、ユヂヤ人此時までも守り居ける故に、原文につきて學

ばむにも聖人はヘブレヤ語を解せず是に於てヘブレヤ語の師を求め非常の勉強に依りて終に其語に精しきに至れり其間少しも誘惑等に逢ふとなくいと嚴に身心を持ちける其後神の默示によりて或司教に就き靈父の位をば得たりけり此時に當り信者の中に種々の異説を起すものありしを司教の命に依て聖人は妄を正し誤を解き眞正の教を傳へたりさて聖人の爲せる功業の中に殊に俊たるは舊約聖書の翻譯なり時の法皇は聖人イエロニモの俊れたる學者にてヘブレヤ語にさへ通ずるを聽き羅馬に召して聖書をラテン語に譯するとをば命じたり此頃キリヤ語ラテン語に譯せし聖書ありしが皆誤謬多くして讀み難く有れども無き如くなりければ法皇は聖人にそを譯さしめて眞正の聖書を得總ての奉教人の爲に之を用ひて誤解なからしめんとて命じたるなり聖人は法皇の命に従ひ先づ新約書より始めたり此ラテン語は實に教會の通語と謂ふべくいと明切なる語にしてまた美しき國語なり神の聖計によりて

世の終まで此語は存すべしとなり聖人は新約を譯したる後舊約を始めむとてユテヤ國ベトレヘムに行き其地に留り種々の學者の説を質し地理を實檢し歴史を研究し非常なる困難の勉強をもて茲に十五年の歲月を経て初めて舊約聖書を譯し了りぬ法皇は之を以て眞正なる聖書にして少しも誤謬なしとて聖定をぞ下しける今日全世界奉教人は此聖書を用ひる居るなり又何處の教會に於ても其國語に譯せんには必ず此ラテン語譯に依らざれば法皇の許しを得ざるなり聖人は長く聖書と共に忘れられざるなり

聖人は聖書の翻譯を爲せしのみならずその註解をさへ著したるまことに其業の困難なると人々の想ひ至らざる所にして稀有の大事業といふべく其成功せし時は諸地の人々より書翰又は使をもて聖人を讚美しけるが聖人は益謙遜をなし寸毫の傲慢の心を出さず益熱心に道を修め小兒に教を聽せ教育を善くし或は貧人を慰め苦辛を忍びて此世を渡れば

後の幸福あらむと教ゆるなど少しも閑暇なく教の爲に力を悉しけり。又童貞を守る人々の爲に一の會を建て其會に入るとを勸めていひけるは此の如き人々世間の塵の汚を捨てて神に仕ふるは國の爲社會の爲に却て肝要なるとなりと。また或る異教者へルウジウスなる者其説を駁ち聖母マリアの事に就き惡説を吐きけり。そは聖母の童貞に非ず御主の外に子ありしことは明に聖書に記されたりとなり。聖人は其異説にして誤れるとを論じ正しく深く考へて聖書を読むときは聖母の童貞なるは明かなり御主の兄弟の事に付きて其何人たるやは判然として知るところあるべしとて益童貞を守るとを信者に勸め依りて童貞の事も漸く盛になりぬ。信者の人々は彼の異説の人をいと憎く思ひけるを聖人の駁したるによりて攝伏しければ皆喜びあひけり。此時聖ボニファチウスもベトレヘムに居りて童貞の事につき命を受くる因由ありて一の會をば建てけり。聖人は常に種々の方をもて肉身を攻め病身なるものから更に厭うとな

く常に申しけるは肉欲肉情は靈魂の敵なり必ず肉身を敗りて靈魂の勝を得ざるべからずとて少しも其身を勞し苦むをば厭はざりけり。聖人年老て十四年の間其手常に戦き筆を執るといと難く眼もかすみて書冊を視る能はずされば爲方なく人を備ひて書を著はして之を筆せしめ或時は教理に對して逆らふ説を記したる書を讀ませて之を聴き一日も教の爲に力を盡し心を用ゆるとをば止めざりければ弟子等其勉強に驚き少しは休息することもあるべしと勸めけるに聖人は否とよ我は墓中に入る時こそ眞に休息なれとて更に從はず若年の時肉欲を恣にせし罪の償なりとて常に事に從ひけるが次第に老衰を加へて大病となり遠からず世を逝るならむとて弟子及び信者を集め人々愛徳を守り互に愛敬の心を以て相交り過は之を赦し改悔さすべき事は信者の爲すべき大切なる事なりと遺言しつゝ竟に永眠にぞ就にける。弟子等信者と共に集りて御主の降世ありし厥の中に葬り後聖骨を羅馬

に改葬したりけり其齡八十歳誠に稀有の聖人にして其聖書翻譯の事は世の終まで長へに朽ちず滅せざるの大功といふべし世の人間に志ざさば斯る博士となり聖人とならまほしきものなりかし。

聖レミジヨ司教

十月一日

今は昔千有餘年前佛蘭西國の狀態は教の光いとも暗く信者の數少くして人民の三分の一には過ぎざりけり大概亂暴勇猛をもて人間の分となし諸侯伯各がぞし其國土に據りて軍兵を擁え攻城野戰の闘争絶ゆる時なくさながら我朝の元龜天正時代の狀態に似たりされば人民唯一武勇を以て務となし劍を揮ひ槍を懸し靈魂のいとも大切なるなどは夢にも思ふ者なく假ひ信者なりとても教に従ひて其勤行をなす暇なきほどにして世の中いかに荒れ果てたる漠々たる野原の景色に似たりけり。雨夜の星ほどにありける熱信の修行者に此野蠻なる世の態を救はんと

して人里離れし山中に行き林に臥し草に眠りて神に祈禱を捧げし中に就きて一人の殊更心俊れたる行者ありたり此行者痛くも世を救ひ人を助けむと志し國中の亂戰速に平定して人民各其土に安じ道德の心を起して教に入らむとをば誠意をもて神に願ひ祈りける。

或時神の默示ありて此行者心に悟りたるとありそは遠からず一人の英雄生れ出てやがて麻の如く亂れたる天下の狀態を平穩に纏め人民をば靈魂の尊き教に救ふべし其人は諸侯の中より出でむとぞ默示れけるなり行者は此ありがたき默示を蒙り自己の力の神に通じたるを喜ぶにつけても多かる諸侯にて是ぞと思はるゝ人の許に至り什伍を語りて其様を視るに此侯は素熱心なる信者なるが夫婦ともに齡既に老いて小兒一人もなし行者は默示にて必ず英雄は此家に出づべき由を話すに夫婦は年老いたれば左るとはあるべくもあらざるなりとてつや／＼信ぜず行者は再び神の聖計によりて必ず此事思ひ當らんとて去りにけり。

斯くて一年を過ぎざるに、此侯の夫婦の間に一人の玉の如き男子出生しける。是ぞ蓋世の英雄佛蘭西國の恩人なる聖人レミジヨにて時は降世後四百四十九年なり。兩親は驚と喜とを打ち混せて彼の行者の神の默示を語りたる應驗をば深く感嘆したりける。さるほどに尋常の子にしあらねば心を用ひて養育し稍物心覺ゆる頃となりしが、そも英雄とならむことは如何なる道に依りて成るべき強き猛き軍人となりて諸侯を従ふとなるべきか、または世に稀なる技倆の政治家となりて天下の政事を一手に握り人民を統べ安心さすべきとならむか、行末遙けき一人の我子が身の上如何になるべきや知るに便宜は無ければ唯々神の聖意に任せ及べるだけの教育は力を盡し、知れる限の事どもは常に教を怠らず先第一に神の教は大切なるものなればとて、其要なる道理を説き人たるものは如何なる事を爲し行くにもよく神に事へ其天理の法に背かざらむやう教へたり。かくて月経ち年行き春秋の眺幾度か移りつゝ、聖人は成長の齡に近

づきけるが兩親の心は其英雄とならむことは兎にも角にも侯伯たる家門に主となるべき武術の修業は爲せるが上の事なるべしと思ひしものから、聖人の行狀性質全く兩親の豫想に違ひ、戦争の物語は耳を塞ぎて之を聴かず武術の修行は少しも務めず、武具をさへ手に執ることを嫌ひ、時の猛き武士の中に立ちて世を経べき事どもは少しも顧みざりければ兩親は大に憂ひ、さては此子は神の聖意に協はずなりけるかなと思ひ煩ひしが、また思ひ翻しつゝ、武士となるならずば大政治家となるにやあらむとて、其様を視るに、聖人は漸く成長して友輩と語らふに、少しも政事なんどの事柄を好まず、總じて權變の計畧、精妙の術策などいへる世に交りて其時代に勘要と思はれし事どもは更に爲さんとする氣色なし、かゝりしかば兩親は痛く心を惱し、侯伯の家に生れて武事を嫌ひ、政事を好まず、かくして行末何とかなるべき世に、此二箇の事を除きて英雄の技倆を振ふべき事やあるべき、過ぎし年行者の言ひし神の默示は我等の罪をしも答

めたまひて、かくは材藝なき小兒とは爲したまひけむ、彼が如き身にしては、如何てか國を救ふの英雄とならむや、あゝ甲斐なかりける事なりしと嘆ちつゝ、やがて聖人を側近く招き寄せ、汝はそも行末何をもて其身を立てむと思ふや、志す目的あらば藏まざる語り聞すべしと申しけるに、聖人はいと従容たる面貌にて、我身是といへる世に身を立つべき目的なけれども、唯一の望あり、そは他ならず此現世の塵垢繁き事を捨て、神の建てたまひたる救の道に入り、教師となりて、此道を蒼生に教へ、理を世間に説き、依りて血を流せる戦争を止め、屍を積める擾亂を静め、もて國を溝壑に墮ちたるより救はむとなり、是まことに第一緊急の事にして、佛國人民此道を守りて失ふとなくば、世は必ず平安に榮えむと、辯舌明かに毅然として答へける、兩親は臘夜の雲晴れて、さやけき月の光をぞ看しが、如くに疑惑を解き、喜悅の眉を展べけるぞ道理なる。

聖人は自己の決心を兩親に告げ、それよりして心を道に傾け、熱信修行な

しけるが、二十二歳の時に祭司の位置に上り、いよゝ熱信を加へ、普く人民に教を説き聞かすのみならず、彼の戦争に従ふ諸侯伯の許に自ら行き、懇々に道理を説き、教を語り、戦争の漫に爲すべきものならぬを言ひて之を止め、神の聖意に従ひ行くべきを諭し、勧めたり、元來聖人の勢力は人々の信心を服させけるがゆゑに、侯伯多く其勸告に従ひ、騒亂漸く静まりぬ。

聖人は程なく司教の位に上りたるが、此司教は今の様と異なり、司教の勢は實に大なるものにて、政治をも司どりし如き様なり、そは信者の財産を總て一となして之を統へ、括り命令をもて事を行ふなれば、其勢は侯伯に異ならず、聖人は數ヶ所の信者を監督し、其信者を導くの才力は實に驚くべきほどなりけり。

當時國中飢饉の兆候顯はれしを、聖人早くも之を悟り、其司配の信者に令て五穀食品を他に賣ることを禁じ、悉く聚め積みてこれを其倉庫に藏め置きぬ、やがて一年を経し、頃果して大飢饉起り、他國の人民は餓死するも

の算を亂して多かりしが佛國は聖人の用意によりて其難に罹るを免れ、彼の倉庫を啓きて人民を養ひたり人々大に喜びて聖人は靈魂の親たるのみならずまた肉身の親なりと申し合へりけり斯の如く聖人の熱心神の聖意を擴め人民を救ひて世に洪益を與ふると多きが中に或日邑中火を失するものありて折しも風強く大事にならむとせるを其熱心にて鎮められしとあり此火は風に從つて焰烟天に漲り消し止むる術もなくわはや邑中悉く灰燼にもならむとしければ聖人は燃え來る火の前に屹立して雙手を天に擧げ稍良久神の救助を祈りしに火の勢次第に弱り忽然として皆鎮り危き火難の災害を免れたり。

茲に時の佛國の王は才氣ありて軍略に達し其名をクロウイス王と申しける元來未信者にて度々戦争を爲し苛酷所爲などありしが折々に教の道を聽しよりそを良事なりと同じ婚姻には必ず信者なる婦人を娶らむと思ひ居けるがやがて其望の如く聖德優れたる聖クロチルダ皇后を娶

りたり此後の言に依りて國王は猶更に善き人となりキリスト教ならては國を盛にし榮えさするとかなはずとまで悟りしかば未だ洗禮を受けざれど聖堂を建て司教司祭を補助る爲にとて多くの金をば出されけり或時王の宮近く戦争ありし折柄王の兵士の中に聖堂に亂入し聖器を奪ひし者あり聖人はこは捨て置き難き事なりとて自ら王宮に参りいと穩に其非理を語り聖器は神の物なれば今俗の身をもて濫に之を奪ふなどに神に對して此上なき無禮なりとて戒しめぬ國王は氣早き生なれば頻に聖人に謝ひ直に彼の兵士を召し寄せ聖器を返すべしと命令しけるを兵士従はざりしかば大に怒り神の罪人なりとて自ら兵士を殺したり神を蔑せし罪を罰せるとはいひながら教の道よりするときはいと慘酷き所爲なれば聖人はそを諫め王も後には野蠻の舉動止みにけり皇后は常に祈禱を神に捧げ王の信者とならむことを願ひたるが王は武人の習慣として皇后に對しても癖事時々起りけるをばいと苦しと思ふものからこ

れを神に捧げて祈りつゝ王に洗禮を受くべきとを勧めたり國王は戰の事に紛れ政治の事に拘はりて忙しとて其勦に従はずありけりさるほどに或時獨乙國と戰爭起りぬ此時のドイツは今日と異り亞細亞より侵入たる野蠻の稱屬にて其數百萬人もありて勢力あさく強かりければ佛の國王は此度の戰爭は我畢生の大事なり勝たむこといとむづかしとて頻に思案を凝しけるを皇后は傍より王さほどに憂ひたまふ戰ならばキリストの御力を藉りたまふより外あるべからずされば此戰勝たば必ず信者となるべしと神に誓ひを立てたまひなば戰は安く勝利を得べしと申されしかば王はもとより皇后の信徳を信するゆゑに其意に従ひ終に神に對して誓約を爲し戰場にこそは出てにけり戰を交へしに及びてさしにも強き獨乙勢は佛王の勇に敵しかね大に敗れて引退き佛王は大將の首捕て凱歌擧げて歸りけり

佛王は大に喜び誓約を履みて洗禮を受けむといひければ皇后深く神の

聖意を感謝し喜び急ぎ使をもて聖人を招きければ聖人は早速宮中に参り王に謁して教を説き信者となりし上は守るべきと行ふべきとを詳しく語り總て平和をもて國を治め苟にも樂の爲に戰を爲すまじき理由を教へ戰は國の幸ならず災害なるをも申しけるに國王は皆其言を承け容れたればいよく洗禮の式の準備を整ひけり當日は佛國の大祭日にて國王皇后王族を初として貴族等悉く聖堂に集り神に詣てけり聖人はやがて嚴なる説教をば爲して神に祈禱せるに神は聖人の誠真なる心と言に證を示し聖堂の中光り輝きて旭日の如く耀々としていと尊く覺ゆる折しも上天に朗なる聲ありて爾等平和なれと告示られたり皆々長くも奇異の思をなし神の稜威のいや高きに感じけりやがて授洗の時聖油無かりしが忽ち一羽の美しき鳩翮々として舞ひ來り聖油を聖人の手に置きて飛び去りぬ聖人は其聖油をば王の頭に塗りたり此時より代々王の即位の時には其聖油を塗る事禮となりて數百年の間續きたり此語は

如何にも不思議なるとなるが、當時佛國の狀態蒙昧を免かれず、されば神はかゝる奇蹟をもて人民を感動せしめたるに御主在世の時と同かりし事なり。王と共に洗禮を受けしもの王族貴族三千人の多きに及び人民は數知れず、王は總ての事ども此時より聖人の意見を聴き、昔日の亂暴なる行は少しも無きに至りいと温和なる性質となり、或諸侯の謀叛せることありしが、聖人の道を説くに從ひて之を攻めず許しければ、其侯は自ら悔みて歸順しけり。かくて戦争を止め、商農を勵し、偶戦はでかまはぬ事あれば、敵の爲に助を神に頼りたり。是皆聖人の功績にて、佛國は日に増し盛になり、威名赫々として四方に轟き、人民皆安じて業を執り、神の榮を顯はしけるは、誠に彼の行者の默示を蒙りしに違はず、世に稀なる英雄は聖人なりけり。

此にまた聖人の力を煩はすこと出て來にけり。アリウスといへる異端の者起りて、キリストは神に非ずといふ邪説を唱へり。無知なるもの多く之

に誘はれ、佛國にも傳播しければ、聖人は各司教を集めて會議を開き、異教者の邪説を挫かむとを議しけるが、司教の集れるもの三十三人あり、皆起立して聖人を敬ふの禮を爲したり。其中に一人の司教は彼の異端に誘はれ、邪説に迷ひ却て聖人に向ひ其説を述べむと思ひしが、神罰ありて舌は乾き、胸躍り一言も發すると能はず、躊躇ひけるを聖人は之を知りて深く説き諭しければ、彼司教其徳の高大なるに感じ、忽ち心を改めて服したるが、其時聖人は力を極めて邪説を撃ち、異端を説破し、ゆゑに終に佛國に其邪説の種子を絶つに至れり。

聖人年老いて病多かりしが、終に眼を患みて、兩眼を失ひたり。然るに聖人は却て喜びて信者の道は苦なり、現世に於て苦めば來世に於て安全なり、されば人の運命は秤の如し、現世に苦の重荷を入れ置かば來世にはいと軽く登るとを得べしと言ひて、弟子を召し寄せ、我死に近きたれば、今一度彌撒聖祭を行はんとて、やがて聖祭を爲し、式の終ると共にいと靜に世を

逝れり齡九十六歳なり。
 今佛國の歴史を繕きて其隆盛に赴きし原因を案ずれば聖人の功績はいと顯明に見ゆべし、まことに蓋世の英雄とは武具を執て戰場に臨み血を流し屍を積むの勇者を言ふにはあらず、權謀術數を巧にして人を欺き服すの政治家にもあらず、但徳高く愛深く涙を灑ぎて天下の人民を救ひ服の道によりて靈魂の飢を醫すものこそ英雄とこそいふべけれ、佛國の助けしものは王に非ず侯伯にあらず、政治家にあらず此聖人の方なりといふべし。

聖フランシスコ、アシジヨ 創立者 十月四日

今は昔七百年前の世の中の教の信者たるものは大概皆其心を腐らし信仰冷え神を知ることなく唯々財寶金錢に靈魂の貴さを忘れて肉身の遊樂にのみ耽り、いとも淺間しき状態にて世は澆季なりと覺えけるが神は

一の聖人を世に起して此等の人を警戒めたり。
 其人は即ちフランシスコなり、聖人は降世後一千八百八十二年意大利國の

アシジヨといへる市に生れ名をば市より取りてアシジヨとは名けたり。兩親は土地に名ある富豪の商人なれど性質吝嗇にして道理に迂かりしされどフランシスコは長子なれば之を愛するといと深く、さすがに物惜せずいと鄭重に養育しける。

フランシスコ性來溫和篤實にして才氣あさく人に倭れ、加之容貌いと美しき男兒なりければ、人毎に之を愛し、稍成長するに及びては其地少年の達者とはせられける。其頃教の衰へ居し時なれば、此フランシスコも熱信なる者には非りしが、親の吝嗇には似ず心いと寛く、志まことに高尚にして徳を好めり。されば我所有を特に貧しき人に施し、病めるものに恵むなどいと信切なり。それも彼の名を好み譽を求むる傲慢の心より爲すに非ず、常に人知れず其義心を行ひ且は其施し與ふる貧しき人々に向ひ我

爲に祈禱せんことを願へりかれば我用を欠きても食しきもの、憐みを乞ふとあれば其意を満しやるを常とせり或時多くの明友と共に樂しき遊戯に餘念なき折柄一個の貧人來りて憐を乞ひしが遊び心に奪はれて思はず乞を謝りたり彼の貧人望を失ひて去りけるほどに聖人は忽ち心づき急ぎ追ひ駈け行きて望むまゝに金與へけるとなむ。

年二十一二の頃國に戦争起りしがフランシスコは少年血氣の情禁じ難く兵器執て戰場に従ひ軍勢に加はりけるほどに心早き少年の常として眞先に進み戦ひ思はず深入して敵人に圍まれ突けども切れども力及ばず生擒にこそはなりたりけるかくて敵陣に囚はれ他の同じ生擒と共に在りしが中には創を負ひて呻くものあり病に侵されて難むものありその人々を慰め勅はりつゝ自己もまた病に冒され終に重き枕に臥し幾度か絶えなむとせる玉の緒の危き命を繋ぎ留めぬ斯く苦みの境界に逢ひて過去の罪過をば深く考ひ我を我身を糺明し今迄は金錢を浪費し

衣食に飽き少しも靈魂の尊さを知らざりしを後悔し此病全快の上は必ず心を改め行を正さむとぞ決心したりける然るに病愈えて生擒の苦をも免されける時に咽喉過ぐれば熱忘るゝ凡夫の淺間しき心より何時しか前の決心を忘れはて病める時の心は無く再び金錢衣食の事のみを心に委ね浮きたる世の事のみに関らひけりされば此世の名譽を得んには軍人となるに如かずと思ひ居る折柄意太利はまた獨乙と戦争を初めけるフランシスコは時こそ來れと大に喜び軍の中に從ひて戰地に出て行さける道すがら唯管功名の事のみ思案し居たるに或日獨り歩み急ぎける途の前面に當り隠々として雲の如きもの立塞り忽ち一道の光閃めくよと見る間に鮮に御主キリスト立ちたまへりフランシスコはあなやとばかり驚き忙て躊躇ふ折しも御主は聲をかけたまひ爾は誰に仕へむと思ふや主人に仕へむとか臣下に仕へんとてかと其仰いと嚴なりフランシスコ懼るゝ主人に仕へんとするなりと答へける御主再びよしさら

ば主人に仕へよ、主人に仕へんと思はば爾が前に心に約せし事を忘るゝ勿れ、今此惨ましき戦に出て徒に人を殺して人に仕ふるかと仰せられければ、フランシスコ忽ち我前に心に誓ひし事を思ひ出し、滿身慚愧の汗に浸され、神の照臨により、今行んとせし事の益なきとを悟り、急ぎ身を回してアシシヨの家に戻り、親類朋友等を悉く集め、盛筵を開き、一同に對ひて申しけるは、吾身是迄世の中の浮きたる事業にのみ心を傾けたるが、今日限り今迄の總ての事を止めて、他の一の道に心を盡さむと思ふなり、依りて茲に我行く道の門出につき、離別の會を開くなりとありければ、人々大に驚き怪み、是は必ず狂氣せしにやあらむといひあへりしが、フランシスコは少しも頓着する氣色なく、やがて會を終りて、早々衣を脱ぎ更へ家を出て、只ある靜なる地に行き、吾身を打ち凝し、伏して神に祈り、是より一身を捧げて何事にも神に對するの務を爲すべしと申しける、其時御主顯はれたまひ、爾が爲すべき事多くありと雖、第一爾は總て世の中の財寶

と名譽とを捨て、貧しく生活し、世の塵を離れて、靈魂を大切に、彼の世間の富貴利達の慾に溺るゝ者を戒め、其鑑となるべし、さすれば人々爾の力によりて行を改め、心を正すべし、と仰せられければ、フランシスコは大に喜びて、家に歸り、忽ち美麗なる衣服家具を貧者に施して、貧しき身となりて生活たり、其父素より吝嗇なれば、これを見て大に怒り、汝は何を爲すぞ、貴き財を漫に散じて家の衰亡を招くか、我は乞食を養はんとして、財産をば作りはせじ、汝等子供の爲に安樂と名譽の爲に心を盡せるなり、それを何ぞや、恣に捨て乞食の助を爲すか、聖人答へけるは、そは父の言葉なれど、吾身は決して世の富貴利達を願はず、靈魂の貴重を思ふなり、されば世の一切の事を吾は捨てたり、今より吾をば死したるものと思ひたまふべし、其言少しも戲ならざりければ、父は大に驚き、是は狂氣したるなりとて、終に一室に押しこめたり。

聖人は親しく遊び樂みたる朋友等は、少しも聖人の心を知らず、此軀を見

て全く狂氣なりと信じ氣の毒なり笑止なりと言ひあへりけり、聖人は少しも關らざる様子なく素より發狂したるならねば、亂暴狼藉などあるべきならずいと靜に溫和なるを見て親も竟に幽囚を解き自由に任せたり。かりしかば聖人は身には破れたる衣を着、頭髮髯鬚々として亂れたらんと美なき異形の風姿にて街を歩きければ、人々見て嘲り笑ひ、小兒多く群れ集ひ彼こそ馬鹿よ狂人よとて、騷り賤しみけるを聖人は心に過去の驕奢の償却として大に喜び、故と人々に我をば嘲弄せけるかくて片田舎に或一の小さき堂ありしを求めて其處に住居を定め晝夜神に祈を捧げ此國の人民を救ひ其心を改め其行を正さんとを願ひける食物の如もとよりいと味なきものを食ひ、乞食と同どく人々の餘餘を乞ひ受け其間には病院に行き乞ふて病人の看護の力を盡しぬ、斯る貧しく賤しき生活なせる聖人の身の上は貧の限と思はるゝを御主は再び顯はれたまひて今一層貧しき生活せよと命ぜられければ、聖人畏みて、やがて乞食に逢ひ

て、そが衣服を交換へそを着、跣足となり、此度は人の門に立ちて食を乞はず、唯人々の打ち捨てたる殘物を拾ひ、常人には咽を通るまじきものを食ひて其日を送りつゝ、さて村々町々を巡り歩き、現世のいとも頼みなく淺ましき事のみなるを説後世のいとも忽諸ならぬ大切なるを教へ、遊惰安樂は救助の妨害なり、總ての人々過を改めて善に移るべしといとも嚴に説き勧めたり、最初の程は人々嘲りて、乞食の賤語なり、狂人の贅言なりとて、顧みるものなく、剩へ石を投げ泥を抛うちて之を罵り追ひ出しなどしけり、聖人は少しも心に留めず怒ることなく、唯熱心に神の救護を願ひつゝ、いよと説教に餘念なかりけり、されば人々は漸く其狂人の所爲ならぬを知り、愚者の言ふことならぬを悟り、こは必ず世の豫言者改革者の類なるべしと思ひ、其教へ説く所を聞き、次第に威服し、よりにて心を改め、行を正すもの其數を知らず、かくて輕薄の世の狀態は漸く舊の如く信仰の心を復し、富めるものは貧しきを憐み、恵み、健なるものは病めるものを助け

救ひはたまた貧しきものは惜けたる心を取りなをし業を勵み事を勉めしかのみならず學者紳士の如き心あるものは聖人を招きて其教を聴聞し弟子となりて修行せんとを願ふに至りぬ聖人は一旦軍人の社會を脱け世の羈絆を避けて千辛萬苦の修行勉勵の其功空しからず終に倒れんとせる大木を起し潰れんとせる堤を繕ふたるが如く世の狀態を善に導きたるなれば自ら快く覺えてますく力を盡し心を配るものから弟子たらむことを願ふものあるに於ては定まる家のなくてはならず是に於て一ツの會を建てんと思ひしが仰天主教にては漫に會堂を建つるを許さず自己一存のまゝならねばやがて此事を時の法皇に請ひけるが法皇は其事を尋常の事と同じく思ひて許さぬのみならず却つてかゝる集會は教に害ありとて禁ぜんとしたりけるが其夜神は法皇に顯はれ聖人フランシスコの請は神の聖意に協ひたる世の救助の爲なりとありて法皇は神託を悟り明る日聖人を招き公けに其願をぞ許しける。

聖人の設けたる會いよと盛になり弟子多くなり許多の信者心を改め惡習を捨てたり或時また意太利に於て私欲の争より一戦起らむとしけるを聖人はいと忌はしき事に思ひ王の許に行き其の道理に違ひ正義に戻りて害ある所爲なるを深く諫め説きて竟に戦を止めさせたり又或山に賊多く籠り居て折々里に下り財を掠め人を害ひ良民を困めし事ありしが聖人は自ら獨山深く分け入り彼の山賊の棲家に至り道を説き理を教へ懇々として倦まざりければさすが無頼の賊ども其信なる説教に感じ悟り忽ち叩頭罪を謝し皆其行を改めける斯の如く大となく小となく聖人は世の爲國の爲に害を除き善を勧め加之種々の奇蹟を現して死者を蘇し病者を愈しめたるなど擧げて數へ難し聖人の功績あさく高き意大利全國はいふに及ばず諸國までも此事評廣く感ぜぬ者なく聖人は衆多の人々に敬ひ尊まれければ聖人は自己の功績の大きくして身の程の高くなりけるより自ら知らずく傲慢の心出て來らむことを恐れ

たり。御主は時々聖人を戒めて其心を禁じたり。されば聖人は慢心を克制し、
 しが此時より聖ポーロの言辭の如く其慢心を禁める爲に惡魔の誘惑を
 感ずといひて祈禱を爲す時も説教を爲す時も兎角は邪淫或は欲望の念
 起り易く苦しき事なり。此は慢心少しなりとも起るときは神は直に其人
 の弱きを示さむ爲に種々の誘惑を興ふなり。聖人も驕ばかりも我身に傲
 慢の心あるならねど自ら其地位高くなりけるより誘惑いとも烈しかり。
 彼の娼妓の如きもの惡魔に導かれ恐ろしき罪を聖人に勧めたり。聖人は
 素より獨身なるが其室の中央に爐を設け火熾に燃えつゝあるを見て其
 誘惑に負けむことを恐れ我と我身を抑へ罪を犯さば此火に入りて地獄
 に行かむとぞ念じける。斯の如き誘惑は常に絶えざりければ益謙遜を重
 ね祈禱により常に戒を保ちけり。名高き聖ポーロすらも常に此誘惑を取
 らむとを神に祈りしが終身これによりて苦みけるこそ恐るべけれ。
 聖人は斯して益々弟子多く集りたるが、竟に世の家業に従ひ妻あるもの

までも會に入らむことを願ふに至りぬ。とは定規の外なればとて聖人は
 斯る人々の爲に別に一の會を設け之を世間のフランシスコ會とぞ名け
 ける。其規則はさして嚴しきものならず時々禁食して肉身を攻る等なり。
 十六世紀の頃此會の人日本に渡り此會を設けて教を布き多くの入會者
 ありけるが今に至るまで存するなり。
 聖人は亦婦人の爲に會を設け舊の如く貧しき生活を爲したり。婦女は他
 に出でゝ勸化の如き行を爲したり。彼の有名なるクラ、聖女もアシジヨ
 の人にして此婦人の會に入り會頭となれり。さて聖人は元來唯一の常人
 にして教師にあらず。されば心に不圖決する所ありて聖父にならむと思
 ひ或日祭壇の前に伏し膝りて聖父とならんとを願ひしに不思議にも祭
 壇の聖櫃の上に白雲の如きもの懸きて天使現れ手に一個の玉の如き杯
 を持ちいと神々しき聲にて汝此杯の如く汝の心清からば聖父となれと
 告られければ聖人滿身汗に浸されて慚ぢ畏み其事は辭みいよと謙遜を

加へたり。聖人は神の戒を蒙りたれど、そが代として有り難き恵を受けたり。そは或時十字架に於ての御主の五傷を見て感念する折に、聖人は常に無き苦痛を感じけるが、其時十字架は日の如く耀き、聖人の手足は電氣に打たれし如く苦痛を覺え、現に聖人の身に五個の傷出て来て、修身愈えざりし是ぞ九月十七日の事にて、今に至る迄其記憶の爲に教會に於て祝日を立つるなり。

かくして聖人は規則の嚴しく、行の酷なりし爲に肉身大に衰へ頓て死ねべく見えければ、弟子等を招き集め、常に貧しく生活し、及び此會の金銭財寶を得る目的ならぬとを能く人々に説きて、教に導くとを深く遺言しけり。今に至り此會諸地に在りと雖、更に一物の所有といふものなし。聖人死する時四十五歳なり、實に此聖人は人の欲を制し奢侈を改め、不善をして善に移らしめ、曲れるを直くし、まことに荒れたる教の園に再び花を開かせ、眞正の信仰心を人々に起させて、世の難を救ひしものといふべし。

降世後一千五百十五年と云ふに、エスパニヤ國に生る父は某とて華族なりき。聖女幼きより學の道にかしこく一を聞きて萬を知るとかや云ふなる古への賢人にも劣らぬやと覺へて、六七歳の頃よりはや大方の書籍はたやすげなり。わけて好み喜びて讀み誦せられしは遠き昔の聖人達のかしこき行をかひつけたる聖人傳とかや呼びなしつる書籍なり。此書籍の内にも亦こよなく感じ服しつゝ悦ばれけるは、御神の爲に聖き致命せられし人々の傳なりき。されば幼き心にも致命なすを此上なき聖きものと心に刻みて、いつかは我も致命の譽を受けばやと片時も忘るゝひまなかりしに、其頃アフリカ國に於ては教の爲に致命する者多しと聞へしかば、さらぬだにこれを悦びける。聖女は切に往かんとを望みけれ共公けに

父母に乞ひ申せしとていなみ給ひてゆるさるべくもあらねば兎やせん
 角やと小さ胸をいためけるが或日終に意を決して五歳になりける弟に
 も致命の辱きを懇に説きすゝめて是と共に野越へ山越へ未はるかなる
 アフリカ國とも知らずして旅装もとのへず路銀も持たず行かんとす
 るぞ雄々しけれざる程にテレシヤは家をはなると僅に一里にも足ら
 ざる頃叔父なる人に出遇ひたり叔父なる人はテレシヤと弟の要なきに
 家をはなれてこゝらを歩むをいたく怪みそなた達は何用ありてこゝら
 には來りつる野あそびにやさらば下女をばともなふべきに唯二人とは
 いぶかしやと問ひけるに姉なるテレシヤはしはし答へをためらひける
 に弟は何の思慮もなく姉上の誘ひ給ふまゝ今より二人してアフリカへ
 と行路なり叔父はいたく打驚きアフリカに行きて何をかし給ふ聖女や
 がて口を開きぬ致命せん爲た叔父よ我等は致命せん爲にアフリカに參
 るなり叔父は顔に笑をたゞへてそなた達は致命せんためアフリカにゆ

かんとするか甚よしさりながら路銀をば特給ふか否さらばアフリカは
 いづこにあたるや知りはべらず路にて聞きつゝゆかは知れんとて叔父
 は益笑ひぬ我あとにつきてこゝ家に販らん販りておんみの父上と謀り
 見ん父母につゝみて家出せんは悪きとなり致命するると罪は消えじと
 すかせしかば心雄々しとてアフリカの遙なる所たると家出の罪は神ゆ
 るさじとの叔父の辭に漸く悟りさらば叔父よ販らん販りて父母の赦し
 受けん。

かくて叔父なる人は二人の兒を携へつゝ歸り來りありしととも兩親に
 つげしかば父母いたく打驚き懇に其過を説き諭し致命なすは悪きにあ
 らずされ共汝等未だ幼き身なれば今致命せしとて神は悦び給ふものに
 あらず成人の後致命せん志あらば我等も悦びてゆるすべしとありし
 かば聖女素より賢き性なれば忽ちにして其理を悟り父母の意に従ひけ
 る。

聖女の家は華族のどとて其庭園もいと廣くて、四期折々の眺を目前に見
 んとも自由なりけるが、其庭の隅なる遠く離れつる所にさゝやかなる四
 阿屋めきたるものありては、虫聞月見などのしろにもやあてつるなる
 べし。常は要なしとて戸堅う閉じて蜘蛛の住居となるめり、聖女は之をよ
 きものぞと喜び下婢をして掃除せしめ、拭はしめて是を日々の神に仕へ
 まつる場所と定め、或は祈禱し或は感念に心身を清め、恰も小さき女行者
 とは見へける。父母は此跡を見て、かく歳尙稚くて行者めきたると成人の
 後は定めて一かどの聖人にもやなるべからん。そがなす儘に任すこそよ
 かんめれとて自由にぞなし居さける。
 春の花幾度か散り、秋の紅葉幾度か染あて、テレンジャ聖女十二歳とはなり
 ぬ。神に捧ぐる心は熱心なるも行者となつて世を捨てん。の志定まらず、若
 き娘のとなれば、美しき衣服も着まほしく、物見遊山もせまほしく、我才學
 を人に誇りて人々の感ぜむるを聞んも興なんめり。など世の中に出て

んの念漸く湧き出ぬ。然るに其母親病て没せしかば、テレンジャの慨き
 大方ならず、彼小家に走り行てかねて設けある聖母の像の前にひれ伏し、
 瀑布なす涙を注ぎて祈禱しけるは、妾は今最愛なる慈母を亡ひぬ。海の如
 き愛を妾に注ぎたる母は煙りの如く雲の如く消えぬ。今は妾は此世に於
 て望むべき希ふべきと一もあるなし。願はくは此後君と母を見奉まつら
 んに、吾身を守り給はれ、吾行を貴くなさんために、道徳を教へ玉はれ。かく
 て聖女の行を改め、美服を廢し、美食を遠け、益行者のごとくなりぬ。聖女の
 父は妻死去の後男の手にて子供を養はんは甚だ困難のとなればとて、聖
 女をば或一の童貞學校に入學せしめぬ。さらぬだに惻愍なる生れなれば、
 其進歩も著しく、二年が間の勤學に一度も他し人に後れを取らず。益を集
 め雪を積みたるとかや支那聖賢の人々もかくやと思ひ合はされたりし
 かるに何時なりや起りけん。悪き病の身に發していたく難儀に墮りて醫
 師も田舎に往きて保養せてはとありしかば、幸ひ其姉なるが或片田舎に

住むせしかば是に移りて暫し養生するに定りぬかくて日を撰みて引
 移りけり。
 此田舎に全じ親戚にて一の老人あり行者といふにはあらねど世に遠り
 人に離れて恰も聖人の如く行ひすまし月雪花を朋としけるがたま
 訪ひ来る者あれば懇に教への道を説き示し憂へ苦む者ありときけばゆ
 きて是を慰などしければ喜びて訪ひ来つ勇みて歸る者いと多かりきテ
 レシヤも折々此老人を訪ひ行其の説を聞きて喜びぬ或時此世間に居る
 は唯危く唯苦しく決して樂にして快きものにはあらずと云ひけるを聖
 女はいたく感じ思ひ世間を離ればやと決心の隙を固め其頃盛大なる或
 會に入らんと思ひけるが輕しく入會すべきにあらずともふて種々に
 心を碎き推考に推考を重ね静に神に其御助力を祈りて後病の癒ゆるを
 まちてそが十八歳とにいふ入會の申込をぞなしける。
 此某會といひけるは其會則の嚴重なる類ひ希れなるばかりなれば聖女

の之に入ると聞きて知るも知らぬもあしなべて其耐忍を危みけるも理
 なれ聖女は今年二八の春迎へたるのみして花ならば綻び初むともいひ
 つべく月ならば雲間出づとも譬へつべし身は貴族の内に生れて近き二
 年ばかりが程は粗食にもならひけめそれとても至りて悪しき物にもあ
 らずまして奴婢の數もいと多く自ら用たさんと心掛くるもなぜ奴婢等
 の捨て居くべき金殿玉樓の内にもみたれこめて荒き風にもあてじとい
 ひけん日本などの貴き姫君達に比すとも大差あるべきさるを朝は夙
 く起き出て水くみ米炊きて自ら總ての雑用を足しあらゆる行者の難行
 をも又苦行をもいとふとなくなさざれば此會の規則に違へばなり。
 されども聖女は人々の思ふが如き娘にはあらず一度かくと決せし上は
 なじら後へは引べきやと心に刻みて進みつるとなれば僅に二ヶ月が程
 に嚴重なる會則もよく馴れて難くも覺へずしかのみならず他人の模範
 となすべき行も又多かりける一日彼老人の許より黙想の本を贈り越し

且手紙を添へたり其内に黙想は心の養にして黙想の力にて何にても如何なるとにても成就するは其行なりとありけり此會は前にも云ひつる如く至つて嚴き規則あれ共唯一の惡き風ありそを如何といふに、これは常人の自由に出入して空しき雜談をなすをとがめざるとなり。テレシャ聖女は入會の後此とを知りていたく其非なるを嘆きけれ共我身は未だ是を止むるの權を有せず唯竊かに此事の廢されんとを願へり聖女は何故に斯世人の來りて談話するを厭ふやといふに行者として神に仕ふる身は朝早く起き出で感念するも又祈禱なすも世間の人と種々の雜談などなす時は心の力自ら衰へ弱りて神の御心にたがふと多し行者となつて神に捧ぐる身は世に離れ遠かりて縁といふもの切り断たづばなど眞正の行者たるの本分を盡くして以て神の思召に叶ふべしやはといふにありかくて後テレシャ聖女は行ひ甚だ嘉すべかりしかば僅の間に諸人に推薦せられて此會の院長となりしかば兼ての持論として忽ち彼俗人の

出入を禁じ雜談を禁ぜしかば始めの程こそ習慣を捨るに困みたれ漸く四月とたち六月となるまゝ諸會員も此規則の佳きことを悟り益盛大に趣きけり聖女亦一の制を作れりそは諸の教會の博士達の著したる教へに付きての書籍をば専ら調査せしめたりき之諸會員の徒然を慰するためなるべし。

聖女は其頃御堂にて黙想感念の折必らずいふべからざる妙味を感じ心身自ら喜悅にみたさるゝ心地せしかば其喜大方ならず之ぞ必らず神の我身に恵みを垂れ給ふなるべしとて此とをもて或日教師に語りけるに、教師はきどはてゝ大に驚きそは神の御恵にはあらず惡魔のなせるとなりまゝかくのごときとを以て身を過つ者多きものなり惡魔は如何なればかゝるとをなすかといふに彼は其妙味を與へて其人の之に誇りても傲慢の罪に落さんと謀るなり夢其謀計に墜ち給ふべからず恐るべし恐るべしと訓へ示したりしかば聖女はいたく打驚き其後は喜びを捨て願

ず一重に悪魔の去らんとを願ふたりしに、幾何もなく喜悅の心は散じたれ共、此度は其反對にて朝夕の祈禱より萬事の事に至る迄之をなすをいたく厭はしく覺え、如何に黙想して神をねらんと欲するも唯忙然と感覺なきものゝ如く左思右考して其何たるを悟らんとするも悟り得ず心常に惘々として樂しからず、聖女は此に至りて神の我身を捨て給ひけんとていたく力を落しつ再びこを以て彼教師に問ひけるに、教師は之を聞きはてこそは甚よきとなり眞實に神を愛する者は一人として常に苦を感ぜざるものなしざるを取りひがめて神の我を捨て玉ふと思ふは大なる過失なりといひしかば、聖女も其訓へに従ひ熱心に撓まず總てのを行ひける。され共其心に慰むべきものあらざるは數年の間なりき。

或日聖女は獨り机に向ふて物や本など打かへしてありけるがふと十字架を願みて心の中に嗚呼御主は尊き御身に於て御坐しながら辱くも我々人民を救ひ給はん思召にて、御手足脇腹にかゝる御創を受け給ひつる有

がたさよと思ひ來りて急ち非常なる愛熱の情湧き出て、是迄多年の間、懺悔たりし心は跡なく去りて大に慰むるを得てけり。其後祈禱或は黙想の折なんども以前の如くに苦しからず、此に始めて以前の苦痛は眞實の道なるを悟りける。

因にいふ、後世テレシヤ聖女の肖像には、必らず此段の物語に依り、聖女十字架に向つて立つ所に、火光燦々たる内より一箭聖女の胸をのぞんで飛び來る様を描出するを例とせり。

是よりテレシヤは祈禱に向ふ毎必らず三尺ばかりの空中に在つて止り居ると數時間の久きに堪へ、其折の様は恰も天使のあま下りたるが如く、其光四方を射て月に似たり。又其熱心なる祈禱を捧ぐる折などは、耳は聳ひたるがごとく、眼はとじたるがごとく、神を愛する愛火のために殆んど感覺なき者の如くなり。是等の様は會員達の常に親く實見する所なりしとぞ。又聖女は其肉身を賣さいなむと一方ならず種々の方法を盡し、手を

幾へ品をかへつこころすとに勤めたり世の人は是等のとを聞かば甚だ無益にして社會の益を増さんとは思ひも依らずといふべけれどさにあらず其身を賣めて粗衣粗食跣足に甘んづるは自ら靈魂の爲のみならず己の身を犠牲として社會の人に盡さんとの志なり。

此時に當つて獨逸國にルーテルといへるもの愚夫愚婦を欺きて其異端教を擴めんとす聞えあり聖堂を破り教師を殺し其亂暴の猖獗なると當るべきなし聖女は此事を慨き獨逸に至つてルーテルに眞正の道理を説きさとさんと思はれしかど如何せん女子の身なれば得はたさゞりけるされ共異教者の爲に熱心なる祈を捧ぐるとは片時も怠るとなかりけるされ或有名なる歴史家某此事を記して異端者ルーテルの亂はテレシヤの善行に依りて早く既に鎮定せりと云ふも可なりと又同時代に於て聖人フランシスコ我日本に來つて僅々二年間に數多の信者を得つると勿論フランシスコ聖人の効力大なるに依ると雖も亦此聖女テレシヤ

の祈禱の廣大なるに依るとかやかくの如く恰も小兒の其親に向ふて願ふとの忽ちにして赦さるゝが如く聖女の祈りを神の受け收め給ふと聖女の信徳の無邊なるに依るなるべし。

誰人も謙遜なるを他人に「我は謙遜なり」とて誇らざるまでも自らの心中には謙遜なり我は謙遜なりと思はざる者はあらしざるを聖女は常に其謙遜なると言葉にも筆にもつくされざるばかりながら口より以外に出さざるのみならず心中にも自らの謙遜なるを知らざりしなり其一例として聖女が此會を改革せし折の總ての書籍は自之を編輯せしなれ共其書中「自己」といへる文字は一字の存せるものあらざりし事之なり其平常教師を敬ふと大方ならず如何なるにても規則にかこつけなどして出來ずとて斷りしと決してなく其命令は神の命の如くに守りけるされば其病を得て餘命旦夕にせまりける折も自若として恐るゝ色なく恰も四人の獄を出づるが如く喜悅の情面に溢れて其肉身は輝き渡り手を

天に上げ眼して何をか視るが如く静かに此世を逝られたりき。歳六十七。逝去の後暫くして聖女の口の内より一羽の白鳩翼を振ふて出づると見る間の瞬間虚空遙に舞ひ昇りぬ之聖女の魂は直ちに天に至るを示し給ふ神計なり。

此テレシヤの會は當今至る所の國々に設けられつゝあるものなれ共我日本國には未だ此設げあらざるは慨くべきなりされども後來女子にして父母兄弟さては親戚故舊或は國の爲に我身を神に捧ぐる者出ては早晩かゝる會の設立さるゝを見るなるべし世の人國の爲め君のため命を捨る軍人を賞するとをば知るも國の爲身を捧ぐるテレシヤの如き人をば賞するとを知らる者少かるべし然れども神の御前に審判を開かるゝの日は始めて其何れか輕孰れか重何れか卑孰れか尊火を見るが如く鏡にうつるが如く歴然たるべきなり。

附言此傳記は管に信者の鑑となるべきのみならず行者童貞の好模範

として亦少年少女の好鑑として將來を補益すると鮮少なからざるべし。

聖ルカ 福音史

十月十八日

聖ルカの兩親は元猶太人なりしが生業のためシリヤに移り有名なるアンテオキヤといへる邑に住みけるが聖人は此の邑にて誕生れ給ひ幼少より文讀むことを好み經典はいふもさらに天文醫學文學をおさめマシヤ語に精通く又かねて繪畫に妙を得て今も羅馬にありといふ聖母マリアの尊影はルカ聖人の筆なりと世に言ひ傳へける聖人先に古國なる猶太國に往きイエルサレムにて或有名き學者に従ひて學問せしが其頃ハ御主キリストは猶太の邑々に眞の道を傳へておはせし時なれば聖人も其教を聞き豫て學びし舊約の其預言者等が其文に記せし事に能く適ひこれぞ眞の救世主にてましますさんと深く眞心に感じ其御弟子とはな

られけり其頃同じ道に入りし聖バルナバ使徒も「エルサレム」に遊學しておはせしとぞ御主復活の後「アンマウス」に往く二人の使徒に顯れえはし談話なされしが言傳へに其一人の使徒は此のルカ聖人なりけるとかや。

聖人は御主御上天の後聖き道を人々に教へんものと「アンテオキヤ」の邑に歸りしが聖人醫術に精通きため教をつたへるの良き便りとなり多くの人々の家に往き來りて肉身の病痾と共に多くの人々の靈魂の病を癒しキリストの道に導きけり或時この邑に聖「ホーロ」來られければ聖人は「ホーロ」聖人を師と仰ぎ尙も教の旨を深く研究共に傳教に心力を盡しければ多くの信者も殖へ教會は益々盛大に越えたり。

茲に或る信者は福音書を著さんと使徒等より教へられたるキリストの言行を書き集たる其熱心は賞すべきも人々に一層感ぜしめんためなるか只使徒より聞し事のみならずて自己の臆脱をさしはさみ多くの誤謬を

記しければ神は聖人をしてこれを正さしめんとこれが心を照しければ聖人こゝに決心し御降生の後五十三神の黙示と聖母「マリア」の御救示と又聖「ホーロ」の教とによりて一の正しき福音書を著しけりこれぞ四福音の一なるルカ傳なりされば他の福音書と異なりて「ヨハネ」の誕生より順を逐ふて書きしるし聖母の外は誰人も知ること難き天使の御告より基督御降誕の現況までいと詳しく記され「マテオ」「マルコ」の二福音の其遺闕を補はれ少しの不詳ことなきまでに記されしこそ尊とけり聖「マテオ」の福音は元猶太人の爲めに記したるものにして其國語（「ヘブライ」）及其國の風俗習慣等を記しあれば外國人の爲めに解し難く「マルコ」傳は簡略に過ぎて又外國人の爲めに解し易からざりしが聖人の著したる福音書ありて初めて其足らざるを補ひたり後「ホーロ」と共に「羅馬」の都に道を傳へしが「ホーロ」聖人の囚となりしより聖人其師に離るるに忍びずして其近き邊にかすかなる家をもとめ日々行ては其師を慰め懇に事へ其教に

よりて使徒行傳を著しけりされば其書中には他の使徒より聖ポロの事を多く詳しく記せるもみなこれがためなりし此時御降生后六十三年なりしとぞポロ致命してよりローマを去りてエファソトに行き又ギリシヤに移り至る所に熱心に教を傳へしが遂に邦教者より惡まれ其者のため首くぐられて致命せらる時に聖人の御年は八十四歳なりしとぞ其餘の事跡は傳らずして知るによしなし。

聖シモンと聖ユダ 使徒 十月廿八日

この聖人は同日同所にて致命せられたれば其傳を記すにこれを一にするは教會の例となれりさればこの例にならひて二聖の傳を茲に記さん或時御主はカナの町にて婚禮の席に招かれ其時客人多くして酒宴なればに酒つきければ其主人の爲に奇蹟を行ひ六の石壺の水を其き葡萄酒に變化せしめ給しは能く人々の知るところなるが此家の主人當時の新

郎は此シモン聖人なりけるとぞ聖人かねて御主の名聲はきと居りしが今此奇蹟を目前を見て大に驚き且つ喜びてキリストこそかねて仰望し神の子救世主にておはさんと深く信仰の念を起し浮世の財實最愛の妻を離れて御主に従ひ其使徒となられしはいとも殊勝の事なりき其熱信の盛なる遂には多くの人々に彼は熱信なる者とあだなせらるゝ程なりしと

又ユダ聖人はキリストの兄弟と聖書に記せられし人にして異教者等は此の兄弟の文字に誤りを傳へキリストには同母の兄弟四人ありて皆聖母マリヤの生めるものと云へりこれ猶太の風習と其國語とを知らざるよりの誤りにて猶太人は兄弟と從兄弟との區別なく近き親類の者をばこれを兄弟といひならはせりこの四人の兄弟のことを詳しく記すときはユダと小ヤコボとシメオンヨセフの四人にしてユダとヤコボの父はアルフエオシメオンヨセフの父はクレオンハ(キリストの義父)にして母

はマリヤ(聖母マリヤの)なりマリヤ始めアルフェの妻となり二人の子を産み夫死して後クレオファの妻となりて又二人の子を産みしものなればこの四人はキリストの兄弟にはあらずして従兄弟といふべきものなり
 マテオ傳にはユダをダテオといへりユダは氏にしてダテオは其名なり
 御主御上天の後使徒等は世界の國々に眞の教を擴めんとて派出く前相集りて信經を作りしが其時使徒一人にて信すべきこと一づゝを集め一の信經となししが聖シモンは罪の御赦ユダ聖人は肉身の復活と宣ひしぞと

これよりさき御主聖躰を定められたる時(御死去)如何なればかく盛なる榮華を僅の使徒にのみ顯され世界の多くの人々に顯さずやとわやしみしと使徒等いまだ救世主を信するに只今世に於て新しき王國を建て政事をなすものならんと思ひければユダ聖人もかく言れたるなり御主御上天の後は救世主の事も明に悟り只今世に於て人々を支配するものな

らて後の世までも人々の靈魂を救ひ之を支配するものと知りしとぞ
 聖シモンは他の使徒に別れてより亞弗利加歐羅巴に住き多時英國にとりまりて教を傳へ聖ユダはアラビヤペルシヤに往き共に熱信に傳教せしが程經てシモンは英國より來り力を協せ教を傳へたり當時ペルシヤ國と印度との間に戰爭起りヘルシヤ國王は夥多の軍兵引率て印度を親征なさんものと先づ軍の吉凶勝敗を土地に祭祀れる偶像に向ひ其告げを祈らんと彼の偶像の祭司に命じ多くの捧物をなし祈禱せしが靈驗なし彼の祭司等は能き折りなれば己が私慾をみたさんとて國王に向ひて云けるは神に捧げし供物のいと少して神の心に適はざるため靈驗なきならんと國王尙も種々の物を捧げて祈りしが忽ち一像云けるは此のたび此國耶蘇の弟子二人入り居れば如何に捧物をなし如何に祈るとも最早やものいふこと能はずと國王驚きて人を各所に使して聖人等を探せしに幸に聖人等に逢ふて其事の始め終りを告げれば聖人これを聞き

たまひ國王と共に其所に至り偶像に命じて軍の勝敗を言しめしが彼の云ひけるは此度の戦は敵も味方も戦死多し尙數年亂れて治まらざるべしと國王はじめ人々は大に驚き如何せん大に苦慮せしが聖人笑てこれ惡魔の人を惑す言にして懼るゝに足らず眞の神は一にして天地萬物を主宰し能はざる事なけれ今回の戦も若し熱信に眞の神を祈り其聖助を願ひなば明日午前八時に敵は必ず降服なすべしと國王其言に感じ神に祈りしが聖人の詞の如く果して翌日八時頃印度より人を遣し和議を求めければ國王大に驚き神の恩寵の厚きに感じ二聖を召して尙詳しく教の旨を聞き聖人等に重酬い邪僧を斬らんとせしが聖人は力めて贈物を辭し邪徒の爲めに救を求めたり國王聖人等の奇行正言に服し己れ先づ信者となり上は百官より下人民に至るまで相率ひて信者となりたり茲に彼の惡人等は聖人等の爲めに生命を救れたることを恩とせず却て聖人等の爲めに是まで多くの人々をあざむき數多の金銀を得ていと豊

に生活しも今は其日の煙もたてかねて憐れ果敢くなりしとて眞の神の罰とはしらて聖人をうらみ淺間敷も聖人を殺さんと計りこれを讒言して彼等二人の者は國の神を輕蔑じ國王をあざむきければ國神大は怒り給ひ今に此國を滅亡し給はん早く彼等を追ひ歸へし國神を拜禮其怒りをとくべしと人々を惑さんとせしが聖人等は少しも恐れず尙益々熱信に傳教怠りなかりしかば多くの人々改心して教會は愈々盛大となり惡僧輩の讒言も更に驗なかりき二聖は最早此の都の人々も皆神の道に入り信者となりしかば此處には別に人を遣さず都はなれし或る都に行きしが此處は未だ野蠻の風俗にて拜するものは月日のみ外に神ありとも思はざりしものなれば聖人等はいと解り易き形容を以て彼等に神を拜せんと日月の性質を談しこれを神の我等の爲めに作り給し道具にして拜禮なすべきものならず眞に拜禮なすべきは天地の間に只一つ眞の神の在すのみ若しこれを拜せずして其作られたる者を拜するは他人の家を

訪問て主人ををきて其家の道具に向ひ相さつなすと同じことなれば道理に合はぬことなりといと懇に説き給しが先きの悪僧今の都に住居かねてこの僻地にかくれ住居しかば以前に増して聖人を仇とし恨み土人を惑はし云けるは都より茲に來りし耶蘇教の使徒といふは先きに都にて君を欺き多くの人を惑し神を慢り寺を毀ちたるものなりと風説せしめ己れが身に禍の及ばぬさきに速かに滅さんと圖りしかば聖人の説に感ぜしものも又彼に感せられ終に悪僧に左袒して多くの人々集りて聖人を擒へ打擲耻辱を與へつと強て邪神の廟に引き連れてこれを拜せしめんとせし時に二聖は天主に默禱し茲に威光を顯して其罪業を替められんことを願ひしが忽ち天地振動して邪像は毀けて灰となり像の内よりいと醜き黒色の悪魔顯れ狂ひ叫びて逃げ去りしかば人々大に懼れつと尙も愈々恨を加へ遂に鋸を以て聖シモンを斬り斧を以て聖ユダを斬りさいなみしは無慘といふも恐なり此日一天雲なく空晴れ渡りしが

二聖の致命するや天氣忽ち變り虚空俄かに黒雲起り雨は篠突く如く風さへ吹きあれて雷天に轟きいと物凄きありさまにて値の間に魔廟邪神の廟は倒れ像は毀け悪人輩の家も倒れけるが國王これを聽き給ひかゝる聖人を苦死せしため神の震怒せ給ふてかく天變のありしならんいて悪僧共を罰せんと人を遣し悪僧輩を殺し聖人の聖骸をばパピロンに葬り茲に美麗なる聖殿を建てて人々熱信に聖人を恭敬せしとぞ
 新約聖書の内に猶太書といへるはこの聖人の手簡にして當時或者は異端を稱へ美行又は教會律は救靈の爲め必要にあらざ唯信徳あれば足れりといへり聖人これを駁せし者にして若し信徳あるもこの信徳に實を結ばざれば全く無益にして枯死の信徳となるといふ一點にありし。

聖カロロ 司教

十一月四日

彼のプロテスタント教人常に謂へるや凡そ三百年以前キリスト教は大に腐敗せるを以て神は之を改革するが爲に一人の改革者ルーテルを生じて教會の衰亡を救ひたりと今は此事に就きて彼此事を論ぜず唯獨乙國の歴史を見るときは彼のルーテルは如何ほど害を興へしかば判然たるべし故に茲にルーテルと同時代の人にして則ち公教なる聖人の傳を記してルーテルと比較し讀むもの、判断を請ふなり。

其聖人は即ちカロロなり、聖人は今を距る三百六十年以前意大利に生れ有名なる貴族の家の子なり親は熱心なる信者にて其子の教育には殊に心を用ひ善き習慣をつけ道徳の事を談し聽かせ且愛心深き人なれば貧人を憐み食を興へ金を施すをもて樂とも務ともなしけり其施與を爲すときは必ず小兒等を伴れて之を見せしめ語りて言ひけるは貧しきものも富めるものも共に人なり貴きものも賤しきものも同じく神の興へたまひし靈を保つなりされば皆兄弟同胞に同じければ之を憐み救ふべし

とされれば此父にして此子あり聖人は五歳の幼き心にもはや神の御心を會得し其行狀まことに聖人に異らず我身は靈父になりたしといひけり

そは靈父は神に事ふるの職務にして依りて他人をも愛することといひよ深かるべければなりと父は素軍人になさんものと思ひしが此様を見て大に喜びさらば靈父となすべければ必ず聖人となるべしとて一層教育に力を用ひ良師を撰びて學問を勵ましければ十七八歳の頃には學力ことさら俊拔にして大學校に入りけり聖人は品行方正誰とて尊敬せぬものはなかりしが生徒の中にいと不品行なるものあり聖人の正直に嚴格なるをばいと目の上なる疵としも思ひ何如にもして聖人の心を墮落させ我味方なる邪淫に陥らしめむことを謀り終に一人の婦の淫惡なるを語らひ聖人の室に遣はし毒言をもて様々に誘はせける聖人の心は鐵石より堅く山岳よりも靜なれば更に動かすべくもあらず却て此婦に向ひ熱心をもて其邪惡の身に禍害なるを説き神の冥罰地獄の苛貴の

恐るべきとを語りいと和かにいと篤に諒々として諭しければ、悪を勧め
むとして来りし、毒婦は却て聖人の教を聞き其正しき言の葉の鴈に浸み
て大に今までの非行を悔ひ悟り、終に涙を流して有りし事ども詳しく語
り只管謝びて其心を改めける。聖人はいたく喜び計らざる事にて一人を
救ひたりとて神に謝しけり。かくて大學校を卒業し倍熱心に神の事に従
ひて他事を捨て朝夕教の道に心を盡し貴族の身にしあれど少しも奢る
となく、さながら貧しき人の如くに生活たり。されば其名漸く四方に聞え、
聖人なりと人々言ひあへりければ時の法皇はそを聞てて急ぎ召し寄せ
られ、猶ほ若年ながら最も高き位にぞ登りける。即ち其役は樞密員とて法
皇と共に教會の萬事を治理る位なり。されば其位置の高きによりて家も
無下に儉約しくはなしがたく衣服も美しからぬは着がたく交際のほど
も自ら華美ならねばならず、これをもて聖人は深く心に苦みけり。
茲にルイテルの事歴をば語るべし、ルイテルは其兩親他國より來り住

みしものにて元來其國人にあらずそは生國に於て殺人の事につきて
關らふ身となりて浪へ來しとなり家もとより貧くして其性も亦剛な
り、ルイテルの自ら言へるを見るに、其幼童なりしとき足にて蹴られ手
にて打たれしことは毎度なりしともて其父の酷かりしを知るべし、ル
イテルは成長の後學校に入りしが性質強情なるがゆゑに、明證と争ふ
こと常に打たれ傷けられしことは數度なりされば俗にいへる纏子
の情を生じ邪けたる習慣となりけり。後に大學に入りて勉學しもとよ
り天才敏きものなれば其進歩いと早かりし、師は行者にてルイテルを
愛し懇篤に教へけるゆゑに殊更勉學の功あらはれ大學優等のものと
なれり、其性質強かりしに似ず頗る臆病にして最も雷を恐れたり、或時
雷とよめき電光烈しかりしに、ルイテル畏れ戦き、一室に閉ぢ籠り只管
神に祈り此災害なく一命助からば必ず行者となり、道の爲に盡さむと
を誓ひたり、後に其約の如く朋友に分れ行者の會に入り熱心もて不犯

の戒を守り朝夕行者の務を行ひしが是ぞルーテルの身の不幸なる緒
 なりしそはルーテルの行者となりしは實に神を頼み奉る熱信によれ
 るにあらず一時の身の危きを恐れたる我性質の怯懦より盟を立てし
 より破りがたくて爲りしなれば眞に神の聖意を得しものに非ずされ
 ばルーテルが爲には行者とならず世間の務に従ひて道を歩みたらむ
 には博學智識の俊才となりて彼の異教を建つるにも至らざりしなら
 むルーテルは止を得ずして行者となりし事なれば熱心は漸く冷へ
 祈禱を怠り規則を破り行狀荒みて終に事に托けて行者の會を脱する
 に至れりさて行者の會を退きたれば忽ち前の盟約を忘れ不犯の戒を
 破りて彼女と親み之を妻となして同居し近き傍の侯家に行きて身を
 寄せたり此侯は品行良からぬものなりしが能くルーテルを遇ひ共に
 酒を飯み肉を食ひ宴を開きては教會を罵り男女の物語を爲し放言大
 語して我身の庇蔭になりし行者等をさへ惡さまに誹りあひ、竟に異教

を起すの基礎を定め茲に人々を説き勧めければ多くの品行良からぬ
 もの及平生教會の處置に不満を抱けるものなど悉く其弟子となり皆
 一同に教會は腐敗せしに依り之を改革するなりと公言せり此時世の
 中何となく騒がしく獨乙に於ては諸所に戰亂起りたり。

さてまた教會は大に亂れれば之を改め正さむとて法皇は諸國の司教
 を召し寄せトリエンテ町に於て大會議をぞ開きける是は世に有名なる
 大會なり多くの司教は互に其意見を吐き教會を改革するの議を定めけ
 るが聖人は此時ミラノの大司教なり自ら率先して熱心に會の規則を設
 け教會に於てそを守るべきのみならず家に歸りても必ずそを背かぬや
 うなし司教の身分に於ても是迄は其位に依りて表服を飾り乗物を美し
 くなし多くの僕丁を引隨儀式をのみ事とし美しき行装をもて誇る習慣
 なりしをば聖人は之を改め正し自己は大司教なるものから僕丁を廢し
 成るべきだけは費を省き衣服飲食總て儉約質素を旨とし祈禱を長くし

て折々禁食をなし、且は聖父及教師等にも其位の尊き事を教へ其務の忽
 ならぬを語り其役の世間に交り世俗に雜るべからずして専ら神に事へ
 人々の靈魂を救ひ人々の爲に祈禱するものなるを諭し自ら先だちて
 改革の道を取り只管に熱心と温和なる方便もて務め勵みければ皆々感
 服奮起して聖人に倣ひ人民靈魂の事をぞ考へける。
 多くの行者の中には金錢數多持ち居しものありければ聖人は其人々に
 就きて御主の一世は貧究にて少しも身の爲に金錢を使はれず總て人を
 救ひ民を助けたるを懇に説き諭し皆其行を改めさせけりかくして信
 者の眞正の親となり病人を憐み貧しきものを恵み時に自ら貧者の家を
 訪れて之を慰め勵し富貴の家には他の人をば遣して教の道を説かせた
 り誠に聖人は衣類器具等あらゆる我所持の物を賣りて之を貧しき人々
 に施し自らは全く一の貧しき人の如くなりしかば人民は之を見て感じ
 て涙を流し聖人の教に従ひて道徳を守りけり聖人は是にては修行足ら

ずと思ひ衆くの人の爲に徹夜眠らずして祈禱し或は惡人あるときはそ
 が爲に長き祈禱を神に捧げ其改悔を願ひ夏も冬も衣服は唯是薄き布子
 の如きものを纏ひ眠るにも板もて敷る上に臥して衾といへるものなし
 寒き夕暮き晝少しも道を怠らず人々其あまりに酷き行狀に身軀を害は
 ひとを感じ危うがりて少しは休息たまへといへば聖人は少しも聽さず
 吾軀はミラノの町の信者の爲に犠牲として神に捧ぐるなりと申されけ
 る此を聞くもの誰かは涙を流して感ぜざらむいと惡しき人も聖人の
 言葉を聽き柔和なる姿貌に見えて其教諭により心を改め善良の道に歸
 するもの多かりし。

茲に又彼のルーテルの異教は不品行なる人民の喜び従ふ所となり日
 に増し盛になりけり抑も此異説はルーテルの言に何事を爲さずとも
 唯々キリストを信すれば助けらるべし惡魔を憂うるに及ばず親の心
 を煩はすを咎めず人々其心に任せて其爲さんと思ふことを爲すべし

人は自ら主人なり人は其の心自由なりとありければ意味なる文字をも得知らぬ無學者等こは面白き教なりとて我も我もと集り従ひ其の品行はいよく善からぬ事多し或侯は不品行の人なりしがルイテルはそれを咎めぬのみならず即てそが爲に周旋して二人の妻を嫁るとを許しけり是まことにキリストの教に背ける異教にしてルイテル自ら吾教は初のはどは道徳もありけれど後に亂れたるもの多しといへるをもても其教の良からぬを知るべし。

さて聖人カロロの更に有り難き聖人なるとの最よく顯はれしはミラノの町に疫病飢饉の流行し時なり此疫病はペストといひて其勢猛烈に死するもの日々数千の多きに及び之が救助を爲すべき政府の吏員或は貴族の人々は悉く恐れ暇き自己の身の危きを避けて他に逃れたれば疫病はいよく烈しくなりぬ或人聖人に勧め此病に罹らぬやう避けたまへと申しけるを聖人は聖書を引きて眞正の牧者は其羊の爲に死すと言へ

り故に吾は此に留りて斃るまでは救助に力を悉すべしと答へてそれより晝夜の別なく諸所を巡回し病みたるものは之を慰め死したる者は之を葬りぬまことに此疫に罹るものは七顛八倒の苦を受け道路にて倒れ其まゝ死するものさへありされば到る處に呻吟の聲聞え行倒の死骸を見ざるとなき状態にて慘ましきと限なし聖人或時通行せる路の傍に一人の小兒死せる其母の傍に臥し居たるを見て之を憐み救ひ歸りて養ひけりかくの如くペスト病の勢少しも衰へざるゆゑに聖人は其病に罹らざる信者を呼び集め神の救助を祈禱し先づ聖人は跣足となりて其首に細を掛けたり是は時の風俗にて罪人の法場に曳かれゆく時に爲すものにて聖人自ら罪人の状態を示せるなり聖人の斯る熱心によりてさしものに荒れたる疫病も次第に勢衰へて終に全く跡を絶つに至りけり多くの信者も愛徳深く能く互に看護の勞を執り全癒せるもの少からざりし此悪疫跡を絶ちしかど次に再び難義出て來ぬそは長き疫病の爲に人々其

日の職業を爲すもの少く耕作またく爲し得ざりければ五穀糶らず忽に大飢饉をぞ起したり聖人はやがて疫病を避けて他に立退し貴族の人々の許に行き其人々が疫病を恐れて人民を救はず自己等の安穩なるを謝し償はむとを論し多くの金銀米穀を出さしめて窮民を養ひ助け病院を建て病者を看護し孤兒院を起して寄邊なき哀なる孤兒を育てけり其盡瘁の至らぬ限なきと思ふに増したる功績なり。

彼のルイテルは斯る時如何にありしか抑も獨乙當時の制度は我封建時代の頃と同じく萬事壓制をもて人民を支配しけるがルイテルは吾教を信ずれば汝等人民は自由を得べしと説き政府の命令に背くも皇帝に逆ふも亦自由なりとありければ無知の人民は大に騒動し國中謀反の兆あり皇帝侯伯はこれを鎮めむとて用意頻なりけるがルイテルは或侯の許に至りかりにも悪人たるものは之を殺して可ならむと言ひければ侯伯は其意に従ひ人民を殺し數年の間騒動絶ゆるとなく實に

惨しき狀なりしされば是等の結果として饑饉疫病流行し死するも數多かりけれどもルイテルの同派の飲酒に耽りキリスト教を誹り自己等が誘なふて起せし騒動につき人民の無知を嘲りたりかく不品行なりしルイテルは其死する時愛せる妾と共に住みけるが妾或時天のいとよく晴れ渡りて清らかなるをながめて實に美しきものは大空なるかなと言ひしをルイテルは聽きて其美しきは吾等が爲には非ずと嘆ちたり此時より毎日悪魔に壓はれ此にも魔あり彼にも魔ありと嘆の別なく叫喚て終に落膽失望してぞ死したりける異端を始めし人の身こそ憐なる。

それに引きかへて聖人は教の爲道の爲に種々の勞苦を重ね大に肉身を損ひて次第に病身となり既に終近くなりし時靈父等を戒めて申されけるは神に祈禱し人民に道徳を説き教へ必ず他の俗事を思ひ煩ふと莫かるべし決して務を忘れ怠るとなかるべしとて其言いと篤に深切なり又

行者に對しては常に貧しく其身を生活て高く其心を持ち人民を憐み施しを爲し苟にも道につきては勇氣を奮て之に従ひ神の榮光を衆人の上に顯明ならしむべしと遺言し眠るが如く逝りたり其時御主顯れたまひ聖人の容貌はまことに麗はしき喜悅の色を呈し靈魂は天にぞ上りける其齡四十六年なり。

今聖人カロロの傳に合せてルーテルの事蹟を有のまゝに引證し別に評論を加へず讀者よく判断すべし。

聖マルチノ 司教

十一月十一日

聖マルチノは御降生后三百十六年パンノニヤ國のザバリヤといふ所に生る(パンノニヤは昔羅馬の所領なりしが今は埃地利の版圖にさせり)父は武官にして勇武の名譽高き人なりしかば聖人も幼少より武藝を好みて常に朋友と遊び戯るゝ時も戦争の事のみなし弓とり太刀もちて奮と

せしが十歳の時或朋友に誘れて教會に行き始めて天主の教を聴聞せしが聖人は性質英敏して小兒心にも深く感じ夫よりは日々行きて教理を學ぶを樂となし早く信者とならんとて洗禮を望みしが未だ幼少なるものれなばとて赦されざりしかば志願人となりてひたすら教理を學びて怠りなかりしが隙行く白駒の疾く過ぎて聖人は十七歳になられし頃征討の事起りしかば聖人は父に代りて多くの兵士引卒て同じ羅馬の所領なる佛蘭西國に趣きしが武人といへば兎に角に性質粗暴く良からぬ事を爲す者多き者なれど聖人は年の若きに殊勝にも言行を慎みて兵士を勞り人々を愛し殊に貧者に目を懸けて慈善の行多かりしが或時聖人馬に乗りてアミエンスといふ所に往く途中頃しも冬の最中にて殊に雪さへ降り積る寒さ烈しき時なりしが路に一人の乞食の此の寒空に身軀にはまどふ衣さへ荒布にも劣りし者を肩にかけ寒にこゝへ尙更に餓へて歩行も出来かねて道の傍にうづくまりて其状態の實に憐れに見ければ

聖人これを見て不憚に思ひ何がな恵み取らせんと衣のかくしに手を入
れしが折悪しく此日は何も持たざりしかば如何はせんとしばし思案し
て在せしが忽ち軍刀引き抜きて自ら上にまといたる外套を半は切りさ
きてこれを乞食に與へられて志す方へと至られしが聖人其夜の夢に御
主は數多の天使召し連て手には外套の半を持ち顯れ給ひて天使に向ひ
今日マルチノは我が爲めに此外套を與へたりと宣ふと見しが忽ち夢は
醒にけりこれ御主は聖人の愛徳を試んとて假に乞食の姿に顯れたまひ
しなり聖人一層洗禮を受ることを望み靈父を尋ね十八歳の時洗禮を授
り信者とこそはなられけれ其時戦争も止み世はあだやかになりければ
聖人心に思ふやう今日までは國家の爲めに働さしが此れよりは神の爲
に働かんと武藝を止めて傳教をなしたり其頃佛國の北部に聖ヒラリヨ
といふ司教おはせしかば聖人は其弟子となり聖ヒラリヨも聖人の熱信
を見て深く愛し靈父となるを勧め聖人も喜んで神に身を捧んと決心せ

しが茲に聖人にとりて大なる心配ありそは未だ生國に在す両親も又其
親類者輩も天主の聖教をば守らざるものなれば聖人司教の許可を願ひ
國に一度歸らんと旅行の用意もそこくに遙けき道を只聖人峻嶮道も
徒歩にて道を急ぎしが世にも有名きアルプ山を越ゆるとき夥多の山賊
に出逢ひて已に生命を危かりしが聖人さすが武人にて在せし身の少し
も恐れず詞靜に盜人を誡めて其惡き行を責め人には無朽の靈魂あり天
には義賞義罰を行ふ天主あり汝等早く惡行を改むべしと種々に詞を盡
して諭し給へば罪惡無道の山賊も人の心は元善なれば深く感じて改悟
なし惡しき所業を打ちすて善人となりしとぞ。
偕て聖人は多くの旅路を遙々と戀しき古國に歸りしが夫れより両親は
いふもさらに親類の者を呼び集め教の事を熱信に説きて神の道を歩む
様勤めし甲斐は顯れて母親初め多くの人々信者となりしが父は頑固に
言ひはりて其勸をばうち入れざるこそ是非もなく聖人再び父母に離別

を告げて聖師の在す佛蘭西へ戻りければ夫れより後はヒラリヨに從ひ處
 處に傳教して人々に人と生れし上からは如何なる者も皆共に必ず基督
 に從はざれば救を得ずと説き勸め聖人道徳日に高く其熱信月々に深く
 なりしかば今は多くの弟子も出來其名聲も擴まりしが或時聖人他所に
 行きしあとに其弟字の一人未だ洗禮を受けずして俄かに病死なしたり
 しが聖人歸りてこれを聽き神に祈れば不思議にも今迄死せし其弟子は
 忽ち蘇生して洗禮を受けたるこそ尊けれ其頃トウルといへる所の司教
 死去しかば人々聖人の徳を慕ひ土地の司教を戴かんとしきりに乞しが
 聖人謙遜にして承諾せず遂に去ばらく身を僻地に隠したれど人々熱心
 にこれを探し乞ひて止まざれば聖人も今は黙止かねて司教の位に昇ら
 れしが益々謙遜にして小なる家に住みしが今は弟子も數多殖へければ
 一の大なる修道院を設立し弟子と共に其内に住み嚴しき規則を設け熱
 信に勉勵み書物を著し又其頃は未だ活版業も開けざれば古き書物を寫

して後に傳へ若き者は所々に教を傳へ老年なるものは祈禱を爲し其着
 へるものは夏冬ともに皆只一葉の荒き布にて作りしもの食物としては實
 に粗末の物のみを日に一回と定められ身を攻め己に克ちて修行せられ
 たれば當時佛蘭西獨乙の司教靈父は皆聖人の弟子より出てたりしとぞ
 或時其邑に争論起りしが其原因を尋れば其邑は聖人の爲めに化せられ
 信者となりし者多くして不信者としては僅なりしが其邑に一の大なる偶
 像のために建てられたる寺院ありしかば人々はこれを天主の聖堂に改
 築なさんといへども外教人はこれを拒みしための争なりしかば人々は
 聖人の所に至り其裁判を願ひければ聖人は皇帝の裁決を仰がんとて遙
 々自ら國都に趣きしが國王は拒みて面接する事を赦さず聖人不止得退
 きて七晝夜禁食して聖祐を願ひければ或日祈禱の時天主は天使を遣し
 明日王の所に行くべしと知されければ聖人大に喜びて次の日又國王の
 宮殿に至れば百官丁寧これを迎へ内廷に入りし時王は高座に在りて

却て迎へざりしが急ち火ありて王の座を繞りければこの不思議に國王は驚て出で迎へ請ふ所皆許し其偶像を祭れる寺院は教會となす事を許可したり聖人國に歸り極めて古代の偶像を毀ちたり其傍に大なる老松あり土地の人民はかへつて此老松を信ずる却て偶像より勝りければ聖人は其樹を伐りて外教の根を絶んと種々人々のあやまりを諭しけれど初めは深く愁ひて其樹を伐ることを許さざりしが遂に聖人の説に伏し聖人に申すやう我等はこの樹を伐るべし去る代りに御身は此樹の下に直立て居るべしといへり聖人之を誦し神の聖助を願ひ恐るゝ氣色もなく彼の樹下に身をすり寄せて待ち給ひしが伐ること凡そ半にして樹は聖人の方に傾き今や頭上に倒れんとしければ外教人は彼れ惡人なれば神の罰し給ふならんと勇み立ち多くの繩を樹に掛けて尙ほ聖人の上に引き倒さんとし聖人の弟子等は手に汗にぎり只管神の恩寵を祈れり其状態は物凄くも又恐しきことなりしが今や頭上に倒れんとする時聖人

更に動ぜず樹に向て十字架の印をなせば不思議や伐木忽ち翻て後への方へ倒れ外教人はからくも命を助かりければ皆驚きて其奇蹟に感じ信者とたりしとぞ實に聖人の行ひ給し奇蹟は數多くして記し盡すこと能はざれば只其一二を記さんのみ實に御主の聖言に爾芥種ほどの信あれは山に動けと命ずるも能はざることなしと誠なるかな此言や借又或時未信者の中に説教せしが或家の孩兒死して今其葬を爲さんとて此家の前を通りければ聖人は其談の證據の爲めにこれを呼び止め彼の死せし小兒を蘇生せしめれば人々皆驚きて其教を信じ信者となりしもの多くして佛國及獨乙國も聖人の力により多くの信者を殖せりと聖人常に其弟子なる靈父に諭されし詞に凡そ此世に於て高き位は靈父より上なるはなく此高き位に在ることを覺えなば罪を犯すことも少しく聖人言に靈父を尊みたるのみならず自らこれを實地に行ひたり或時聖人皇帝マクシミアノに招かれて一人の靈父と共に其宮殿に至り響應受し時其

國の縉紳も招かれしが皇帝は聖人を上座に置き又聖人の伴ひし靈父を其次の座に居らしめ皇帝先づ盃を聖人に與へ又自ら聖人の手より受けんとし給ひしに聖人は皇帝よりも靈父の位を尙重しとして其盃を皇帝に與へ給はず却て靈父に與へたり皇帝これを見て聖人の所置に感じ大にこれを譽め屢々聖人を招きて其教を聞き皇后も深く聖人を敬ひ自ら聖人を響應しこれが給事も他人の手を借らず自ら爲し給ひけるとぞ聖人御年八十一歳にして熱病に罹れしが病中天主に祈り給ふに何卒願くは我が靈魂を我が肉身の獄より出し給へと弟子等はこれを聞き何とてかくは祈り給ふぞ我等の爲め今暫し今世に在へ給へ天主にかく祈り給へと只管乞ひしかば聖人は神に向ひ若し人々の爲め我の如き者にても益あらば我れ決して此世の働き苦を辭し奉らずと病は益々重くなり給へども少しも其苦を顧みず石の上に臥し給はんとなしければ弟子等は大に驚きて床の上に居ることを勧めけれども聖人聞かずして御主は我

等の爲めに非常なる御艱苦を凌ぎ給へば我も苦みて死なんと遂に三百九十七年十一月十一日御年八十一歳にして此世を去り給ひき此時空中には音樂の音聞え喜の聲聞えけり其門徒の期せずして會するもの二千餘人其葬を送りたり今も聖人の御骸は佛國の中部のドウルと云へる町に在りて其昔より今日まで毎年十一月十一日には多くの人々集りて聖人の轉達を禱るとぞ。

聖セシリヤ 致命者

十一月廿二日

御主が説き賜ひしが如く富める者は教に入り難きものにて教會の歴史を緝くときは何國も皆教の道に入りし最初のもは貧賤者のみさるは貧しきものは心に足らぬ事多かるゆゑ自然に人間以外の尊きものを崇め我心身を之に頼らむとし邪心少くして道を守るに易し富めるものは目前の聲色に迷ひ肉身の樂に耽りて更に人間以上の崇きものに身心を

頼ることを思はず、邪欲の心自然に深く眞理を求むるに疎なるが故なり。されば富めるものにて眞理を究め安樂にして教に入るものは殊に俊れたる賢人君子なるべし。長き年月の間には富貴の人も貧賤人の正しき行爲を見て心に愧ぢ教に従ふもの少からず。古羅馬帝國に信者の殖えし状態は今日日本に信者の増せる様と異りたるとなし。閑話休題、茲に聖女セシリヤは御主降世後二百三十年の頃羅馬の都に生れたり。家は榮えし華族なるものから羅馬は此頃多くの信者ありて貧しきもの先づ教に入り品行正しく舉動誠直なりければ聖女は若き折に此事を見聞し聖書を繕きて深く感じて教に入りたり。兩親は外教者にて未だ信者とならず。此は羅馬の風習として學問教の事の如きは其弟子の心まかせなりければ聖女も兩親に拘らず一人信者となりしなり。聖女は華族の身にしあれど少しも傲慢の様子なく貧しき人も賤しきものとも隔なく交際し致命せし人々の談柄など喜びて聞きけり。

志かるに奉教人窘逐は益盛に行はれ、およそ信者は公に集りて祈りなごすること能はざりしゆゑに都の片隅に地を深く掘りて洞穴を作り、密々此處に集りぬ。聖女は同じ華族の嬢と貧しき女と三人にて別に所を撰び集りて諸共に此世の事をば皆捨て善なる教の道を進みゆかむことを語り神に身を捧ぐるとをば誓ひたり。これは教會にていへる童貞の誓約なりけり。

茲に華族の中に賢明の聞高きワレリヤノといふ壯年あり、何時しかセシリヤの品行正しく姿美しきを見て其才女なるを聞き、妻にせむと思ひて此由セシリヤの兩親に言ひ入れければ聖女は兩親は素より聖女の心を知らず其佳婿なるを喜び直に承諾したりしかば、聖女は聞きていと驚き童貞の誓を立て神に捧げし身を如何にせむと深く憂苦に沈みしが思ひなほして神に委せなば必ず救ひたまはんと決必し、それより一層熱心に誓を破らざらむことを神に願ひ祈りけり。當時童貞の多く守られし所由

を案ずるに第一は深く神を愛し信ずるより、我肉身の自由を捨て、神に捧げたるなり。第二は親の勸によりて、未信者と婚姻するは此上もなき苦しきとなれば、婚姻によりて苦を求めむより、事終身童貞にて神に事ふるこそ自由なれとの心よりかくは童貞を守るものありけるなり。當時の羅馬未信者は風俗大に悪く不品行多く信者たるもの斯る人々と終身居を同じくせむとは死するよりも憂しと思ふ程なりしとぞ。さてもセシリヤの家にては婚姻の調度全く具りければ、國の習慣として兩親及親族のものに共に聖女を圍みつゝ、やがてワレリヤノの家に移れ行き其門に至ればワレリヤノは儀式の如く聖女に家の鍵を與へたり。こは今日よりは爾は此家の支配者なりとの意を表したるなり。又清き水一杯を與ふ、こは爾の心は水の如く常に潔くして、夫に對し貞操を破るべからずとの意を示せり。かくて式すみ客なる人々には山海の珍味を饗應し、皆歡を唱へて夜深る頃にぞ歸りける。聖女はワレリヤノに導かれて室に入り唯二人とな

りしが、良久ありて言語を改め少し談したき事ありと言へば、ワレリヤノは何事にやと問ふ。聖女少しも隔さず有の儘を語り、我身は基督信者にて神に身を捧げ終身人と交をせぬ誓を立てたり。されば我身には天使常に付き居りて護るが故に、君若し我身に手を觸れば、天使は忽ち君を殺さむ。又我詞を信じ信切なる心をもて、我身を一人に在しめば、天使は君をも護るべしと申しければ、ワレリヤノは更に其意味を解せず。驚き怪みこはセシリヤ我を嫌ひ他の男に行かむとして、斯くは甘言をもて我を欺くにやあらむ。必定天使といふものこそ其が仇男なるべしと推し測り、少しく怒の言もて汝は今より我妻なり如何てさる事をば言はずべき好しや。天使ありとも我身を殺すべしと言ひければ、聖女はワレリヤノが誤りし心を察し、まづ基督教の理を説きて丁寧語り聞せ、さて天使は守護として人の側に在るは珍らしく怪しきとにはあらず。君若し信者となるならば、明にそを見るとも協うべしとて道理を盡して説きたりければ、ワレリヤ

ハは深く心に感じ漸く聖女の言葉を信じ如何にせば信者となることを得べきやと問ふに聖女は此に心を安じ此羅馬の町に教皇ウルバノといへる一人の老翁あり此人に就きて總ての道は分りなむと其居る所を教へしかばワレリヤノは明日ともいはず其夜家を出て教皇の許に行きけるに折しも教皇と共に在りし信者等之を見て彼は未信者なり必ず教皇を殺すならむとて其所に入れざりしをワレリヤノは我は未信者なれども汝等に害をなすものにあらずセシリヤの詞によりて來りしなりとて漸く内に入るを許されさて翌日に至りて教皇は怒に教の信すべき事ども説き諭しければワレリヤノは大に喜び我不明にして今日まで此尊き教を知らず打過ぎたるぞ無念なれとて信者とならむことを熱心に乞ひければ窘逐の盛なる折に斯る人は得がたしとて教皇に洗禮を授けたりワレリヤノの喜はいふまでもなく時の法皇は聖女セシリヤが外教人と婚姻せるを知りしかば如何にするやらむと憂慮の折柄なれば之を聞

きいとめてたしとて喜びたりワレリヤノは明る日我家に歸り室に入らむとせしほどに聖女は今しも祈禱の最中なりしが美しき容顏の輝きたる人側に立ちたりワレリヤノはこは天より降りし天使なるべしと思ひ急ぎ平伏せしに彼の天使は手に二の美しき冠を持ちて一は聖女に一をワレリヤノの頭に戴かせたりワレリヤノは益々驚き感じ信仰いや増しつ前に言ひし聖女の詞を思ひ當りければやがて靜に申すやう我身かくなりていと幸福なるものから深く愛する一人の弟あり名をチブルシオといひて未だ此幸福を受けず願ふは天使の厚き恵に頼りて教に入らせたまへかしとぞ乞ひけるを彼の天使はそは難きとにもあらず近きうちに信者となるべしと言ひてやがて形は隠れたり。

一日を経て彼の弟チブルシオは兄の婚姻を祝はんとて來りければワレリヤノは急ぎ招き入れて此度の喜ある幸福の事ども語りしに弟は少しも其意を知らず唯迎へし妻の心に適ひたるを喜ぶならむと思ひけるが

ワレリヤナが始終を詳しく語り此教に頼らざれば行末の眞の幸福は得らるべからず汝今日まで拜せる偶像は何の幸を與へざりしなりとて説きけるを、チブルシオは基督の教は只悪しきものとのみ思ひ居しとなれば初のほどは彼此抗ひたれどワレリヤナが熱信もて神に祈りし効ありて終に信者とならむことを求め打擧げだちて教皇の許に至り尙も詳しく道を聞き洗禮をば受けたりけり是に於て聖女はワレリヤナ、チブルシオ兄弟共に三人一所に住みつゝいと幸福なる生活を爲し居たりしが當時信者を窘逐すると益烈しく或は刑せられ或は亂殺され屍は路に横はると雖も非むるとを禁ぜられたれば罪を懼れて手を下すものなく日に曝され露に濡れ鳥の群狗の餌となるべきを、聖女等三人はいと無慘なるに思ひ禁を犯し夜密に巷に出て、聖人等の尊き屍を拾ひそを懇に葬りけるを、町奉行はいと怪み何人の所爲ならむと厳しく之を探らせしに三人の爲せし事と分りたれども華族の事とて、かりそめに捕ふとかなは

ず翌日人を遣はしてワレリヤナとチブルシオを招きたり兄弟は町奉行所に至りしに奉行は言語を正し卿等は貴き華族にてありながら彼の賤しき基督信者の死躰を埋められしは心得ず彼等と何の關係やるやと訊ねたりワレリヤナ答へて申しけるは基督信者には貧しきもの賤しきものとして區別を分たずされば我等之と交際ことを恥とせず羅馬帝國廣しと雖も基督信者の如き道徳者一人もあるべからず此教に頼らざれば眞の道徳者となりて福を受け難しされば信者と未信者とは人獸の差異あり我等も之を思ふて信者となりたり思ふに今日奢侈に耽りて不品行なる他の華族の人々も必ず其惡を悔いて心を改め信者となるべしとて教の道を説き明しぬ奉行は之を聽きて大に怒り密に二人を殺さむことを命じたりワレリヤナは再び彼に向ひて我等は死するとを少しも恐れず汝は我等を殺して苦を與へむと思ふべけれど我等はそれによりて却て幸福を受くるなれば喜びて死すべしとぞ申しける側に聞き居し役人の

中に身分あるマチモといへる者ありしが、ワレリヤノの語に深く感じ、直に我も信者なりとてワレリヤノ兄弟と共に終に殺されける。さて奉行は素より愁深き曲徒なりければ、翌日人をして兄弟の家に行かしめ、財寶を奪はせんとしたりしが、聖女は早くも兄弟の殺されしを聞き、町奉行の貪欲邪惡にて國神を崇むる爲に信者を殺すにあらず、自己の欲を遂げむためなるを悟り、急ぎ財寶を纏め盡くこれを貧しき者に與へ分ちけり。町奉行は案に違ひて大に怒ると雖も、聖女の親なる人は權威強きものなれば、公に奉行所に召し出すことかなはず、されば人を遣りて偶像に供物せずば、苛き目見せむと言はせけるに、聖女は彼使者に對ひて、偶像に物を供ふるとは惡入ならずば、愚者の所爲なり、智慧と徳とあるものはさる不正事は爲しがたし、神は天地に唯一なり、此神に事へて眞正の教に従ふべきこそ人間の本意なれとて、深切に述べければ、彼の使者忽ち改心し、悔い悟りて信者とならむことを願へり。聖女はやがて教皇の臨場を乞ひ、詳しく

教を説き、彼の人に洗禮を授けたり。彼の人それより知己親類の者を招き説きて、信者となし、よりに我も我もと續きて神の道を慕ひ、其日のうちに洗禮を受けたるもの四百餘人と數へらる。奉行は之を聞き、ていよく怒り、聖女を殺すべきよし命じたれども、公に手を下し難ければ、一計を案じ、風呂場を作り、此羅馬の風呂は日本のものと異なれりて、何事もなき鉢にもてなし、聖女をそが中に浴さしめ、火を強く焚きて、蒸氣の爲に息を絶たしめんとしたりしが、聖女は其中に入りて、少しも苦まず、神に感謝の祈念を爲し居たり。奉行其効なきを見て、此度は白刃をもて斬ることを命じたり、やがて役人は聖女を押し据て背に回し、法律の如く三たび切りたれども、斬りつくさず、聖女の苦痛は如何なりしか、實に思ひやるだに、惨しき限なれども、少しも苦しき氣色なく、四圍に訪ひ集れる信者に向ひて、必ず神の道を離れざるやう勵まし、慰め、今ぞ肉身の刃の光に斬らるゝを、ぞ更に知らざる様子なりしが、程なく首は屍を離

れける芳期正に二十歳待宵の月の隠れたるが如くなりけり。

聖カタリナ 致命者

十一月廿五日

今は昔降生後四百年の頃埃及國のアレキサンドリヤといへる所は其頃の皇帝の都にて宮殿樓閣費を駢べ市街繁華にして商業工業さては文學の事に至るまで盛に榮えたる都なり時の皇族多く此都に住ひけるが中に某家にカタリナと呼べる一人の姫嬢ありけり富貴榮達兩がら兼ねたる家柄なれば宮殿廣大にして錦の布もて飾れる室金銀珠玉をもて作りたる器具はいふもさらなり日常の生計の奢れると目を驚かすばかりなりさればカタリナは多くの綺羅を飾れる侍女にかしづかれ眠るには深窓の暖かさ衾に臥し起ては珍卉奇木の植られたる庭園を歩み思ふて協はぬ事となし稍長ずるに及びて學問を好み教師として此國の有名な學者を招き日々勉めて斯道を修めけるがカタリナは性質敏慧して事

毎に意を注ぎ女子には似氣なき哲學を好み深く此學をば學びはげみけるさて次第に上達するに及びていよく疑はしき節々多く心に出て來り查ぶれば查るほど臆なるとのみ多く終に萬物の起源は何物ぞ人は肉身のみにて生命あるかはた別に消ぬ靈魂なるものあるにやなどの疑ひ胸に浮び來り深く之を研究せむことを思ひ普く學者に就て質問しけれども皆心に満たぬとのみなりけり當時基督教は此國に盛に布教られ教の要理を解き明せる書冊も作られしが或時一部の聖書圖らずも聖女の手に入りければ喜びて之を繕き讀むに日頃研究せむと思ひし萬物の起源を明に説き天地間の萬物は皆全能なる神の創造たまひしものにて人間も亦神の造化たまひて不滅なる靈魂をば與へられ其人々の行為心術の正否如何によりて將來の公明なる義き賞罰あることをいと深切に記されければ聖女は初めて斯かる道を觀たることとて宗教の事を大に感じ依りて數日の間此事を考へ熱心に理を究むるとを念ひ居けるに或

日夢ともなく現ともなくいと美しき氣高き姿の帝王の后とも見ゆる貴女玉の如く麗はしく輝ける嬰兒を抱きて我前に現はれたりやがて貴女はカタリナの傍近く寄り美しき容貌に笑を含みて深き愛惠の眸をもて聖女を見しが彼の嬰兒は聖女を見急に驚きて外處に顔を傾けたり聖女は之を見しのみにて其後の事を知らず夢の如く茫然たりしが良久にして我に返りさるにても不思議なるとなりとて是をも多くの學者に問ひ質しけれど知りて之を解き明すものなし最後に逢ひたる人に基督教の教師ありしがそはいと有り難き示現なり皇后と見えしは救世主の聖母マリアにして嬰兒はすなはち救世主なり顔を反けたるは聖女の教を知らず未だ之を信ぜざるを以てなりと説き明せしかば聖女は大に驚き感じ尙種々教につきて説明を得心に確と悟り今迄研究し哲學をもて推し考ふるに一々其理に適ひ更に疑はしき事なし茲に全く日頃の雲をかきわけて眞理の光輝ある教を求め道に入り其宗教の力に依りて學藝益々

進み國中に聖女と議論なすべき哲學者は一人もなき程にぞなりけりしかるに時の國王は我皇族に斯る俊れたる教の人あると夢にも知らず唯國中の教の道日々盛になりゆくを妬しきとに思ひ教を掃ひ除かむと案じやがて一の命令をぞ發しけるそは此アレキサンドリヤに在る一の寺院に大なる祭典を催しおよそ此町に住めるもの如何なる人と雖も皆應分の供物を捧ぐべし萬一命に違反ものは必ず酷罰あらんとなり之を聞きたる未信者さては奉教人の信仰いと薄きもの共其資産を愛み我職に離れむとを恐れ只々目前の苦しむ懼ろしく思ひて眞の道に暗きもの競ふて捧物をば供へけれども眞正の心直き人々は我々は神の信者なり斯る物に供物を捧げ難しとて皆顧みざりけり聖女は此時公明に我は信者なりといひて衆多の人々の中に立ち偶像は眞の神にあらず供物を捧ぐ可らず汝等かならず迷ふ勿れと力を盡して之を訓へ勵し直に國王の宮殿に至り皇族の事なれば程なく王に謁見し此度の命令はいと心得